1　共同研究

［概　要］

「共同研究」は，大学共同利用機関としての歴博が国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり，研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向をふまえて設定されてきた。共同研究の特徴は，1981年に機関設置されて以来，歴史学，考古学，民俗学および関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本をおいてきた点にある。

「共同研究」は，「基幹研究」「基盤研究」「開発型共同研究」および「人間文化研究機構関連共同研究」の４つの柱から成り立っている。「基幹研究」は人間の営為と歴史に注目した大きな研究課題の下に学際的研究を目指すテーマを設定したものであり，「基盤研究」は館蔵資料の高度情報化や新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定したものである。この２つを「共同研究」の核とすれば，「開発型共同研究」は，任期付き助教への若手研究者育成を目的とする共同研究であり，今後に発展しうる萌芽的課題を設定することで，「共同研究」全体を実りあるものとする役割をも担っている。「人間文化研究機構関連共同研究」は人間文化研究機構が設定した課題に基づき歴博が主体となって取り組む共同研究であり，今年度より開始された。

本年度の「共同研究」は，「基幹研究」５課題，「基盤研究」16課題，「開発型共同研究」２課題の計23課題について進めてきた。うち基盤研究４課題が本年度よりスタートしたものである。以下，本年度新たにスタートした新規課題を中心に説明を行う。

【基幹研究】　基幹研究は「民俗表象の形成に関する総合的研究」と「新しい古代史像の樹立のための総合的研究」が引き続き進められた。前者は2013年（平成25）３月の展示リニューアルをめざしたものであり，後者も今後進められる総合展示のリニューアルのための学術的基盤を高めるための共同研究であって，共に歴博がめざす博物館型研究統合の実践例として位置づけられる。

【基盤研究】　本年度は多元的フィールド解析研究として「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」が，歴史資源開発研究として「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」が開始された。前者は千葉県内をフィールドとし，千葉県立中央博物館の研究者等と連携して自然資源利用の歴史を検討対象としたものであり，後者は通過儀礼や年中行事を中心に現代の民俗儀礼の動態を明らかにしようとする研究である。このほか公募型共同研究として「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」「柳田國男収集考古資料の研究」の２本が採択となり，開始された。

【開発型共同研究】　「縄文時代の人と植物の関係史」「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」の２本が継続して進められた。

【人間文化研究機構関連共同研究】　連携研究「「人間文化資源」の総合的研究」のブランチとして「正倉院文書の高度情報化研究」「近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究」「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」の３課題，日本関連在外資料の国際共同研究をめざす「日本関連在外資料調査研究」として「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」の２課題，

さらに活動提案として「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―」が引き続き進められた。

以上の研究のうち「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」では共同研究員の公募を行い，７名の応募に対して２名を採用した。また共同研究経費の運用においては，選択と集中の観点から共同研究と連動した科研費の採択分を有効活用して，新たに基幹研究および公募型共同研究の重点化などに充当し，効率的運用に努めた。

共同研究担当　小倉　慈司・柴崎　茂光

平成23年度　国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題	年度						
		21	22	23	24	25	26	27
基幹研究	◇民俗表象の形成に関する総合的研究（本館･民俗研究系　准教授　小池淳一　他）							
	（１）【高領域歴史創成研究】歴史表象の形成と消費文化（本館・歴史研究系　准教授　岩淵令治　他17名）							
	（２）【多元的フィールド解析研究】地域開発における文化の保存と利用（本館・民俗研究系　准教授　青木隆浩　他16名）							
	◇新しい古代像樹立のための総合的研究(本館･考古研究系　教授　藤尾慎一郎　他)							
	（１）【広領域歴史創成研究】農耕社会の成立と展開　－弥生時代像の再構築－（本館・考古研究系　教授　藤尾慎一郎　他17名）							
	（２）【広領域歴史創成研究】新しい古代国家像のための基礎的研究（本館・考古研究系　教授　広瀬和雄　他18名）							
	（３）【多元的フィールド解析研究】旧石器時代の環境変動と人間生活（本館・考古研究系　教授　西本豊弘　他13名）							
基盤研究	◇多元的フィールド解析研究							
	（１）日本の中山間地域における人と自然の文化誌（千葉県立中央博物館　生態・環境研究部長　原　正利　他17名）（館内担当西谷准教授）							
	◇歴史資源開発研究							
	（１）江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作･流通に関する調査研究（本館・情報資料研究系　准教授　小瀬戸恵美　他12名）							
	（２）歴史・考古資料研究における高精度年代論（本館・情報資料研究系　准教授　坂本稔　他13名）							
	（３）建築と都市のアジア比較文化史（本館・情報資料研究系　教授　玉井哲雄　他15名)							
	（４)高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究－『死･葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に－（本館・民俗研究系　教授　関沢まゆみ　他11名）							
	（５）民俗儀礼の変容に関する資料論的研究（本館・民俗研究系　准教授　山田慎也　他19名）							
	◇先端博物館構築研究							
	（１）洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究（本館・歴史研究系　教授　小島道裕　他16名）							
	（２）デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究（本館・情報資料研究系　准教授　鈴木卓治　他11名）							
	（３）民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究（本館・民俗研究系　准教授　内田順子　他14名）							

	（4）古代における文字文化形成過程の総合的研究（本館・歴史研究系　准教授　小倉慈司　他21名）								
	（5）近現代展示における歴史叙述の検証と再構築（本館・歴史研究系　准教授　原山浩介　他22名）								
	◇展示型共同研究								
	（1）「地理写真」の資料化と活用（本館・歴史研究系　教授　青山宏夫　他16名）								
	（2）中世の技術と職人に関する総合的研究（本館・考古研究系　准教授　村木二郎　他17名）								
	◇公募型共同研究								
	（1）元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究（神戸大学大学院人文学研究科　教授　藤田裕嗣　他９名）（館内担当玉井教授）								
	（2）高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究（九州大学大学院人文科学研究院　准教授　靜永　健　他11名）(館内担当井原教授)								
	（3）柳田國男収集考古資料の研究（東京大学大学院人文社会系研究科　教授　設楽博己　他７名）(館内担当工藤助教)								
開発型共同研究	◇縄文時代の人と植物の関係史（本館・考古研究系　助教　工藤雄一郎　他16名）								
	◇人の移動とその動態に関する民俗学的研究（本館・民俗研究系　助教　松田睦彦　他15名）								
機構関連共同研究	連携研究（大型）	◇「人間文化資源」の総合的研究							
		（1）正倉院文書の高度情報化研究（本館・歴史研究系　教授　仁藤敦史　他14名）							
		（2）近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究（本館･民俗研究系　准教授　青木隆浩　他11名）							
		（3）歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究（本館・民俗研究系　准教授　内田順子　他７名）							
	日本関連在外資料調査研究	（1）シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究（代表:本館･歴史研究系　教授　久留島浩）							
		（2）近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究　（代表：日文研・教授　鈴木貞美）（本館・歴史研究系　准教授　原山浩介）							
	連携研究（小型） 活動提案	◇ 中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究－京都と江戸－（本館・歴史研究系　教授　小島道裕　他６名）							

［基幹研究］

(1)「民俗表象の形成に関する総合的研究」
（総括研究代表者　小池　淳一）

１．目的

本共同研究は，新たな民俗展示の構築を目指し，次のような２つの大きな課題を掲げる。なお，これらの成果は，当館第４展示室（民俗展示）新構築とそれに関連したフォーラムに反映される。

近代以降,「歴史」や「文化」は，地域開発や農山漁村の生活，新商品の創出などの過程で,さまざまなネットワークを通して価値が再発見されてきた。本研究ではこうした価値の再発見とそれによって生み出されるものを「民俗表象」ととらえ，例えば国家や地域社会，企業，研究者，大衆，個人，国際社会などが，いかに関わり合いながらそれらを作り出しているのか明らかにすることを目的とする。

A班では,「流行の創出」の過程に，歴史学･民俗学･美術史学などがどのように関わってきたのか，また，生み出された「流行」が，どのように地域社会に展開していくのかを明らかにしていくことを主たる目的とする。B班では，大規模な自然の開発と，景観や文化の保存を目的とする様々な事業との関連において文化の資源化の検討を行うほか，そうした大規模な文化の資源化と，様々な祭礼や行事の変化との相互関係の有無についても検討する。

A「歴史表象の形成と消費文化」2010～2012年度
（研究代表者　岩淵　令治）

1．目的

近代以降における大衆向け商品の開発には，流行の創出が不可欠であるが，その中で伝統的なものに新たな価値を見いだし，過去の素材を利用する手法がある。その過程では，しばしば歴史学や民俗学，美術史学などの研究成果が取り込まれてきた。

例えば,「江戸」の表象は，近代化論における積極的な江戸時代の評価（「江戸時代の遺産」），バブル期の江戸東京学ブームから，近年の「江戸しぐさ」，江戸検定や日本橋地域などの都心部再開発における資源として様々に利用されている。また，博覧会や物産展は各地の名産品を生み出す場となっているが，それは歴史や民俗の理想型を示すことにもつながっている。あるいは，入学式と節句を典型として，家族の必需品と考えられているものが，実は企業によるマーケティング活動から生み出された新しい「伝統」であることが少なくない。そこで，本共同研究では，近代以降の商品開発にかかる伝統の創出と礼賛を，とくに学問との関わりから分析する。

研究対象としては，まず江戸の表象をとりあげる。「発見」される「伝統」の多くは,「基層文化」としての原始・古代と,「都市文化」としての「江戸」であろう。とくに「江戸」は，明るい庶民とその文化の誕生（鎖国→いわば第二の「国風文化」）の表象として頻繁にとりあげられてきた。しかし,こうした研究は，近代化論における江戸時代賛美（『江戸時代と近代化』）への批判が若干みられるものの，本格的に取り組まれてはいない。したがって，その一つ一つを時代背景と合わせて丹念にみていくことが不可欠である。そこで,「江戸」表象の原点として，大正期の「江戸趣味」の誕生とその大衆化に着目し，三越百貨店における「流行」の発明の過程とその方法を検討する。三越は，日清・日露戦後に「元禄模様」の流行を生み出し，さらに「伝統」的な要素もとりいれながら子供の「玩具」を商品化する。これを支えたのが，三越が「学俗共同」とうたう研究者・文学者・ジャーナリスト等からなる「流行研究会」の活動であった。そこで，都市史・美術史・経済史・民俗学・人類学・音楽史等から，当時の学問状況にてらしながら流行研究会の活動を多角的に検討することにより，①三越の商品化の過程でどのような「江戸」が発見されたのか，②そこに学問がどのようにかかわったのか，という点を明らかにする。

さらに，このような伝統を模した大衆文化の受容と展開が地方にもたらした影響について，産業史や家族史との関わりから検討する。例えば，名産品の創出は消費文化を変化させ，そのために産地間の競争関係をも変えてきた。また，年中行事や人生儀礼は，ある特定の階層や地域に限られていたものが商品化によって全国に展開し,「伝統」として各家庭に浸透していった。その背景としては，全国的に画一化された理想的な家族像が創出されてきたことがある。これらのような消費文化や儀礼文化，家族生活と商品化との関わり

については，日常にあふれていることであるが，これまであまり研究の対象になってこなかった。そこで，大衆文化の受容と展開については，地方での現地調査をもとに，現代を含めた実態の解明に取り組む。

２．今年度の研究目的

①基礎資料の調査・共有化

地域有力者の三越の商品の受容について，須坂市田中本家博物館を調査対象とし，未整理文書の目録化，モの資料の写真付目録を作成し，調査に入る。さらに，これらの目録データを研究員に配布し，共用化する。

②相互の問題関心の共有化

研究発表・質疑を通じ，共同研究者の問題意識を共有する。

３．今年度の研究経過

計４回の研究会，および３回の資料調査を行った。また，百貨店のＰＲ紙やパンフレット，および明治・大正期の百貨店関係や化粧品関係の資料を収集した。

【研究会】

第５回研究会　2011年７月９日

瀬崎圭二「流行研究会の文人たち」

井田太郎（ゲストスピーカー　国文学研究資料館）「稀書複製会叢書と文学研究」

第６回研究会　2011年８月21日

『WOMEN on the TOWN―三越とパルコ，花開く消費文化』（アド・ミュージアム）

「濱田庄司スタイル展」（パナソニック電工汐留ミュージアム）の見学

第７回研究会　2011年11月19日・20日

11月19日（於石川四高記念文化交流館）

本康宏史（ゲストスピーカー　石川県立博物館）「兼六園ブランドの創出―都市公園と消費文化」

丸山伸彦「幻の加賀友禅」

11月20日　見学（石川県立歴史博物館，兼六園，加賀友禅伝統産業会館）

第８回研究会　2012年３月３日～４日

青木隆浩「民俗展示の新構築の報告関連部分の概要」

表真美（ゲストスピーカー　京都女子大学）「食と家族―家族団らんの歴史的変遷―」

長沢利明「江戸東京の雛祭りと田中本家の雛人形」

山田慎也「民俗展示「行事食の変化」の展示」

古賀令子（ゲストスピーカー　文化学園大学）「かわいいファッションとカルチャー」

岩淵令治「本年度の研究の経過と来年度以降の研究計画」

【資料調査（田中本家博物館）】

2011年５月28日～30日　近代文書，写真付台帳の撮影

2011年12月28日～29日　近代文書，「大正らいふ」展の出品史料の調査・撮影

2012年１月22日～23日　近代文書，雛人形（明治期）の調査・撮影

４．今年度の研究成果

①基礎資料の調査・共有化

三越資料室所蔵の主要なＰＲ誌（『時好』『三越タイムズ』ほか）のデジタル化を完了した。また，地域有力者の三越の商品の受容について，須坂市田中本家博物館を調査対象とし，未整理文書の目録化，モノ資料の写真付目録を作成し，調査に入った。さらに，これらの目録データを研究員に配布し，共用化した。

②相互の問題関心の共有化

第５回研究会では，日本文学と「伝統」の創造をテーマとした。近代文学の瀬崎氏は三越のＰＲ紙に作品を書いた塚原渋柿園を，また近世文学については井田太郎氏（ゲストスピーカー）に明治・大正期の近世文学の発見に大きな役割を果たした稀書刊行会の活動をそれぞれ報告していただいた。

第６回研究会では，百貨店の広報活動をとりあげた企画展と民芸運動で重要な役割を果たした濱田庄司の企画展を見学し，知見を深めた。

第７回研究会では，伝統の商品化が顕著である金沢をテーマとして，研究報告と関連施設の見学を行った。本康宏史氏（ゲストスピーカー　石川県立歴史博物館）に，兼六園の設立と近代における観光化について，丸山伸彦氏に加賀友禅という「伝統」の創出について報告をいただき，報告と関連する石川県立歴史博物館，兼六園，加賀友禅伝統産業会館を見学した。

第８回研究会では，総合展示第四室の新構築の「『民俗』へのまなざし」の小テーマ「行事食の変化」および中テーマ「現代の家族像」のコーナーと密接にかかわる年中行事･近代家族･「かわいい」文化について，議論を深めた。

以上の研究発表・質疑を通じ，共同研究者の問題意識を共有した。

最終年度となる来年度は，①田中本家博物館の関係史料については，調査を完了するとともに分析をすすめる。②さらに研究成果の社会への還元として，総合誌『歴博』172号（７月刊行）の特集「共同研究　歴史表象の形成と消費文化」，および歴博フォーラム「「江戸」の発見と商品化―大正期の三越の流行創出と受容」（2012年９月15日　フォーラム本も刊行予定）において共同研究の中間報告を行い，25年３月リニューアルオープンの総合展示第四展示室Ａゾーン・Ｂゾーンの内容に成果を反映するとともに，26年度刊行予定の研究報告特集号に向けた報告と討論を行う。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

青木　俊也	松戸市立博物館	神野　由紀	関東学院大学人間環境学部
瀬崎　圭二	広島大学大学院文学研究科	田中　和仁	田中本家博物館
玉蟲　敏子	武蔵野美術大学造形学部	谷川　章雄	早稲田大学人間科学研究部
長沢　利明	東京理科大学	濱田　琢司	南山大学人文学部
藤岡　里圭	大阪経済大学経営学部	丸山　伸彦	武蔵大学人文学部
満薗　　勇	日本学術振興会		
青木　隆浩	本館研究部民俗研究系・准教授	◎岩淵　令治	本館研究部歴史研究系・准教授
内田　順子	本館研究部民俗研究系・准教授	久留島　浩	本館研究部歴史研究系・教授
小池　淳一	本館研究部民俗研究系・教授	常光　　徹	本館研究部民俗研究系・教授
原山　浩介	本館研究部歴史研究系・准教授	○山田　慎也	本館研究部民俗研究系・准教授

〔リサーチ・アシスタント〕
横山考之輔　立正大学大学院生
〔ゲストスピーカー〕
井田太郎　国文学研究資料館
表　真美　京都女子大学
古賀令子　文化学園大学

B「地域開発における文化の保存と利用」2009～2011年度
（研究代表者　青木　隆浩）

1．目的

地域開発と文化の保存は，従来相反することであった。経験的にも，地域開発は文化を大きく変容させ，反対に文化は開発の遅れた地域ほど古くからのものが残存すると考えられてきた。ところが，ホブズボウムらが「創られた伝統」という概念を用いて，一般に古いと考えられているものが案外新しく創られたものであることに注意を促し，さらに彼らの批判が皮肉にもその議論の前提となっていた本質主義の限界を顕在化させたことにより，両者の関係はますます曖昧に捉えられるようになってきている。実際にも，地域開発をきっかけとした文化の保存，反対に文化を保存するための地域開発が，とくに経済難の深刻な周辺地域で行われている。

前者はまず，ダムや空港の建設を典型とした大規模開発において，強制的に消滅を迫られる地域独自の文化をどのような手段で残すかという問題と関わる。これについては，単なる記録保存を目的とするものから，新たな観光資源の創出に至るまで，様々なパターンが存在する。例えば，ダム開発は地域外からの労働者と金銭の流入を招き，地域社会を大きく変えてしまうため，水没する集落にとどまらず，しばしばその周辺地域にまで記録を残すことになる。このような場合に，国や都道府県を巻き込んだ大がかりな文化の保存活動が実施されやすい。一方，大規模開発から取り残された地域，あるいは開発事業が終わってしまった地域では，集落を維持するための数少ない選択肢の中から観光開発への道を選び，そのためにしばしば文化の利用と創造をおこなってきた。既存研究では，結果として生じた文化の保存と変化に注目することはあっても，それらを開発との関わりから検討する視点に乏しかった。そこで，本研究会では文化の保存と利用，さらにはその過程で生じる変化について，開発との関わりからより包括的な調査・研究を試みる。

後者も前者と不可分の関係にあるが，より直接的には文化行政の変化と絡んでいる。もともと文化財は面的ではなく点的な対象のうち，特に貴重なものを現状保存することを目的としていた。ところが，点的な保存をしたところで，その周辺の開発が進んでしまえば，結果的に景観が阻害され，地域らしさを維持できないという事例が多発した。そこで，文化財保護行政は，より広い範囲での文化財指定を可能とするため，重要伝統的建造物群保存地区から文化的景観，またそれを保存するための景観法へと進んでいった。しかし，ここで経済的困難に直面しているが故に失われつつある景観を，文化行政の手法で如何に保存するかという点が大きな問題になった。基本的にこれは不可能なことであるが，現状ではファサードなどの工学的措置によって部分的に試行されている。さらには，河川や田園に対しても農業工学的な復元技術が開発されつつある。これらの実態から，文化行政は現状保存から開発による保存へと大きく転換したといってよい。だが，

工学的な景観保全は地域の生産や生活の機能を経済的に解決できず，したがって気休め程度の対策にしかならない。既存研究では，このような文化財行政に対して批判を続けてきたが，それでも文化財保護の対象が拡大されつつある背景やその結果として起きている文化ないし生活の変化については，検討が不十分である。そこで，本研究会では，文化の保存を目的とした開発が行われる地域的な背景と，その結果として生じつつある文化ないし生活の変化について現状把握することを第２の目的とする。

２．今年度の研究計画

23年度が本共同研究会の最終年度になるため，調査・研究の不足分を補い，総括へと向かっていきたい。

まず，世界自然遺産の屋久島と白神山地については，現地での聞き取り調査や観光統計の収集などはおこなってきたが，保護される前の森林の状況や名勝，国立公園等による保護制度の歴史，新たな観光施設・観光資源開発の歴史などについては，まだ十分に整理できていないため，資料調査とフィールドワークでこれらを補っていきたい。世界文化遺産の五箇山・白川郷については，登録地域における保護制度や観光化の歴史を中心に調査を進めてきたが，廃村した周辺集落の研究が途中段階にあるため，引き続きフォールドワークを続けていく。

アイヌ観光については，現在の観光資源や文化伝承活動を中心に研究を進めてきたが，集落ごとの違いが複雑で繊細であるため，二風谷と白老を中心にこれまでと同様の調査が必要である。北九州の近代化遺産は，地域的に幅広く調査をおこなった結果，新日本製鐵株式會社八幡製鐵所と宮若市の貝島炭礦，高島炭坑，端島炭坑（軍艦島）を中心に研究を継続していくことになった。とくにそれらの資料分析に力点を置いて調査をしていきたい。八重山諸島の離島観光については，これまでと同様に西表島を中心として，観光化以前の水田開発や森林伐採，炭坑開発の歴史を中心に研究を進めていく。広島･長崎･沖縄の戦争遺跡については，これまで保護政策や観光化の地域比較を中心に研究を進めてきたが，修学旅行向けの教材分析やその他の資料調査を補うことによって，さらなる研究の充実化を図っていきたい。

その他，よさこいソーラン祭り，阿波踊り，宇出津暴れ祭り，四国遍路等の芸能・イベント，宗教観光については，第４展示室の新構築に向けた研究成果の整理をおこなう。

３．今年度の研究経過

第９回研究会　平成23年６月18日（土）・19日（日）　場所：北海道

報告：柴崎　茂光「鹿児島県屋久島における地域開発の歴史」

青木　隆浩「第４展示室リニューアル『近代化を支えた産業の現在』の展示構成について」

調査：北海道開拓記念館，三菱美唄炭鉱跡，三井美唄炭鉱跡，住友奔別炭鉱跡，北炭幾春別炭鉱跡，美唄市郷土資料館，三笠市立博物館，夕張市石炭博物館・炭鉱の生活館

第10回研究会　平成23年９月23日（金・祝）・24日（土）　場所：歴博

報告：長廣　利崇（和歌山大学，ゲストスピーカー）「大正・昭和戦前期の炭鉱労働世界」

山本　理佳「近代産業遺産と文化遺産制度」

浅川　泰宏「四国遍路の文化的価値」

川村　清志「近代に生まれた『民謡の里』」

第11回研究会　平成23年２月18日（土）・19日（日）　場所：福島県いわき市

報告：内田　順子「アイヌと沖縄展示について」
青木　隆浩「五箇山・白川と産業展示について」
葉山　茂「気仙沼での生活資料救出活動と歴博展示に向けて」
調査：常磐炭鉱内郷地区・湯本地区炭鉱跡，スパリゾートハワイアンズ，みろく沢炭鉱資料館，いわき市石炭・化石館
調査：アイヌの文化伝承活動，白神山地における狩猟採集活動，屋久島の林業と廃村，五箇山・白川郷の集落変化，貝島炭礦の旧企業城下町，沖縄本島の戦跡と自然，西表島の炭坑跡と水田跡，日光社寺参詣の観光，四国遍路の観光化と世界遺産登録推進運動，全国国立公園の資料所在調査

今年度は研究会の最終年であるため，研究成果を目標のひとつとしていた常設展示の新構築に向けて，具体的な検討を進めていった。

まず，第９回研究会では屋久島と九州北部の炭鉱，八幡製鐵所の展示構成案について検討するとともに，本研究会がおもな対象としてきたアイヌと炭鉱を大きく取り上げている北海道開拓記念館の展示を見学した。また，展示をおこなう上で，九州北部の炭鉱を他の主要な産地との比較によって位置づける必要性が認められたため，北海道における炭鉱跡と炭鉱展示の現状を調査した。

続く第10回研究会は，12月３日（土）開催の第80回歴博フォーラムに向けて，講演者の報告内容を突き合わせ，議論の中心テーマを確認しあう作業をおこなった。予定が合わず，研究会に出席できなかった講演者については，後日個別に検討課題を確認した。

第11回研究会は，研究成果を第４展示室新構築とそれに付随する特集展示によりよく反映させるための展示構成案を検討する場とした。東日本大震災の被災地である気仙沼での生活資料救出活動は，当初研究目的に入っていなかったが，開発に伴う文化変容の問題としてこれまでの研究活動と密接な関係をもつと判断したため，その実践の結果と展示への反映方法について議論をおこなった。

４．今年度の研究成果

今年度はまず研究成果の中間報告として，12月３日（土）に歴博講堂で第80回歴博フォーラム「地域開発と文化資源」を開催できたことが大きい。このフォーラムは，本研究会の研究成果を公開する手段である第４展示室新構築の予告編としての役割をも有しており，様々な問題提起をおこなう場であったが，会場での関心は高かったと思われる。この中間報告を踏まえ，さらに展示に向けた具体的な作業が進んでいる。

次に，世界遺産については，かつて林業で栄えた屋久島の集落跡を調査し，開発前後の景観変化を考察した。また，白神山地では，マタギの狩猟採集活動の現場に連れて行っていただき，生業の場としての自然と観光化されたそれの違いを体験した。五箇山・白川郷に対しては，近代から人類学や建築史学といった学問によって注目されたことを踏まえ，学説史とその背景を追うとともに，産業変化やダム開発，国道改良事業などがこの地域一帯を変貌させていった様子を集落ごとに調査する手法をとった。そして，五箇山・白川郷は秘境といわれながら，開発がらみの資料が少なからず残っており，開発の影響が合掌造り集落の存廃や観光化に大きな影響を与えていることがあらためて確認された。

炭鉱業については，衰退時の企業行動や行政による再開発の動機が，景観や生活の変化に大きな影響を与えている。そこで，本研究会では資料が数多く残っている貝島炭礦をおもな研究対象として，炭鉱があったころの生活を写真や文字資料，聞き取り調査などによって復元しつつ，現在との比較をおこなっている。ま

た，貝島炭礦の跡は現場にあまり残っておらず，観光資源化があまり進んでいないが，他では観光化による産業転換を進めている旧産炭地域が少なくないため，その違いが生じた歴史的な背景を比較考察した。

西表島も近代以降に炭鉱業や林業，稲作などによって大開発が進められた地域である。植生の急速な回復によってその跡は不明瞭になりつつあるが，今年度は仲良川流域とクイラ川流域，船浮集落を中心として過去の開発跡を調査した。皮肉なことに，かつては身近に存在したイリオモテヤマネコが，植生の回復とともにみられなくなったという話を聞くこともできた。また，沖縄本島と合わせて，自然保護と観光化に関する資料の整理と分析を進めた。

アイヌ民族に関しては，近代の北海道開拓と戦後のダム開発による影響が大きいとみて，その前後における自然資源へのアクセスについて調査をおこなった。また，自然資源への制約下で，アイヌ自身がどのように文化を伝承しているのか，その実践活動を調査した。

その他，戦争遺跡や国立公園の観光資源化，四国遍路の観光化と世界遺産登録推進運動，日光の社寺参拝，八幡製鐵所の変遷などについて，写真や絵葉書，ガイドブック，調査報告書等の資料を収集し，生活や景観の変化について分析をおこなった。

５．３年間を通じての成果

本研究は，基幹研究「民俗表象の形成に関する総合的研究」の１ブランチとして，第４展示室の大テーマ「『民俗』へのまなざし」のうち，おもに無形の文化に関する基礎的な研究をなすためのものである。そしてここでは，地域のあらゆる文化や景観，人々の生活を劇的に変える共通の要因としての「開発」に注目し，それと自然や信仰，芸能，産業，観光などとの関係を探ろうとした。

その対象として，本研究がまず取り上げたのが世界遺産登録地域である。具体的には世界自然遺産の白神山地と屋久島，世界文化遺産の五箇山・白川郷を研究対象地域とした。世界遺産といえば，一般に古くからの建造物や景観を保存することで，観光化を促進する役割をもつと考えられているが，実際にはその対象が前者から後者，つまり点としての文化財から面としてのそれへと移行する中で，徐々に近代化の影響を強く受けたものへと変化してきている。これは登録地域に現在の生活空間を含めているために必然的なことではあるが，それ以上に注意しなければならないのは，その背景にしばしば開発に伴う急激な発展とその後の過疎化があるということである。

具体的にその開発の内容をあげると，ダム開発と森林伐採，鉱山開発が主だったものとなる。実際にも，白神山地では世界自然遺産に登録される前，その周辺地域で太良鉱山や尾太鉱山，西目屋ダム，素波里ダム，弘西林道と赤秋林道の建設に伴う森林伐採など，大規模な開発が繰り返されている。五箇山・白川郷でも登録地域の周辺は林業，平瀬鉱山，御母衣ダム，鳩谷ダム，椿原ダム，成出ダム，小原ダム，祖山ダムといった大規模開発の拠点であった。それらの開発が終わり，過疎化が急速に進む中で地域おこしの手段として浮上するか，あるいは大規模開発による環境悪化への反動としてあらわれてきたのが，保護の対象を面的に広域化させた直後の世界遺産登録地域である。このため，世界遺産について研究するには，登録地域のみに目を向けるのではなく，周辺地域を開発前後の長期間にわたって歴史的に調査しなければならない。したがって，何度も現地に足を運ぶ根気のいる作業が必要になったが，本研究はそこから現状を幅広く捉える点において大きな進展を果たせたと考えている。

また，世界遺産に登録されてはいないが，自然のイメージが強い北海道と西表島でも開発との関わりから

調査を進めていった。その中で，北海道は近代以降の開拓事業によって自然を積極的に改変させていった地域である。とくに，アイヌ民族は，それまで自由に利用していた自然資源を政治経済的に大幅に制限された点で注目される。彼らは，住宅の建材や儀式の材料，食材などを自然資源から得てきたが，北海道の開拓が進むにつれて土地の権利を失っていった。それは，土地に直接関係してきた儀礼や信仰などの伝統的な文化を保持することにも関わっていた。さらに大規模なダムが建設されると，アイヌ民族にとって重要な場所が消滅していった。このように，北海道の大規模開発によってアイヌ文化は多大な影響を受けており，伝統的な自然との関わりを失いつつある。一方の西表島はかつて炭鉱，林業，稲作の開発が進められた地域であった。西表島の石炭産業は品質と生産コストが低かったため，戦後アメリカの判断によって廃止されるが，それ以前は島の主要産物であり，いくつかの新興住宅街を形成していた。さらに，現在は植生が回復しているが，かつてはパルプの原料としてマングローブの森林が大量に伐採され，また水田開発によってマラリアが流行したこともある。以上の歴史的経緯に対し，本研究は自然保護と観光化の進んだ現在と過去の比較をするために，数少ない文献と現地での聞き取り調査によって，開発前後の景観や生活の変化を復元しようと試みた。その結果，炭鉱や水田の開発が河川沿いに集中し，新興住宅地や出稼ぎが活発化した後，それらの衰退に伴って回復した自然を観光化している現状を把握することができた。

次に，本研究において２つ目に重要視したのが，開発と信仰・芸能の関わりである。開発は既存の文化を変化させる一方で，新たな文化を生み出す。つまり，開発による急速な人口流入が各地の文化を複合化させることや，連帯感を強めるために全く新しい文化を築き上げること，さらには観光化のためにイベントを地域の祭礼として立ち上げ，地域おこしに用いることなどがこれらに該当する。例えば，世界遺産で知られる五箇山のこきりこ唄や麦屋節などの民謡は，ダム開発による集落の盛衰から大きな影響を受けている。また，高知のよさこい祭りは商工会が地域おこしのために始めた芸能であるが，現在は全国各地のイベントとして用いられている。現在は世界遺産登録推進運動が進められている四国遍路も，ロープウェイの建設によるアクセスの簡便化やバスやタクシーを利用したツアーの普及などによって観光化が進んでいる。このような信仰・芸能の観光化は，現在の民俗学にとって重要な研究課題であり，第４展示室新構築へとつながっていった。本研究では，信仰や芸能における意味づけの変化とそれを背景とした観光化の進展に注目して現地調査をおこない，その成果をおもに第４展示室の「観光とおみやげ」というコーナーに反映させることができた。

本研究がもう１つ重点を置いたのは，新たに設定された文化財の社会的影響であった。とくに産業遺産と戦跡は都市再開発が進められる中で近代化遺産として保存されることになったため，その社会的影響を重点的に調査することにした。これらのうち，産業遺産のなかで最も劇的な変化を遂げたのは，石炭産業と製鉄業であろう。石炭産業は明治時代から九州と北海道を中心として日本のエネルギー需要を支えてきたが，昭和30年代のエネルギー革命によって急速に衰退した。このため，短期間のうちに生活や景観の劇的な変化をとげた産業の代表的な事例である。一方の製鉄業は現在も発展を続けているが，近代化を支えた八幡製鐵所の東田第一高炉の火が老朽化のために消え，銑鉄の拠点が戸畑や君津に移っている。そして，跡地は公園やスペースワールドに転用され，景観の大きな変化を見せた。石炭産業や製鉄業が築いた企業城下町は，様々な地域から大量の人々を受け入れて複合的な文化を形成し，かつ福利厚生を通じた独特の生活感を抱かせるに至った。文化行政においては各産業の近代化に果たした役割を強調することが多いが，本研究ではそれを歴史の一面的な切り取りと捉え，企業城下町ならではの地域社会の劇的な変化に注目して，現地調査を進めていった。一方の戦跡については，沖縄・広島・長崎を対象に戦争被害の語りや修学旅行者への平和学習に

力点をおきつつ，近代化遺産や世界遺産登録の地域に対する影響についても調査した。結果として，沖縄は戦争・戦跡の表象化をあまりおこなっておらず，専ら語りに重点をおいた平和学習活動を続けていること，広島は原爆ドームの世界遺産登録後からそれに関する土産物が増大していること，また長崎は戦後すぐから戦争・戦跡の表象化を進めていったことなど，３地域の戦争・戦跡に対するとらえ方がそれぞれ異なっていることを確認できたのは大きな成果であった。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

浅川　泰宏　埼玉県立大学保健医療福祉学部
川村　清志　札幌大学文化学部
野本　正博　アイヌ民族博物館
宮地　英敏　九州大学附属図書館付設記録資料館
◎青木　隆浩　本館研究部・准教授
○内田　順子　本館研究部・准教授
重信　幸彦　本館研究部・客員教授
葉山　茂　本館研究部・機関研究員
丸山　泰明　本館研究部・特任助教
〔リサーチ・アシスタント〕
城石　梨奈　お茶の水女子大学・大学院生
〔ゲストスピーカー〕
長廣　利崇　和歌山大学経済学部　准教授
金行　信輔　千葉大学工学部
高橋　晋一　徳島大学総合科学部
山本　理佳　青山学院女子短期大学
岩淵　令治　本館研究部・准教授
小池　淳一　本館研究部・教授
柴崎　茂光　本館研究部・准教授
松尾　恒一　本館研究部・教授
山田　慎也　本館研究部・准教授

(2)「新しい古代像樹立のための総合的研究」2009～2011年度
（総括研究代表者　藤尾　慎一郎）

１．研究の目的

本基幹研究は，ＡＭＳ―炭素14年代測定によって得られた新しい年代観をもとに日本古代史を再構築して，総合展示第１室新構築のための学問的基盤とすることを目的とする。対象とする時代ごとに３つのブランチがある。

Ａ　旧石器時代の環境変動と人間生活（３万年前～１万６千年前）西本豊弘研究代表

関東地方における約３万年前の後期旧石器時代から，縄文時代にかけての環境変動と旧石器文化の変化について研究する。

Ｂ　農耕社会の成立と展開―弥生時代像の再構築―（前10～後３世紀）藤尾慎一郎研究代表

水田稲作の起源が500年以上遡ったことによって，ほぼ倍増した弥生時代の存続期間。この結果，従来の弥生文化像がどのように変わるのか，10のテーマに分けて新しい文化像を構築し，弥生文化を世界の人類史の中に位置づける。

Ｃ　新しい古代国家像のための基礎的研究（後４～８世紀）広瀬和雄研究代表

律令国家の形成過程として位置づけられていた古墳時代を，もう一つの古代国家として認識し，記紀に

縛られない新しい古墳時代像を考古学的に明らかにする。

本基幹研究の３つのブランチは，いずれも来るべき総合展示「第１室―原始・古代―」の新構築を目標に設定したものである。３年間の共同研究の成果は，2013～2014年にかけて刊行予定の『国立歴史民俗博物館研究報告』にまとめたものを学問的根拠として，2016年から展示を開設するという，本館の「博物館型研究統合」の実践例の一つである。

２．研究成果

Ａ班は西本研究代表が採択された科学研究費補助金Ａ，「霞ヶ浦沿岸花前川流域の旧石器文化の研究」による茨城県花室川遺跡の発掘調査を，2009年～2011年に３回に分けて実施した。この遺跡からは，旧石器時代後期のバイソンやナウマンゾウなどの化石骨が以前より表採されているので，洪積世動物群と後期旧石器との共伴が期待された。調査の結果，ナウマンゾウの歯板片１，メノウ製石片と多量の植物遺体が出土した。樹種同定と炭素14年代測定の結果，3.5万年前から縄文時代にかけての，花室川の谷筋における環境の変化を復元することができた。これらの成果は，2012年度に歴博研究報告として刊行する予定である。

Ｂ班は，2009年度は，共同研究員がこれまでおこなってきた自身の研究の紹介を中心におこなった５回の共同研究と，100点あまりの炭素14年代測定と同位体分析をおこなった。共同研究会は３回を歴博でＢ班単独で行い，１回は京都で2009年度国際研究集会と合同で，もう１回は歴博でＣ班と合同研究会を行った。日本列島における鉄器の出現時期をめぐって新たな進展があった。2010年度は，４回の共同研究，40点あまりの炭素14年代測定と同位体分析をおこなった。共同研究会は３回を歴博でＢ班単独で行い，１回は韓国京畿道，江原道で行った。２年目で，共同研究員がこれまでおこなってきた自身の研究の紹介が一巡したので，研究代表者の指針をもとに，報告書作成のためのテーマ準備を進めた。

2011年度は，成果報告書への投稿予定論文の構想発表を２回に分けて実施。2012年８月末の原稿締め切りに備える。青森の水田稲作文化の現地調査や40点あまりの弥生前期関連資料の炭素14年代測定・同位体分析をおこない，2013年度刊行予定の歴博研究報告に調査研究報告として掲載する予定である。

Ｃ班は，歴博での研究会のほか，仙台では北限の古墳文化と南限の続縄文文化との混在状況の調査，沖縄諸島では在地文化と本土文化とのありように関する調査，中国遼寧省と吉林省の高句麗遺跡の調査，兵庫県揖保郡で播磨国風土記関連のフィールド調査などを行い，地元の研究者との合同研究会を実施した。

また「Ｂ班」との合同研究会では「文化のひろがりと境界」を統一テーマとして，前10世紀から８世紀までを対象に，弥生時代，古墳時代，奈良時代におよぶ考古学研究者と，古代史を専攻する文献史学研究者らで，テーマに関する議論を深めた。

３年間の研究で，７世紀の地域社会における中央と地方の政治秩序のありかた，外交と国境からみた古代国家，中央権力と国家のあり方の３点について，具体的な成果を上げている。これらの研究･調査成果は，2012年度に歴博研究報告として刊行する予定である。

「農耕社会の成立と展開―弥生時代像の再構築―」2009～2011年度
（研究代表者　藤尾　慎一郎）

１．研究の目的

歴博が約15年前から推進しているＡＭＳ―炭素14年代測定法によって得られた実年代は，弥生時代の通説・定説に大幅な見直しを求めている。従来よりも500年早く，水田稲作が始まっていたことによって，弥生前期・中期を中心に存続期間が延びた結果，弥生時代はこれまでの約２倍となる約1200年つづいたことがわかった。水田稲作の本州島各地への拡散はきわめてゆっくりとしたものとなり，当初から存在したと考えられ，弥生社会の急激な発展の原動力とされてきた鉄器は，水田稲作が始まってから600年ぐらいたたないと出現せず，その結果，弥生時代の前半は石器時代であったこともわかった。しかし弥生時代の存続期間は延びても，見つかっている住居や墳墓の数は変わらないため，同時期における住居や墳墓の数は減少するか，ある時期に偏ることになるため，大規模な人口を要した巨大な農耕集落が発達するという，これまでの見方にも当然，影響は及ぶ。このように本研究は，イネと鉄を象徴として，急激な発展を遂げると考えられてきた弥生時代像から，水田と石器を象徴として，ゆっくりと進んだ弥生時代像への見直しを目的とする。なおこの基幹研究の成果は，2016年度開設予定の総合展示第１室新構築の学問的裏づけとなるものである。

２．共同研究員の分担

共同研究員とテーマとの関係は当初，以下の通りであった。

１　従来の弥生時代の年代観に基づいていた韓国青銅器時代の年代的見直しと，波及する諸問題（李亨源）。

２　水田稲作開始後，600年たたないと出現しない鉄器。石器時代が600年続いたあと，初期鉄器時代に入る。鉄の普及を前提とした弥生社会発展図式の見直し（野島　永）。

３　食料の獲得と生産。水田中心史観と畑作との混合史観の再検討（安藤　広道）。

４　弥生時代の存続幅が倍になっても遺跡の数や遺構の数は変わらないので，一時期あたりの人口が減ることになる。人口が減った弥生社会像の再構築（松木　武彦）。

５　前８世紀までさかのぼった弥生青銅器の起源と，列島内における儀礼･権力（小林　青樹･吉田　広）

６　本州・四国・九州など，日本列島の「中の地域」における条痕文土器文化と，遠賀川系土器文化の700年間にわたる異文化併存の意味と，世界史的位置づけ（設楽　博己・小林　謙一）

７　弥生文化の周辺。前４～前２世紀のわずか300年しか水田稲作をおこなわなかった，東北北部の文化的位置づけ（高瀬　克範）

８　楽浪郡の設置に伴う中原文化との接触が倭人社会にもたらしたもの（上野　祥史）

９　定型化した前方後円墳の成立年代（岸本　直文）

10　土壌中の微粒炭素を用いた縄文･弥生時代の植生史（小椋　純一）

また２年目からは新たに２名の共同研究員を加えた。

11　韓半島南部の初期鉄器文化と弥生文化の鉄器文化との関係（李昌熙）

12　縄文墓制と弥生墓制の本質的な違い（山田　康弘）

以下，年度ごとの研究経過と研究成果について述べる。

3．研究の経過

最終年度の３年目にあたる2011年度は，研究報告提出用論文の構想発表を２回に分けて行うことと，日本列島最北端の水田稲作が，弥生文化の枠内で捉えられるのかどうか，実際に現地を訪れ，水田立地と出土遺物から検討することにあった。また，九州北部と鳥取の弥生開始期の遺跡から出土した，土器に付着した炭化物の炭素14年代測定を行い，両地域における弥生開始年代の確認作業を行った。その結果，鳥取平野では瀬戸内側と同じ，前７世紀には水田稲作を始めていたことがわかった。

①　研究会　４回の研究会を開催した。歴博で３回，青森で１回である。

第９回　５月21日（土）・22日（日）：本館

安藤　広道　「水田中心史観批判の功罪」

ゲストスピーカー

中沢　道彦　「土器の種子圧痕からみた縄文農耕の検証」

第10回　７月22日（金）～24日（日）：青森県津軽地域に所在する水田遺跡の調査

第11回　12月25日（日）・26日（月）：本館，神谷町機構本部会議室

小林　謙一　「縄紋時代晩期～弥生時代前期における海洋資源依存の度合い」

山田　康弘　「山陰地方弥生時代前期墳墓にみられる縄文時代的様相」

小林　青樹　「前１千年紀のユーラシアにおける青銅器文化」

吉田　　広　「弥生青銅器祭祀の展開と特質」

藤尾慎一郎　「弥生鉄史観の見直し」

李　　昌熙　「韓半島初期鉄器時代の年代と特質」

松木　武彦　「人口と集落パターンからみた弥生･古墳移行期の社会変化」

坂本　　稔　「日本版較正曲線最新版と弥生年代論の現状」

第12回　３月19日（月）・20日（火）：本館

李　　亨源　「突帯文土器と集落の観点からみた韓半島の青銅器文化と初期弥生文化」

小椋　純一　「弥生時代に草原はどの程度存在したのか」

野島　　永　「弥生時代の鉄器文化とクラフト･スペシャリゼーション」

広瀬　和雄　「東国の初期古墳についての２，３の問題」

高瀬　克範　「弥生と続縄文」

研究会では，最後の発表である安藤広道が水田稲作史観批判の批判論を，ゲストスピーカーの中沢道彦氏が，縄文土器に残る圧痕土器の調査成果をもとに，縄文時代に存在したと考えられる植物と縄文人との関係について発表した。現地研究会は弥生前期と中期に併行する津軽地域の水田址の調査を行った。最後の２回は，平成24年８月締め切り予定の共同研究特集号の投稿予定論文の構想発表を行った。

②　現地検討会　本年度は２回目の研究会を青森県弘前市で実施した。

第10回研究会　７月22日（金）～24日（日）　青森県弘前市所在の弥生時代併行期の水田稲作遺跡の調査」弘前市砂沢遺跡（現在もっとも北で見つかっている先史時代の水田跡）。田舎館村田舎館遺跡。

現地検討会では，世界でもっと北にある先史時代の水田遺跡である砂沢遺跡とその出土遺物。青森最大の水田遺跡である田舎館遺跡とその出土遺物などを見学，調査した。

その結果，砂沢遺跡が縄文集落遺跡と共通する立地，すなわち，複数の生態系が交錯する地点に立地するのに対し，田舎館遺跡は平野の中央という，弥生時代の大集落遺跡と共通する立地にあることを確認した。

これは，砂沢遺跡がパイロットファーム的な性格を持つことと，田舎館遺跡が本格的な水田稲作を行う農耕集落であることを意味する。縄文人が縄文生業の一環として水田稲作を始め，それがやがて本格的な水田稲作へと展開していくプロセスのなかに，２つの遺跡を位置づけられるのかどうかが焦点となる。

なおこの調査に関しては，「最北端の水田稲作」（『本郷』96，23―25，2011．11）に小文を寄稿している。

③　年代学的調査

重点配分の申請を行い，福岡県小郡市大保横枕（おおほよこまくら）遺跡，鳥取市本高弓ノ木（もとだかゆみのき）遺跡出土弥生前期土器に付着した炭化物の年代測定を行った。

福岡県小郡市大保横枕遺跡は，宝満川の河岸段丘上に造られた弥生時代前期の二重環壕，貯蔵穴，住居からなる遺跡で，板付Ⅰ式新～Ⅱａ式古段階から営みが始まり，板付Ⅱｃ式段階には環壕が埋没する。小郡市地域では平野部に見つかった初めての環壕で，環壕内には住居はわずかしか認められないという，貯蔵穴型の環壕という点で，三国丘陵上の遺跡と同じ傾向を見せる。本遺跡から出土した板付系土器と突帯文系土器に付着した炭化物９点をＡＭＳ―炭素14年代測定したところ，前７世紀に村が造られ，前５世紀には環壕が廃絶したことが明らかになった。

鳥取市本高弓ノ木遺跡は，鳥取平野で３番目に古い水田稲作開始期の遺跡と考えられている。遠賀川系の甕よりも前期突帯文系甕の比率がきわめて高い器種組成をもつ。型式学的には３段階に分かれると予想され，もっとも古い突帯文系土器には少条沈線をもつ遠賀川系と，瀬戸内の突帯文土器最終末に比定される沢田系の浅鉢が伴う。これまでなら間違いなく，遠賀川系と突帯文系土器は，時期差として分離されてしまうところだが，18点を炭素14年代測定した結果，いずれも前７世紀前半に同時併存することを確認した。本遺跡が

図１　砂沢遺跡（水面下が水田跡）

前７世紀には出現していたことがわかったことで，山陰東部では神戸よりも早く水田稲作が始まっていたことを知ることができた。大保横枕遺跡はすでに報告書が刊行されているが，本高弓ノ木遺跡は平成24年度刊行予定なので，報告書内へレポートを寄稿するべく準備を進めている。またいずれも本共同研究の成果報告書に，調査研究報告を調査責任者と連名で投稿する予定である。

４．成果報告書

成果報告書の章立て，およびタイトルは以下のとおりである。

『弥生ってなに』歴博研究報告特集号，2013年刊行を目指して，現在執筆中である。

研究成果報告書目次案（原稿用紙1340枚）

序章　研究会の経緯と成果･課題

Ⅰ　弥生文化の環境と年代

①　小椋　純一　弥生時代の植生における草地の割合について

②　藤尾慎一郎　弥生長期編年の現状と課題（研究ノート）

Ⅱ　弥生文化をとりまく文化

③　高瀬　克範　弥生と続縄文

④　李　　亨源　突帯文土器と集落からみた韓半島青銅器文化と初期弥生文化

⑤　李　　昌熙　韓半島初期鉄器の年代と特質

Ⅲ　弥生文化の集落と墳墓

⑥　山田　康弘　弥生時代前期列状配置墓域における埋葬原理

⑦　松木　武彦　人口と集落動態からみた弥生･古墳移行期の社会変化

Ⅳ　弥生文化の鉄器文化

⑧　藤尾慎一郎　弥生鉄史観の見直し

⑨　野島　　永　弥生時代の鉄器文化とクラフト･スペシャリゼーション

Ⅴ　弥生文化の儀礼

⑩　小林　青樹　前１千年紀のユーラシアにおける青銅器文化

⑪　吉田　　広　弥生青銅器祭祀の展開と特質

Ⅵ　弥生文化と縄文文化

⑫　小林　謙一　縄紋時代晩期～弥生時代前期における土器使用状況からみた生業

⑬　中沢　道彦　レプリカ法による長野県氷遺跡出土土器の種実圧痕の研究

Ⅶ　弥生文化と古墳文化

⑭　上野　祥史　東アジア世界と弥生時代社会

⑮　岸本　直文　倭における国家形成＝古墳時代開始のプロセス

⑯　広瀬　和雄　東国の初期古墳の２～３の問題

Ⅷ　弥生文化とは何か

⑰　安藤　広道　水田中心史観批判の功罪

⑱　設楽　博己　弥生文化の範囲

研究ノート

⑲　藤尾慎一郎·山崎頼人·坂本稔　福岡県小郡市大保横枕遺跡の年代学的調査―弥生前期中頃の二重環壕集落の年代―

⑳　藤尾慎一郎·濵田竜彦·坂本稔　鳥取平野における水田稲作の開始年代―鳥取市本高弓ノ木遺跡を中心に―

調査報告

㉑　設楽博己·高瀬克範　関東地方における穀物栽培の開始―レプリカ法による分析を通じて―

５．全期間の研究成果

（１）はじめに

共同研究員は，Ⅱで述べたような分担のもと，弥生長期編年のもとでは，弥生文化に関する従来の考え方がどのような影響を受けるのか，という問題を中心に取り組み，弥生文化像の再構築に挑んだ。研究は内容的に３つに分けることができる。

まず，弥生長期編年の採用は，日中韓の間で暦年代という同じ時間軸をもとにした議論を可能とし，国内にあっては土器型式の存続幅を念頭においた解釈を可能としたことをあげることができる。これは自然科学との協業においても同じことがいえる。

次に，古墳の成立に果たした弥生文化の鉄を，どのように位置づけるのかという問題について，生産力の発展をもたらしたハードウェアとして捉えるのか，それ以外の役割を与えるのか，という議論が行われた。

３つめは，弥生文化とは何か，という定義の問題から派生する，水田稲作を行う文化の多様性について議論が行われた。

（２）弥生長期編年の採用

共通の時間軸のもと，韓国の青銅器文化が弥生文化の成立にあたって，どのような影響を与えたのか，という問題に取り組んだ李亨源は，炭素14年代の結果，青銅器文化成立期の土器である突帯文土器の下限年代と，西日本最古の突帯文土器の年代が併行することを前提とした議論を行った。上野祥史は，青銅鏡の製作年代と甕棺への副葬年代のズレを，伝世で説明しなくてもよくなったことをふまえて，弥生長期編年のもと，漢帝国の外交政策という視点から弥生文化を東アジアの中に位置づけようとしている。それは決して楽浪郡の設置を契機とする朝貢という視点だけでは説明できないものであり，実際の漢式鏡の入り方をもとに，前漢成立直後から弥生社会と関係をもっていたのかどうかを証明できるかどうかにかかっている。李昌熙は，韓国南部における青銅器時代最古の鉄器の年代が，弥生最古の鉄器の年代よりも古いことを根拠に，弥生文化の鉄のルーツを青銅器文化に求めたが，型式学的な特徴から弥生文化の鉄器が中国東北部・燕の鉄器と直接的な関係をたどれるとする，小林青樹や野島永の批判を受けている。小林青樹は，暦年代をもとにユーラシア大陸東半部の前１千年紀における青銅器文化の系譜関係を，ダイナミックなレンジで説いた。前６世紀における北方草原遊牧民の文化系譜と，中原の燕国系譜のものが，遼寧式青銅器文化で受容·変容され，それが韓半島を経由して前４世紀に日本列島に伝播したと位置づけた。

日本列島に伝播した青銅器は，その後の600年あまりで各地各様の展開を見せるが，その有様を詳細に論じたのが吉田広である。二大青銅器である武器型祭器と銅鐸は，本来備える機能性の違いが祭祀形態の違いを規定したが，本来の機能が消失したあとは，大型化するという共通点を持ちながらも，金属光沢と文様造形性が統合された銅鏡として，次代の墳墓祭祀における重要なアイテムに継承されていくことを説いた。

こうした青銅器や鉄器など，大陸起源の文物と弥生文化との関係を論ずる際には，炭素14年代にもとづく

較正暦年代が，もはや不可欠であることがわかる。

（3）古墳成立の背景

炭素14年代の影響は暦年代だけではなく，土器型式に存続幅を与えたことによって，これまでの見方が大きく変わることとなった。たとえば，土器型式の数が同じであれば存続期間は同じと考えざるを得なかったが，炭素14年代の結果，土器型式の存続幅が30年から150年まで不均等幅であることが明らかにされたことで，山田康弘，岸本直文や松木武彦の研究にその影響が早速現れている。

山田は，弥生墳墓の累積効果を前提とした弥生墓制論に挑戦している。

岸本は，弥生後期から古墳成立期までの土器型式に，炭素14年代測定の成果である存続幅を当てはめ，炭素14年代に基づく墳丘墓の年代をもとに新たな枠組みを提示している。卑弥呼の共立以前を弥生後期，共立以降を古墳時代として，西日本における古墳成立のプロセス復原を目指す。

松木は岡山平野の人口問題を取り上げ，中期中葉以前の人口と中期後葉以降の人口を遺跡数から推定するが，前半の約700年の人口があまりにも少ないのに対し，後半の約500年は人口が急増することを明らかにした。つまり発展の度合いは時間の長さに比例しないことを示したのである。そもそも長期編年では鉄器の出現が，水田稲作の開始から約600年たった前４世紀前葉であることから，それまでの600年あまりは石器だけの世界であり，水田稲作もなかなか広まらなかったことがすでに明らかにされている。弥生文化後半期の600年あまりを取り上げても，鉄器が順調に増加するのは九州の北半部だけで，それも加工具が中心であることが野島によって明らかにされている。可耕地の拡大に大きな影響を与えたとされてきた打鍬，今でいう鉄製農具は，九州北部でも後期後葉にならないと数が増えず，それ以外の地域では依然として工具と鉄鏃が主流を占めることから，これをどう見るかは，古墳成立の前提条件としての生産力の発展に，鉄がどのように関わっていたのかを考える時に，評価の違いとなって現れた。野島や広瀬和雄，松木，岸本は，石器がない以上，鉄器が普及していることは確実なので，鉄器を重視するが，その実態は，木製農具を加工する加工用鉄器の増加であった。鉄器加工具の普及を背景とする木製農具の増産によって，農業生産が向上したと考えることも可能だが，鉄器の増加を生産力の発展という経済現象と結びつけるだけではなく，鉄素材の入手という遠距離交易に果たした首長層の役割が，首長層の政治的基盤の向上に結びついた，という視点での解釈を，そろそろ全面に押し出す時期に来たのではないだろうか。

（4）弥生文化とは何か

水田稲作を行う文化はすべて弥生文化なのか，という藤尾の疑問に端を発した弥生文化とは何か，という定義の問題は，西日本における縄文と弥生，東日本における縄文と弥生，青森における弥生と続縄文の線引き問題を引き起こすこととなった。設楽は，突帯文土器以前の穀物･雑穀栽培は現状では考えられないとした上で，縄文に一般的な生業構造である網羅的な生業構造の中に，稲作が位置づけられれば，それはもう弥生文化とみなすと主張した。この設楽見解は，突帯文土器以前の穀物栽培を肯定的にとられ，縄文の網羅的生業構造のなかに稲作を位置づけて，縄文文化の稲作を前提とする藤尾や山崎純男，小畑弘己の意見と対立する。西日本では，網羅的な生業構造から選択的な生業構造への転換をもって，縄文と弥生を線引きする考え方が，1990年代から一般的になっているので，設楽の考え方とは相容れない。東日本が選択的な生業構造に転換するのは前３世紀の弥生中期中葉である。しかし利根川を越えると，選択的な生業構造のなかで水田稲作が行われていた地域はなく，仙台平野も津軽平野も網羅的な生業構造の中での水田稲作と考えられている。選択的な生業構造のなかで水田稲作を行わない限り，環壕集落や共同体祭祀は出てこない。藤尾は利根

川以北の水田稲作文化を弥生文化には含めず，政治社会化を目指さない水田稲作文化と位置づける。

政治社会化を目指さない水田稲作文化であっても，全国２位の規模を誇る箸墓型前方後円墳である梵天山古墳が，３世紀の常陸太田に成立する意味を問うのが広瀬和雄である。水田稲作を行っているのは確実で，人口が多いにもかかわらず，政治社会化せず，西日本と同時に古式の前方後円墳を造り得た，この背景には何があるのか。政治社会化して古墳を作る西日本，政治社会化せず古墳を造る利根川以東～東北中部。いずれも弥生文化と捉える設楽や高瀬，石川日出志，弥生文化とは捉えない藤尾。両者ともこの疑問に答える義務を負っているといえよう。

そして津軽には水田稲作を300年もの間，行うものの洪水によって壊滅後，水田稲作をやめて，古墳も造らない道を歩んだ人びとがいた。高瀬克範は，東北北部を北の「ボカシ」の地域とした藤本強の見解に異を唱えて，むしろ異なる文化の担い手たちが雑居していた地域と考えた方が実態に近いと主張する。かつて林謙作は，複数の文化がみられるものの，主体となる文化がない状態をエピ縄紋とよんだが，これは林もいうとおり「文化の段階」を示す用語であって，時代区分の概念ではない。縄文と弥生だけでは説明できない，中部･関東の条痕文土器文化や，関東北部～東北中部の水田稲作文化，そして青森の砂沢～田舎館文化をどのように定義するのか，重要な問題である。

稲と鉄，という言葉で表現された従来の弥生文化観は，その当初から鉄器による生産力の発展に支えられ，わずか700年という短い時間で，世界でも珍しい急速な古代化を成し遂げ，古代国家を成立させるという，右肩上がりの高度成長型弥生文化観で説明されてきた。

しかし炭素14年代に基づく長期編年のもとでは，前半の600年は大陸系磨製石器でひたすら木製農具を作るものの，なかなか水田稲作は広がらなかった。その後，まず韓半島との対外交流が前４世紀に本格化して青銅器や鉄器が現れ，次に前３世紀の楽浪郡設置以前から中国との対外交流が始まると，社会の変化が速度を上げていくと考えられるようになってきた。韓半島東南部からもたらされる鉄素材を材料に鉄製加工具が作られ，木製農具が増産されるようになる。この動きは古墳前期までほとんど変わらない。古墳は，低成長の弥生前半期と，高成長の弥生後半期に特徴づけられる弥生文化が，鉄器の普及や生産力の発展といったハードウェアを前提に成立する西日本と，本格的な水田稲作が始まってからわずか500年足らずで政治社会化もしない関東北部～東北中部にかけての地域で成立する。

こうした時期的な多様性と地域的な多様性をもつ諸文化が，藤本のいう「中の文化」のなかには混在していたのである。この諸文化を，弥生文化の中の多様性と捉えるのか（設楽，高瀬，石川），弥生文化と複数の文化からなる集合体と考えるのか（藤尾），今後の議論の対象となる。

６．研究組織（全期間）

［共同研究員］（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

李　　亨源　韓国・韓神大学校博物館　　安藤　広道　慶應義塾大学文学部
小林　謙一　中央大学文学部　　小林　青樹　國學院大學栃木短期大学文学部
設楽　博己　駒澤大学文学部（22年４月より東京大学大学院）
野島　　永　広島大学文学部　　松木　武彦　岡山大学文学部
吉田　　広　愛媛大学ミュージアム
高瀬　克範　明治大学文学部（23年４月より北海道大学文学部）

岸本　直文　大阪市立大学文学部　　小椋　純一　京都精華大学
山田　康弘　島根大学法文学部（23年４月より本館・研究部）
○上野　祥史　本館・研究部・准教授　　坂本　　稔　本館・研究部・准教授
◎藤尾慎一郎　本館・研究部・教授　　西本　豊弘　本館・研究部・教授
広瀬　和雄　本館・研究部・教授
李　　昌熙　本館・科研支援推進委員（23年４月から外来研究員）

［ゲストスピーカー］

21年度　今村　峯雄　本館名誉教授，石川　岳彦　日本・中国考古学会会員　12月26～27日
22年度　石川日出志　明治大学文学部　５月17日
　　山田　康弘　島根大学法文学部　12月25日
23年度　中沢　道彦　長野県考古学会会員　５月21～22日

「新しい古代国家像のための基礎的研究」2009～2011年度
（研究代表者　広瀬　和雄）

１．目的

国立歴史民俗博物館が進めてきた炭素14年代測定法で得られた新しい実年代は，弥生・古墳時代の通説・定説に大幅な見直しを迫っている。また，環境変化にたいする人間対応の見直しや，国家と民族の再考など，歴史学研究をとりまく情況は，近年大きく変貌している。しかしながら，そうした情勢に対応した研究が十分になされてきたかというと，そうとも言い難い現状が横たわっている。

いっぽう，1970年代以降の「記録保存」のための遺跡の発掘調査（緊急調査，行政発掘とよばれてきた）で，膨大な考古資料をはじめ，木簡や漆紙文書などの史料などが滞留している。そして，それにともなう研究者の増加によって，個人では把握しがたいほどの個別論文も発表されている。また昨今，各所ですすめられてきたＣＯＥ研究などでも，つぎつぎと膨大な研究成果が蓄積されだしている。

ところが，それらの多くは，分析的な研究が主流を占めていて，多岐におよぶテーマがなかなか総合化されにくいという研究現状を，生みだしているようにも見える。いま要請されているのは，そうした現況を打破するための，長期的な視野に立った総合的な共同研究―文献史学・考古学・民俗学などの学際研究―である。

上記のような研究情況に鑑み，古代史像の再構築をめざした総合的な研究を推進していくという視座のもと，古墳時代から律令国家への転換期である７世紀を中心にしながら，６～８世紀ごろを対象にして，中国・朝鮮半島などをふくめた東アジア史的観点にたって，古代国家像を再検討するための基礎的研究を進めることが，この共同研究の目的である。

これまでは古代国家といえば律令国家である，が通説となっているが，それは本当に自明なのか，３世紀中ごろから７世紀初頭の350年間におよんだ前方後円墳の時代は，これまで言われているように律令国家の形成過程にすぎなかったのか，そして古墳時代の内的な要因で律令国家は成立したのか，東アジアの動向はそれらにたいしてどのような契機を占めたのか，北東北や九州や南島の「国境」では何があったのか等々，既往の通説の問い直しもふくめた共同研究を実施する。

２．今年度の研究目的

第３年次の平成23年度は，第１年次と第２年次の研究会の個別発表で抽出された，いくつかのテーマに即して、考古学，文献史学の双方からの研究発表をおこない，学際的な議論をおこなうことにした。また，第１年次の東北地方，第２年次の沖縄諸島，大津京周辺につづいて，第３年次は７世紀ごろの古墳や古代寺院などが集中していて，『播磨風土記』が遺されている畿内周辺の播磨地域，ならびに倭とは異質な国家である高句麗遺跡の踏査を実施し，現地での議論を深めることとした。

３．今年度の研究経過

５回の研究会を実施した。研究会の概要は次の通りである。

第８回研究会

2011年６月26～27日（於・国立歴史民俗博物館）

研究発表１　山中章　「日本古代宮都宮城構造の変遷からみた７・８世紀の中央権力構造」

研究発表２　高田貫太「瓦から見た７世紀代の日本と新羅の関係」

研究発表３　仁藤敦史「推古期の権力構造と宮室―小墾田宮と二重身分の矛盾―」

研究発表４　荒木敏夫「古代の苑地と禁苑」

上記した４本の研究発表にしたがって，飛鳥宮から長岡京にいたる７～８世紀の中央政権の構造と特質を議論した。

第９回研究会

2011年９月23～24日（於・国立歴史民俗博物館）

研究発表１　広瀬和雄「７世紀の地域首長層の動向」

研究発表２　太田博之「古墳時代後期の朝鮮半島系遺物と東国首長層の動向」

研究発表３　熊谷公男「出羽国の特質と秋田城」

研究発表４　藤沢　敦「古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての東北地方日本海側の様相」

研究発表５　渡辺信一郎「定額制の成立――唐代後半期における財務運営の転換」

上記５本の研究発表に基づいて，７～８世紀の地域社会の政治的特性とその変質について議論した。

第10回研究会

2011年10月30日～11月３日

高句麗遺跡の踏査と現地研究会。中国集安，通化，本渓地方を中心に高句麗遺跡を踏査し，本渓博物館で高句麗関係の出土品などを調査した。踏査した主な遺跡は次の通りである。将軍塚古墳，太王稜古墳，千秋塚古墳，西大塚古墳などの王陵群，五灰墳などの壁画古墳，山城下墓群などの墓群，国内城，丸都山城，五女山山城，高爾山城などの山城。

研究発表１　鈴木一有「高句麗研究史―考古学を中心として―」

研究発表２　上野祥史「中国世界の周縁地域という視点と三燕・高句麗」

現地の高句麗遺跡に即して，高句麗と倭の王墓，国家形成，権力構造などについての議論を深めた。

第11回研究会

2011年12月23日～24日　志んぐ荘（兵庫県たつの市）

「『播磨風土記』の世界」と題して，播磨国揖保郡（兵庫県たつの市）の古墳・古代遺跡を踏査し，現地で

研究会を実施した。
研究発表１　坂江　渉「播磨風土記からみた古代の播磨」
研究発表２　岸本道昭「考古学からみた播磨風土記」
研究発表３　吉川真司「秦益人刻書石再考―播磨国飾磨郡と周防国吉敷郡―」
踏査した播磨国揖保郡の遺跡は，古代山陽道，美作道，馬立古墳群，狐塚古墳，長尾薬師塚古墳，那波野古墳，布勢駅家，奥村廃寺，越部廃寺などである。『播磨風土記』に記された記事と，古墳，古代寺院，駅家など，遺跡とのかかわりなどについての議論をおこなった。

第12回研究会

2012年３月18日（於・国立歴史民俗博物館）
３年間の共同研究のまとめとして，「中央政権と地方支配」「地域社会の実像」「外交と国境」の三つのテーマにもとづき，基調報告をもとに討論をおこなった。
基調報告１　仁藤敦史「『日本書紀』に見える「任那」観―官家・日本府・調の実像―」
基調報告２　山中章「考古学からみた７～８世紀の地方と中央」
基調報告３　鈴木一有「７世紀における地域拠点の形成―東海地方を中心として―」
中央と地方，外交と国境，地域社会の実態などについて，７世紀を中心として総括的に議論した。

４．今年度の研究成果

１，２年次の研究会で抽出されたテーマ，中央政権と地方支配，地域社会の実像，神祇と仏教，東アジア世界と渡来文化，外交と国境などに基づいての討議を深めた。

まず，都城の変遷をつうじて，律令国家の構造と特質を探った。ついで，終末期古墳や古代寺院が偏在した地域や国境などの特徴的な空間を対象に，７～８世紀における在地社会の政治的特質を議論した。ことに，『播磨風土記』に記載された遺跡の踏査と，それに関する検討を現地でおこなった。また，中国集安の高句麗遺跡を踏査し，高句麗と倭の王墓の比較などを通じて，彼我の国家形成や権力構造などについて論究を深めた。また，最後の研究会では中央と地方，外交と国境，地域社会の実態などについて，７世紀を中心として総括的に討議した。

５．３年間をつうじての成果

共同研究の研究成果は，2012年度末に刊行予定の『国立歴史民俗博物館研究報告』でまとめる予定であるが，いくつかの論点や課題を列記しておく。

第一，７世紀の地域社会の実態を通して，中央と地方の政治秩序のありかたを探った。①国域や郡域はどうして決定されたのか。古代以降も根強くつづく郡域は，３～６世紀の首長領域と相似しているが，国域や国府，さらには小国（分国）などはそうした古墳時代の政治圏や政治中枢とは重ならない場合もあって，律令国家の独自の論理で再編成された蓋然性が高い。②前方後円墳終焉後の７世紀の有力古墳―方・円墳，多角形墳など―の偏在性から，広域におよぶ陸運と伝統的な水運が交差する交通の結節点が，中央政権によって掌握され，そこに国府や駅家などが設置される。そうした動向は，律令国家の諸要素の整備として予定調和的にとらえられがちだが，そうではなく７世紀の対新羅政策に基因する可能性がある。③古墳時代の首長系譜は不安定で，律令国家ほどの安定性や固定性はみられないが，３世紀中ごろから７世紀初めごろまでの

中央―地方の政治秩序を表してきた前方後円墳造営が終息してから律令システムが定着するまでは，冠位十二階などが代替したのであろうか。

第二，外交や国境から古代国家を考えた。①古墳時代には国家間の，もしくは王権の一元的な外交はなく多元的であった。国民国家的枠組みに規定された古代外交論や，中国王朝と百済を中心とした国家外交史は相対化されねばならない。②東国などの地方首長が独自に外交して朝鮮半島系文物を獲得した，などと関連して地域の自律性が強調されがちである。しかし，彼地の「もの」と人の獲得が，中央政権抜きに東国首長などが独自でなしえたのか，その必要性は奈辺にあるのか。それらが時代とともに変化した外交の窓口（大和，吉備，筑紫など）や，それに従事した葛城氏，吉備氏，紀氏などの動向と相即的に，そして倭国の権益などを考慮して論究される必要がある。③「任那日本府」は外交の出先機関であって，軍事的支配の拠点ではなかった。「任那の調」も含めた対新羅外交については，律令国家が５，６，７世紀の朝鮮半島諸国をどのようにとらえていたかという『日本書紀』史観とともに，加耶の滅亡や新羅の台頭，さらには安羅，大加耶，金官国などの消長など，きめ細かく東アジアの政治動向をみなければならない。そして，百済三書（百済中心の立場）の復元などともに，考古資料からみた日朝交渉史との整合性が，倭国の外交政策として結実されるのが望ましい。④残存した倭人集団，在地性の強い倭人集団，日本出自と混じった倭系在地豪族，派遣使臣など，多元的な倭王との君臣関係が，各時期の渡来的文物の解釈には考慮されねばならない。⑤巨石墳が築造された６～７世紀の壱岐島は，筑紫に数万の兵が駐屯した記事とあいまって，対新羅の外交・防衛拠点として位置づけられる。それは随・新羅への脅威に基因した大津京への遷都や，防衛ラインであった朝鮮式山城の建設などと一体的に考究されねばならない。⑥北東北では５世紀は続縄文文化集団（エミシ）と交易を介して共存していたが，７世紀以後は柵と城に代表される武力での露骨な蝦夷支配が貫徹されていく。そこには人と人の関係性から，土地を媒介にした，すなわち領域性を前提とした支配への統治方式の転換があった。

第三，中央権力と国家のありかたに論究した。①古墳時代も，律令国家も，農耕社会に基盤をもった社会で，前者が発展して後者が生まれたとみるのが自明であったが，はたしてそうか。対外的な契機をみないと，古墳時代の内在的論理だけではその説明は十分ではない。たとえば，琉球は交易をつうじた階級社会であるし，前期高句麗の政治拠点は可耕地が乏しいというふうに，周辺地域においても国家形成の契機やその基盤は多様であった。したがって，従来の内的発展段階論だけでは限界がある。②そもそも，古墳時代は人的秩序を中核にした政治システムだし，律令国家はそれに加えて地域的秩序―古墳時代からは出てこない―が前面に出された政治システムであった。それらは異質な政治秩序で，不連続な側面があるから，古墳時代が律令国家の形成過程だという自明の通説には再検討の余地が大きい。③律令国家は唐をモデルとした宮都を形成し，支配層の一体性と君臣関係の確認，畿内首長層の集住と階層化を視認する都城は採用したが，彼地にあった宗廟や羅城は存在しない。いっぽうで，古墳時代の聖水儀礼とのイデオロギー的つながりも指摘される饗宴の場，苑池が備えている王権の道具立てとしての可視空間を，どのようにレイアウトしたのかといった視点から，新羅などもふくめた東アジア的ひろがりで，７～９世紀の都城の変遷をあとづけねばならない。④国家概念はいうまでもないが，権力や支配などの概念も，近年では正面からの議論は敬遠されがちである。概念化と体系化が学問の根幹だという本質を見失っては，新しい歴史像は樹立しがたい。⑤前方後円墳に媒介された政治システム―中央・地方の関係性をもった分権国家―と，中央集権国家といわれる律令国家のそれとの中間形態，すなわち７世紀の政治体制を『日本書紀』や木簡，宮都や古代寺院や終末期古墳などの一

体的理解から構築しなければならない。それは通説のように国家の成立なのか，あるいは国家の転換なのか，という問いともかかわる。

具体性をそなえた「饒舌」な文字史料と，「寡黙で普通名詞」の考古資料との壁は厚くて，高い。さらに７世紀以前の文字史料は少ないし，『日本書紀』は同時代史料ではない。したがって，解釈の幅が大きい。いっぽう，考古資料は膨大な量にのぼるが，個別形態論的解釈が主流で体系的な像が出されにくいし，個別研究を通してその向こうを視るという研究姿勢は難しくて，大きなテーマは等閑に付されがちである。

歴史学のニーズが著しく減少しているいまこそ，こうした文献史学と考古学の研究をめぐる現状を打破していく試みが不可欠である。そうでないと，研究の新しい知見は増えても，新しい歴史意識の形成につながっていく歴史像の樹立は難しい。近年の歴史研究のキーワードである地域性と多様性を意識しつつも，統合の指向性をもった共同研究の歩みを重ねていくしかない。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

安里　　進	沖縄県立芸術大学	渡辺信一郎	京都府立大学
鈴木　一有	浜松市生活文化部	大平　　聡	宮城学院女子大学
菱田　哲郎	京都府立大学	荒木　敏夫	専修大学
亀田　修一	岡山理科大学	坂本　　稔	本館・研究部・准教授
田中　俊明	滋賀県立大学	高田　貫太	本館・研究部・准教授
熊谷　公男	東北学院大学	○仁藤　敦史	本館・研究部・教授
吉川　真司	京都大学	林部　　均	本館・研究部・准教授
藤澤　　敦	東北大学埋蔵文化財調査室	平川　　南	本館・館長
太田　博之	本庄市教育委員会	◎広瀬　和雄	本館・研究部・教授
山中　　章	三重大学	藤尾慎一郎	本館・研究部・教授

「旧石器時代の環境変動と人間生活」2009～2011年度
（研究代表者　西本　豊弘）

１．目的

この研究の目的は，茨城県の霞ケ浦にそそぐ花室川流域が約３万年前の旧石器時代の遺跡群であり，この地域でナウマンゾウやバイソンなどの狩猟がおこなわれたことを明らかにすることである。そして，縄文時代へどのように受け継がれていったのか検討することである。

２．今年度の研究目的

2010年度に発掘したT1地点で採取した砂利を水洗選別し，石器と木材を採集する。また，今年度も花室川の流域で発掘調査を行う。

３．研究経過

2010年度に発掘したT1地点で採取した砂利を水洗選別した。その結果，メノウ製石片を１点，ナウマン

ゾウの歯板片１点，その他動物骨を１点と，多量の植物遺体を採集した。また，花室川右岸NG地点で発掘調査を実施した。

４．研究成果

T1地点で採集したメノウ製石片は，人口品である可能性が高いことが分かった。また，石片の上下の出土位置での植物遺体の年代測定の結果，メノウ製石片は約３万年前のものと判明した。NG地点の発掘調査では，約３万５千年前以降の堆積層であることが明らかとなった。

５．３年間を通じての成果

旧石器時代の動物骨と旧石器が同時に出土はしなかったが，メノウ製石片が１点出土したことと，ナウマンゾウが約３万年前まで，トナカイが約２万８千年前，バイソンが約２万２千年前頃に，この谷筋で生息していることが明らかになった。更に，低湿地を発掘したことから，ヴィルム氷期の亜間氷期（約３万５千年前）から最寒冷期（約２万８千年前），後氷期の初め（約２万前），縄文期にかけての，古植生が明らかとなった。このような古植生の同一地点での年代的な変化を捕えた例は，日本では初めてである。

この研究は前年度で終了したが，花室川流域では旧石器時代人がナウマンゾウやトナカイ，バイソン等の哺乳類の狩猟活動を行っていたことは間違いない。河川堆積物のため発掘地点が限られるが，石器と動物骨を伴う地点が必ず存在する。その地点の調査を行えば，旧石器文化の実態が明らかになるだろう。
2012年度に，歴博研究報告の１冊に研究成果をまとめる予定である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は副代表者）

安藤　壽男　茨城大学理学部
国府田良樹　ミュージアムパーク茨城県自然博物館
松浦　秀治　お茶の水女子大学人間文化創世科学研究科
白石　浩之　愛知学院大学文学部
鈴木　三男　東北大学学術資源研究公開センター
工藤雄一郎　本館・研究部・助教
◎西本　豊弘　本館・研究部・教授
小畑　弘巳　熊本大学文学部
小林　謙一　中央大学文学部
新美　倫子　名古屋大学博物館
中島　　礼　産業技術総合研究所
今村　峯雄　本館名誉教授
○藤尾慎一郎　本館・研究部・教授

［基盤研究］

「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」2011～2013年度
（研究代表者　原　正利）

１．目的

本共同研究は自然資源利用の歴史を，専門分野が異なる研究者が歴史的な相互作用と関連させつつ分析することで，人と自然との関係がどのような要因によって変容してきたかを総合的に研究し，明らかにするこ

とを目的とする。

今日，近代の自然保護の根幹が大きく変容しようとしている。なかでも人びとの生活によって維持されてきた二次的植生（いわゆる「里山」）がもつ，生物・文化多様性への関心が高まっている。しかし現在語られる「里山」は理想化されたものであり，現実の里山を歴史的にみると，人が自然と共生してきたとはとても言い難い。「里山」は歴史的なさまざまな要因や，人間側の一方的な思惑によって，過度に伐採された時期もあれば放置された時もあり，その姿をたびたび変えてきた。現在，最も必要な研究は「日本人は自然を大切にしてきた」といった，あたかも所与のもとして存在したかのような自然観にとらわれずに，日本人は自然をどのように利用してきたのかをフィールド研究に根ざし，その歴史的な変遷の具体的な様相を，実証的に検証することだと考えられる。

さらに本共同研究は，「学問分野が異なる研究者が同一のフィールドを研究対象とする」「フィールド調査におけるエンド・ポイントを明確化する」「展示による成果の公開をおこなう」という特色をもつ。多分野の研究者が参画する共同研究では学問分野ごとの，研究対象・方法論・時代による資料レベルの差異などの要因によって，最終的には参加メンバーによる個々人の研究成果の集成になる傾向が強い。その問題点を改善し，共同研究のあり方の新たな模索と，共同研究による調査成果の総合化の実現も目的としている。

２．今年度の研究計画

千葉県内の研究対象とするフィールドの候補地は，安房の嶺岡丘陵・館山丘陵から海岸にかけての地域，大多喜丘陵の南で清澄山を頂点した丘陵地帯，そして安房小湊，安房天津の太平洋に面した３地域である。この地域は棚田が卓越しつつ炭の生産地であり，養老川の水運とかかわっている。そして安房小湊，安房天津では山地利用がマテバジイの植林などと漁業が深く関係している。さらにこれらの地域の自然資源利用が，江戸・東京の大消費地と深くかかわっていることが候補の理由になっている。

・文献資料班による自然環境利用・自然資源利用・生業調査

当該地域の村の近世における自然環境利用・自然資源利用・生業を，文献資料から明らかにする。初年度は特に文献資料の発掘に努め，適合的な地域・村を絞り込むことを目指す。

・フィールド調査による環境利用・自然資源利用・生業調査

文献調査と同じ地域内の村を選定する。地域内の現在の基本的な自然環境とその歴史的な変遷を把握する。

明治以降の地図，航空写真，村の写真を利用しつつ実地調査をおこなう。調査地域内の村落における聞き取り調査等を活用して，およそ100年間の村の自然環境利用，自然資源利用，生業，土地利用を復元する。それとともにデータをGIS技法によって分析し，選定地域の自然環境利用や土地利用の変遷を定量的に把握する。

３．今年度の研究経過

予備調査　平成23年５月25日，26日

場所　千葉県君津市黄和田畑地区（東大演習林内札郷作業所）

調査　黄和田地区内の川回し廃村調査及び，今年度のフィールド調査の方法を再検討した。その結果，地区に入り調査を行うにあたって，君津市の行政と調査地の住民の理解を得ることが必要だと判断した。そこで君津市の教育委員会への説明と２回の現地説明会を行った。

第１回現地説明会　平成23年７月13日　第２回現地説明会　平成23年８月10日

場所　千葉県君津市坂畑亀山コミュニュティーセンター

内容　第１回は，上総，亀山，蔵玉，黄和田畑地区の自治会長に対して，８月10日は，蔵玉地区，黄和田地区の住民に対して説明会をおこなった。その結果，調査は蔵玉地区から開始することにし，調査開始前に蔵玉地区の回覧で地区住民全員に調査内容を通知し理解を得てから調査を行うことにした。そのため本調査は，９月22日からの開始になった。

本調査

本調査は計34回行った。

2011年

第１回９月22日～23日，第２回９月28日～29日，第３回10月５日～９日，第４回10月12日～13日，第５回10月15日～17日，第６回10月19日～20日，第７回22日～24日，第８回10月26日，第９回11月４日～８日，第10回11月９日～12日，第11回13日～14日，第12回16日～17日，第13回19日～21日，第14回11月23日～25日，第15回11月27日～28日，第16回12月１日～２日，第17回12月14日～15日，第18回12月17日～18日，第19回12月21日～22日，第20回12月24日～26日

2012年

第21回１月28日～29日，第22回１月30日～31日，第23回２月４日～５日，第24回２月10日～13日，第25回２月16日～17日，第26回２月18日～20日，第27回２月24日，第28回３月２日，第29回３月８日～11日，第30回３月14日，第31回３月15日～16日，第32回３月18日～19日，第33回３月22日～25日，第34回３月28日～31日

調査の内容は，主としてフィールド調査であるが，このなかには５回の文献調査も含まれている。いずれの調査も，専門分野が異なる共同研究のメンバーが複数参加することをこころがけ，フィールドで土地利用の調査をおこないながら，それぞれの専門分野からの視点で議論をおこなった。

４．今年度の成果

フィールド調査

蔵玉地区の現在の土地利用，特に灌漑用水路と水田の分布の調査からはじめた。水と生業との関係を明らかにすることで，さまざまな分野との協業を行う上での接点を模索しようと考えた。

第１の特徴として，蔵玉地区の灌漑は，「二五穴」（横二尺，約60センチ，縦五尺，150センチ）というトンネル状の用水路を山に穿ち水を引いていることである。蔵玉用水と呼ばれ，黄和田畑の小櫃川沿いに取水口があり，トンネル状の用水路は，長いもので一本が250メートルもある。これを何本もつないで，下流の折木沢までおよそ５キロに及ぶ灌漑用水路を作る。嘉永６年（1853年）に掘削したもので，現在も利用されている。

小櫃川は川底が低く，台地の上の水田には直接水を引けないために，上流から水路を作る必要がある。この地域は，蔵玉用水以外に，黄和田畑用水，大戸用水，平山用水があり，いずれも「二五穴」による用水路である（黄和田畑用水は，昭和45年７月１日の大洪水のため崩壊。現在は利用されていない）

今年度は，この蔵玉地区，折木沢地区の「二五穴」を2500分１の地図に記録しつつ，その構造と歴史及び，現在もおこなわれている管理方法全般について，観察と聞き取り調査をおこなった。

第２の特徴として，川回しという，谷間を流れる蛇行していた小川を直線化し，蛇行部分を水田にする方

法がとられていた。これについても2500分１の地図に記録しつつ，観察と聞き取り調査をおこなった。また明治時代の迅速地図などを参考に，水田面積を復元すると，昭和30年代まで，水田面積が増加していることがわかってきた。

第３の特徴として，近世から現代まで，蔵玉地区の土地利用は相当に変化している。明治のはじめまでは，村の周囲の斜面はマツなどを選択的に残し，その周囲を同心円状に焼き払って広大な茅場（草地）にする。さらにその周囲は奥山と称して，薪炭林として利用していた。この広大な茅場は，イノシシ，シカ，サルなどの野生動物が耕作地に侵入するのを防ぐ役目を果たしていた可能性がある。

いずれにしても，この地区の自然利用は，「二五穴」や「川回し」などの大規模な土木工事と村周辺の自然改変に特徴があるのではないかと考えている。

文献調査

蔵玉地区には，現在のところ「蔵玉区有文書」（約1500点）「門生区有文書」（約200点）「朝生家文書」（79点）が残っている。今年度は，それぞれの文書についての目録ごとに分類し写真撮影を行った。今後内容を精査する予定だが，近世の土地利用を復元するうえで有用な資料であることがわかった。

「蔵玉区有文書」

いくつかの村絵図が存在しており，特に天保11年の村絵図は「三方領地替え」に関わって作成された史料である。また元禄の検地帳写しやその後の土地関係の帳面，地租改正時に作成された絵図類と土地帳簿などが良く残っている。

「門生区有文書」

「年貢割り付け状」と「年貢皆済状」などが比較的よく残っている。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

尾崎　煙雄　千葉県立中央博物館・上席研究員
島立　理子　千葉県立中央博物館・上席研究員
江口　誠一　千葉県立中央博物館・上席研究員
加藤　久佳　千葉県立中央博物館・上席研究員
大木　淳一　千葉県立中央博物館・上席研究員
清水　克志　農業食品産業技術総合研究機構農村工学研究所農村総合研究部・契約研究員
梅崎　昌裕　東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻人類生態学教室・准教授
大久保　悟　東京大学農学生命科学研究科・助教
後藤　雅知　千葉大学教育学部　准教授
富田　瑞樹　東京情報大学 総合情報学部 環境情報学科　講師
管根　幸裕　千葉経済大学経済学部・教授
森田　彩子　東京大学大学院医学系研究科　特任助教
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
青木　隆浩　本館・研究部・准教授
村木　二郎　本館・研究部・准教授
柴崎　茂光　本館・研究部・准教授
工藤雄一郎　本館・研究部・助教
松田　睦彦　本館・研究部・助教
久留島　浩　本館・研究部・教授
○西谷　　大　本館・研究部・准教授
◎原　　正利　千葉県立中央博物館・生態・環境研究部長

「江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作･流通に関する調査研究」2010～2012年度

（研究代表者　小瀬戸　恵美）

１．目的

歴史資料において，その構成材料を明らかにすることは保存や修復のみならず，資料の歴史的・美術史的位置づけをおこなううえでも非常に重要である。本研究では自然科学的手法をもちいて材質同定をおこなうとともに自然科学・美術史学双方の観点から製作技法や流通経路の解明もこころみる。また，画像分析による製作時の色彩復元や技術解明の手法開発とその有効性の検討もおこなうことにより，年代や製作地における技術変遷の解明をめざす。化学分析については，組成分析，ラマンや赤外などの分光分析，抗体を利用したウェスタンブロット法によるたんぱく質抽出，鉛同位体比法による材料産地推定，構造の材質調査，年代測定などを中心とする。画像分析については，歴史資料計測に適した光源や資料の表面状態を観察するのに適した解析法の検討などをおこなう。対象資料は館蔵資料を中心とするが，必要に応じて他機関の資料をも扱う。また，上記研究組織のメンバーは中心となるものであり，個々の資料調査および技法調査の際には関係する館内外の研究者や伝統技術保持者にも協力を仰ぐ。主な対象資料は以下のとおりである。

１．江戸後期から明治初期の美術資料の材質と製作，流通

当館が平成20年度に購入した「歌川派錦絵版木」368枚とその版木をもちいて摺られた錦絵を対象として，使用された顔料・染料・膠着材の同定をおこなうとともに，版木の残された彫り目や記された墨書などを精査して技法の解明を試みる。また同時に明治初期にかけて極端に誇張された西洋由来の遠近法をとりいれた民画である泥絵も対象とする。これは近年，絵画として再発見されたものであり，製作技法の双交流の端となりうる。加えて，これら美術資料の表面状態計測などの画像分析手法について検討する。

２．顔料，染料や膠着材の流通

１．と関連して，日本と東洋，西洋間での顔料・染料・膠着材など材料の双交流の解明を目的として，調査をおこなう。特に江戸後期は西洋の人工顔料の日本への輸入やアジア経由での材料の流入が文献の記述として残っているので，化学分析と文献の双方から流通の解明をめざす。

３．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明

伝統的な天然顔料は金属鉱物をその原材料として製作された。これらに鉛同位体比分析や組成分析を適用し産地推定をおこなうことにより，顔料や原材料の流通経路の解明をめざす。また，同時期の金属の製錬・精錬技術を自然科学的に調査することにより，その時代の加工技術を明らかにする。

２．今年度の研究目的

１．美術資料について化学分析を先行し，材質成分の同定やデータ蓄積をおこなう。また材質の状態や混合による変化を再現画像化するに適した画像分析の手法や条件を検討する。

２．西洋，東西アジアの顔料・染料・膠着材の収集・採取，および，文献や美術史関係資料などをもとに情報収集をおこない，記述の調査，精査をおこなう。

３．天然顔料の原材料を採取していた鉱山など産出地の調査を中心におこなう。

3．今年度の研究経過

第1回研究会　9月5日　国立歴史民俗博物館

発表：「IKATの染料分析」（古田嶋智子（東京文化財研究所））

「色の研究」（大久保純一）

3次元計測錦絵版木撮影　10月14日　国立歴史民俗博物館

点検室（撮影），第2点検室（資料出庫・熟覧）

調査（アメリカ合衆国）　2月29日～3月11日　ハーバード大学サッカラーギャラリー，ボストン美術館，スミソニアン研究機構フリーアギャラリー，アメリカ国会図書館，メトロポリタン美術館（科学研究費補助金による）

4．今年度の研究成果

平成23年度は「1．江戸後期から明治初期の絵画資料の材質と製作，流通」においては分析方法の確立とデータ蓄積をおこない，「2．顔料，染料や膠着材の流通」「3．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明」については主として文献による情報収集と試料採取計画をおこなった。特に，1．においては分析機器による顔料，染料の自然科学的分析だけでなく，前年度に作成した錦絵版木測定用治具を用いて歌川派錦絵版木群のうち「源氏雲浮世画合」を中心として3次元計測による表面調査を本格的におこない，彫りの技術の解明にむけて前進している。また，ラマンイメージング測定による江戸後期資料測定をおこなったところ，従来の機器では測定・同定ができなかった藍の同定が非破壊・非接触で行うことができた。

現時点において，3課題のうち「1．江戸後期から明治初期の絵画資料の材質と製作，流通」については着実に成果がでているが，「2．顔料，染料や膠着材の流通」「3．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明」については前進はしているものの，具体的な結論をだすにいたっていない。来年度の最終年度にむけて，より一層のデータの蓄積が必要である。

5．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

岩切友里子　学識経験者，国際浮世絵学会編集委員
谷口　陽子　筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
高嶋　美穂　国立西洋美術館・保存科学研究員
高塚　秀治　学識経験者
眞鍋　佳嗣　千葉大学大学院融合科学研究科・教授
古田嶋智子　東京文化財研究所
杉崎佐保恵　東京都市大学・非常勤講師
永嶋　正春　本館・研究部・准教授
坂本　　稔　本館・研究部・准教授
鈴木　卓治　本館・研究部・准教授
大久保純一　本館・研究部・教授
○齋藤　　努　本館・研究部・教授
◎小瀬戸恵美　本館・研究部・准教授

「歴史・考古資料研究における高精度年代論」2009～2011年度
（研究代表者　坂本　稔）

1．目的

炭素14年代法に代表される自然科学的な高精度年代測定法は，これまでも歴史・考古資料の研究に応用さ

れ，成果を上げてきた。ところが自然科学的に達成される「測定の確からしさ」と，歴史・考古学的に要請される「年代の確からしさ」との間には，未だ少なからぬ乖離が認められる。本研究は，両者の間に横たわる課題を整理し，年代測定の精度向上を両者の立場から実現することを最終的な目的とする。

本研究では，単に年代が事象と合う，合わないといった議論にとどまることなく，合わないとすればどこに原因があるかを自然科学的，ならびに歴史・考古学的に明らかにすることで，より精度の高い年代観の獲得を目指す。

２．今年度の研究目的

分担者が対象とする時期・資料の年代測定を行い，その結果について考察を加える。研究期間を目途に実施するため，高い精度で広範囲の編年を行うことは困難と思われるが，個々の事象に対する考察は今後の年代研究の推進の上で有用な情報となることが期待される。

自然科学からのアプローチとして，測定に対する方法論，ならびに年代較正に対する整備を行う。暦上の年代のよりどころとなる「較正曲線」は，広く用いられる国際標準（IntCal09）と日本産樹木による結果がわずかに異なる時期があることが明らかになりつつある。この違いは日本の考古・歴史学においては極めて大きな問題となる。研究期間を目途に，注目される時期について日本版較正曲線の整備を効率的に行う。

３．今年度の研究調査

○研究会

第１回：６月23日，国立歴史民俗博物館

坂本　稔：紀元前後の東アジア産樹木年輪の示す炭素14年代の変動

天理柳本大塚古墳の木棺から採取した柱状試料（コウヤマキ）について，セルロースの酸素安定同位体比（δ^{18}O値）の変動パターンが年輪年代の判明していた飯田市畑ノ沢地区の埋没ヒノキ樹幹と一致した。これまで年輪年代が判明しなかった本試料，ならびに年輪幅の変動パターンが一致していた桜井茶臼山古墳の柱状試料（コウヤマキ）の年代が与えられたことになり，日本産樹木年輪の示す炭素14年代の変動をより詳細に議論できるようになった。δ^{18}O値による樹木年輪のクロノロジーは樹種を選ばないこともあり，今後日本版較正曲線を整備する上で強力なツールとなることが期待される。

坂本　稔：本基盤研究における炭素14年代測定の実績

本研究では縄文時代から歴史時代にかけて広範な時期の年代測定を実施してきたが，他機関との協業などでも様々な試料の測定を行ってきた。内容は報告書や学会発表などで公表されてきたが，結果の解釈に課題を残すものや追加測定による再検討が必要なものもあり，今後も継続調査が必要である。

第２回：３月15日，国立歴史民俗博物館

工藤雄一郎：宮城県都城市王子山遺跡から出土した炭化植物遺体の^{14}C年代測定

縄文時代の植物利用の実態および地域的・時間的変遷を解明には，試料の年代的な位置づけを明確にする必要がある。都城市王子山遺跡の縄文草創期と推定される炉穴および土坑から出土した炭化植物遺体の炭素14年代測定を実施し，およそ13,300年前を中心とした時期に位置づけられた。この時期は最終氷期末の気候激変期にあたり，隆帯文土器にともない植物が積極的に利用されていたことを示す重要な例となった。

井原今朝男：中世紙の紙縒り・付箋等の年代分析について―船橋清原家旧蔵資料について―

国立歴史民俗博物館所蔵の『船橋清原家旧蔵資料』を修復・整理した際に発生した，虫損による本紙の乳部分断片や綴じ紐を抽出し，記録・調査の上炭素14年代測定に供した。自然科学的な年代分析と中世史の史料批判学による検討結果はおおむね合致し，室町期の資料に対して有効であることが分かった。綴じ紐の年代は，冊子本が原形のままか後世の修補を受けたものかを調査する方法として，装丁研究に役立つといえる。

４．今年度の研究成果

較正曲線の整備には，年代の判明した試料の炭素14年代測定を蓄積する必要がある。樹木年輪は有力な試料であるが，従来の年輪年代法は樹種による制限などがあり，試料の確保が困難であった。近年名古屋大学大学院の中塚教授が，年輪セルロースの酸素安定同位体比が樹木の生育する湿度環境に応答すること利用した，新しい年輪年代法を提案している。歴博でこれまで蓄積されてきた樹木試料の測定を依頼したところ，変動パターンが一致し，これまで不明だった樹木年輪の年代が明らかになった。酸素安定同位体比による年輪年代法は樹種によらず，比較的広い範囲で同調することから，有力な年代測定法の一つと期待される。従来の年輪幅による年輪年代法，炭素14年代法による測定を組み合わせ，較正曲線の整備が飛躍的に進展するものと期待される。

５．３年間の研究成果

資料研究における時間軸の設定は，歴史学・考古学において必要不可欠なものである。文字資料の残らない先史時代においては，人と環境との関わりや地域間の比較を行う上で基礎的な情報となり，歴史時代においても十分な資料調査，史料批判を行うことで，モノ資料から新たな情報を引き出し，編年研究に発展させることができる。炭素14年代法は測定の精度が近年格段に向上し，本研究では時代を超えた資料研究への応用の可能性を示すことができた。

一方で，精度の高い年代を得るための課題も浮き彫りとなった。特に高い実年代が要求される紀元後の時代については，炭素14年代の較正曲線にみられる地域効果が無視できない。古墳開始期において，日本産樹木年輪の示す炭素14年代の挙動が欧米産樹木による較正曲線「IntCal」と異なっていることは従前から指摘されてきたが，年代の判明した資料や樹木年輪の測定から，地域効果の疑われる時期（７世紀代，16世紀代など）が明らかになってきた。研究代表者は本研究との連関を図りながら，2009～2012年度科学研究費補助金（基盤Ａ）「日本産樹木年輪による炭素14年代の高精度較正曲線の作成」を実施してきたが，これまで年代の判明した樹木年輪の確保に課題があった。この点については，樹木年輪セルロースの酸素安定同位体比の変動パターンから年輪年代を決定する方法が推進され，課題の解消が図られることが期待される。

精度の高い年代を得るために，測定に先立つ試料調製をより重視すべきである。研究の途上で樹木年輪試料に較正曲線との照合がうまくいかないものが見られたが，有機溶媒による洗浄で樹脂などの揮発性分を積極的に取り除き，より妥当な結果を得ることができた。一方，測定試料となるグラファイト炭素の調製が適切に行われなかったと考えられる不具合も確認された。年代研究を資料調査から調製，測定，解釈という形で総合的に実施するためにも改善すべき課題である。

年代測定は研究内における位置づけが曖昧なまま，ともすれば結果報告にとどまってしまうことが懸念される。炭素14年代法でモノ資料に高精度の年代を与え，応用の可能性を提示することで，年代研究の推進を図る必要がある。本研究における個々の成果は必ずしも全てが連関するものではなかったが，課題を整理し，

年代研究に発展させるための共通認識を得ることはできたと考えている。

6．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

光谷　拓実	総合地球環境研究所	小田　寛貴	名古屋大学年代測定総合研究センター
小林　謙一	中央大学文学部	中尾　七重	武蔵大学・総合研究所
松崎　浩之	東京大学大学院工学系研究科	井原今朝男	本館・研究部・教授
◎坂本　　稔	本館・研究部・准教授	永嶋　正春	本館・研究部・准教授
西本　豊弘	本館・研究部・教授	仁藤　敦史	本館・研究部・教授
広瀬　和雄	本館・研究部・教授	藤尾慎一郎	本館・研究部・教授
林部　　均	本館・研究部・准教授	○工藤雄一郎	本館・研究部・助教

「建築と都市のアジア比較文化史」2009年度～2011年度
（研究代表者　玉井哲雄）

1．2011年度の研究目的

日本建築の特質をあきらかにするためには，日本列島内の建築だけではなく，広くアジア全体を視野に入れ，日本列島内の建築とアジア各地の建築と比較・考察を行う必要がある。このような研究目的を設定するに至ったのは，2007・2008年度に行った歴博共同研究「東アジア比較建築文化史」において，東アジアの現地調査，日本と韓国，日本と中国，そして日本とアジアの比較を主題にしたシンポジウムを開き，研究討議を重ねた結果，このような東アジア全体を視野に入れた研究成果を基礎に，対象地域を東アジアからさらに外のアジア世界に広げ，なおかつ個々の建築だけではなく，それらの建築が成立した背景となっている都市までも視野に入れた研究が必要であるという考えに達したからである。そこで歴博共同研究「建築と都市のアジア比較文化史」を2009・2010・2011年度の３年計画で実行することになった。

１年目である2009年度に行ったネパールの調査，および研究会における議論の結果から，２年目である2010年度には，南アジアの中心であるインドの建築・都市調査を行い，なおかつ日本の建築・都市を考える立場から，アジア全域の建築と都市との関係をあきらかにするための研究の枠組み設定を行った。

最終年度である2011年度には，東アジア中国と南アジアインドの中間に位置して，文化交流の上から重要な意味を持つ地域である東南アジアを取り上げ，具体的にはこの地域にあって伝統的な建築・都市文化の豊かなカンボジア・タイの調査を行うことにした。

また，共同研究員全員が少なくとも１回は研究報告を行い，内容に関して内容のある討論ができるように４回の研究会を計画し，３年間の研究成果をまとめるとことも目的とした。なおこの共同研究全体の内容に沿った形で，共同研究員以外の研究者にも参加をもとめて歴博において国際シンポジウム「アジアの都市―インド・中国・日本―」を計画・実行した。

2．研究経過

2011年５月27・28日の第１回研究会（国立歴史民俗博物館）において，研究計画についての議論，そして話題提供と研究報告が行われた。

話題提供　　包慕萍「東アジアにおけるエルデニ・ゾーの建築史的な意義」
研究報告１　岩渕令治「新興武家地の誕生―幕末期佐倉藩江戸藩士の移住をめぐって―」
研究報告２　仁藤敦史「外交拠点としての難波と筑紫―館・小郡・大郡―」
研究報告３　高橋一樹「13世紀首都京都の宗教的儀礼施設からみた王権と都市―御願寺の存廃を通して―」

2011年７月23・24日の第２回研究会（国立歴史民俗博物館）の研究報告，および予備報告，話題提供は以下の通り。

研究報告１　小泉和子「堺と懸硯（掛硯）」
研究報告２　大田省一「都城の地域性―ベトナムの都城とラオス・カンボジアー―」
研究報告３　韓　三建「高麗時代の朝鮮半島の都市―慶州・蔚山―」
予備報告　　黄　蘭翔「アジアの視点からみる仏教建築」
話題提供　　玉井哲雄「平泉世界遺産登録と日本都市史，そしてアジア都市史」

2011年10月１・２日の第３回研究会（国立歴史民俗博物館）の研究報告と話題提供は以下の通り。

研究報告１　上野祥史「漢代城郭都市の風景」
研究報告２　玉井哲雄「中世都市平泉の誕生」
研究報告３　黄　蘭翔「中国の初期仏塔の建築要素に関する考察」
話題提供　　国際シンポジウム「アジアの都市―インド・中国・日本―」

2011年10月20日から28日にかけて，カンボジア・タイの建築・都市の調査を行った。カンボジアにおいてはアンコール・トムやアンコールワットなどの仏教寺院および，宮殿や都市関連の遺跡，そしてタイにおいてはバンコック，アユタヤ，スコタイ，チェンマイなどの都市をめぐって建築・都市関連の施設・遺跡を見る計画であった。ただ残念ながら，この地域は数年来という大洪水に見舞われ，とくにタイにおいては増水のため道路などが寸断され，予定していたアユタヤ，スコタイは調査対象から外さざるをえなかった。幸いにもチェンマイは大きな被害はなく，バンコク，そしてカンボジアの地域もほぼ予定通りの調査が何とか可能であった。

2011年12月３・４日に歴博において国際シンポジウム「アジアの都市―インド・中国。日本―」を行った。詳しい内容については別記（国際交流の項参照）するが，アジアの都市・建築をインドと中国という二つの文化圏およびその周縁社会の文化という観点から論じあったシンポジウムで，実質的な内容のある議論ができた。

2012年１月28・29日に第４回研究会（国立歴史民俗博物館）の研究報告と研究成果のまとめの討論を行った。

研究報告１　藤井恵介「唐様・天竺様のイメージ論―研究史批判―」
研究報告２　佐藤浩司「家をとおして見たアジア」
参加者全員　研究成果のまとめと総括討論

３．研究成果

計画通りではなかったが，カンボジア・タイの建築および都市の調査を行うことができた。アジア全域の文化を考える場合，東アジアの中国と南アジアのインドという２つの中心があり，この二つの文化圏を結ぶ位置に東南アジアがある。今回の調査で訪れたカンボジア・タイはこのインド文化圏の周縁に位置しながら，

中国文化と無関係ではない位置にあって独自の文化を築いてきた。特に重要なのは12世紀を中心とする時期に水による流通・交通によって王朝の宮殿都市が建設されていることで，同時期の日本の京都を中心とする王朝都市や建築との類似性が見られることなどはもっとも注目されてもいいと思われる。

また共同研究員全員が共同研究の枠組みで研究テーマを設定し，報告を行い，なおかつ議論を行ったことは成功であった。これは研究報告に集大成されるはずである。

４．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大田　省一　京都工芸繊維大学・准教授
藤井　恵介　東京大学大学院・教授
包　　慕萍　東京大学生産技術研究所・外国人研究員
黄　　蘭翔　台湾大学芸術研究所・副教授
Mohan Pant　国立トリブバン大学・教授
小泉　和子　昭和のくらし博物館・館長
布野　修司　滋賀県立大学・教授
韓　　三建　蔚山大学校・教授
佐藤　浩司　国立民族学博物館・准教授

岩淵　令治　本館・研究部・准教授
大久保純一　本館・研究部・教授
◎玉井　哲雄　本館・研究部・教授
広瀬　和雄　本館・研究部・教授
○上野　祥史　本館・研究部・準教授
高橋　一樹　本館・研究部・准教授
仁藤　敦史　本館・研究部・教授

「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究―『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に―」2010～2012年度

（研究代表者　関沢　まゆみ）

１．目的

1997年度・98年度に本館が行なった博物館資料調査「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」から，10年以上が経過した現在，その後の日本各地の葬送墓制の伝承はまたさらに大きく変化している。とくに，2000年を境に，農村部においても葬祭場の建設が相次ぎ，葬儀の場所が自宅から葬祭場へと移り，それにともなって葬送儀礼の省略や死穢忌避観念の稀薄化などが指摘されるようになってきている。本共同研究では，第一に，この博物館資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』１～４（1999年・2000年刊行）をもとに，その追跡調査を行ない，葬送・墓制の変化の実態を調査分析することを目的とする。これには，Ａ：各地の葬送・墓制の変化の実態を調査分析（地域単位），Ｂ：テーマごと（広く面で）（例：洗骨・改葬習俗の変化，サンマイ利用の変化，土葬から火葬へ，自宅葬から葬祭場へなど過渡期のケースの情報蓄積など）の２つを考えている。そして，第二に，各地に伝承されている葬送・墓制に関する民俗とその分布についての情報整理を行ない，日本列島の民俗の地域差の問題を葬送・墓制の側面から考察する。（例：お盆の墓参習俗〈近畿と東北との違い〉，巳正月の習俗〈四国〉，盆に迎える霊と盆棚，その類型差，血縁的関係者と地縁的関係者との役割分担を示唆する例〈棺担ぎ，穴掘り，最初に土を入れる喪主，野焼き等〉など）。第三に，1960年代から70年代の高度経済成長期における生活変化と2000年以降におきている生活変化，とくに葬送・墓制の大きな変化と，両者の時差・タイムラグに注目することによって，民俗の伝承の変化と世代交代という問

題などについての分析を行なう。

本共同研究は，本館の資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』１～４に得られている情報資料をもとにそれを活用して，民俗学の基本的研究課題である時間差と地域差という両者を視野に入れた研究展開を試みるものである。

２．今年度の研究目的

東北，関東，東海，中部，北陸，近畿，四国，中国，九州の各地方における2000年以降の葬送・墓制の変化に関する追跡調査を行なうことに重点をおき，研究会において共同研究員各位による中間報告を随時行なう。

３．今年度の研究経過

〔研究会〕今年度は４回の研究会を開催することができた。

第１回研究会　日時：平成23年６月４日（土）　場所：東京ガーデンパレス

研究発表

大本敬久「正月と死者祭祀―民俗と歴史―」

新谷尚紀「火葬と葬儀の変化―広島県旧千代田町域の事例より―」

その他　各位の調査報告等情報交換

第２回研究会　日時：平成23年11月12日（土）　場所：東京ガーデンパレス

研究発表

関沢まゆみ「盆棚の地域差について」

武井　基晃「沖縄の葬送―中城村での調査を事例に―」

高橋　史弥（國學院大学大学院生）

「北海道における葬送習俗の変容

―全国的な資料集成の情報と帯広市域の情報との比較の視点より―」

その他　各位の調査報告等情報交換

第３回研究会　日時：平成23年12月17日（土）　場所：跡見学園女子大学

研究発表

蒲池　勢至（同朋大学仏教文化研究所・客員所員）

「愛知県における葬儀の今昔」

倉石あつ子「縮小化する葬儀２―長野市の事例―」

鈴木　岩弓「東日本大震災後の土葬復活にみる死者観の変化」

その他　各位の調査報告等情報交換

第４回研究会　日時：平成24年３月３日（土）　場所：国立歴史民俗博物館

研究発表

赤嶺政信（琉球大学法文学部・教授）

「沖縄の葬墓制の地域的特徴と変化に関するいくつかの論点」

井口　学（沖縄民俗学会会員）

「日本復帰前の沖縄における墓の新築をめぐって―新聞記事，公文書を中心に―」

越智郁乃（広島大学大学院総合科学研究科・特別研究員）

「現代沖縄の墓制の変化―本島都市部の墓造りを事例に―」

〔調査〕共同研究員各位によるフィールドワークにより，各地の葬送・墓制の変化についての資料情報が蓄積されている。

４．今年度の研究成果

2011年度は共同研究の第２年目であり，共同研究員各位が葬送墓制の変化に関する民俗調査を継続して行ない，研究会においては各地の葬送墓制の変化の実態に関する情報共有と意見交換を行なった。

葬送儀礼の簡略化のなかで固い伝承を維持しているものへの注目

まず，葬儀社の関与と葬儀の場の変化（自宅から葬祭場の利用へ）によって，葬送儀礼の省略化が進んだことはこれまでも指摘されてきたことであったが，愛知県の報告者（年間40件の葬儀を行なっている僧侶）からも葬送儀礼の消滅と葬儀の世俗化の実態について報告がなされた。愛知県春日井市の事例では，昭和30年代までは自宅葬，昭和40年代から60年代までも自宅葬ではあったが葬儀社の関与がみられるようになった時代，そして平成以後，葬儀会館での葬儀が中心となってきた。そのなかで，儀礼の対象が死者を安置した棺から遺影が置かれた祭壇に変化していったこと，生花（洋花）の大量使用と樒の形骸化，霊柩車の普及と葬列の消滅，葬儀の手伝いは男性が中心と決まっていたのが葬儀会館では女性の司会者が登場するなど，僧侶としての葬儀執行者の立場から大きな変化として指摘された。

このような春日井市域の変化のなかでも，湯灌が継承されていることが注目された。これについては，北海道帯広市の事例（1940年代から2010年代の37事例の調査）でも葬祭場の利用によって葬儀は大きく変化していっているにも関わらず，湯灌は家族や親戚の仕事とされていることが報告された。また，広島県中山間地，旧千代田町域の公営火葬場の設置（1970年，2008年），葬祭ホールの開設（2008年）と，それにともなう町内の３つの集落における葬儀の変化についての調査報告が行なわれ，葬祭ホールの利用に伴い，伝統的であった真宗門徒の講中の協力が希薄になるなか，その講中によるオトキ（お斎）が継続されているケースが1つだけあることが注目された。葬儀の場所の変化が葬送儀礼の省略化あるいは消滅をもたらしているが，そのようななかで，湯灌は家族・親戚で，葬儀後の飲食は講中の協力で，など，固い伝承を維持している事例もある。変化の早い地区と遅い地区との双方について今後の動向に注意する必要がある。

民俗の分布をめぐる問題

四国地方の巳正月，中国地方や近畿地方にみられる仏の正月に関連する民俗の分布とその歴史の追跡への試み，盆棚の地域差をめぐる問題の提起など，日本列島全体を俯瞰して，民俗の地域差とその傾向性をとらえる試みが紹介された。いわゆる比較研究法の活用についてはその方法が未熟な段階にあるため，さらに地域差の解読の仕方について議論していく必要があることが確認された。

『葬墓制関係写真資料集１』の編集

土葬習俗の消滅から公営火葬場の利用へ，そしてとくに抵抗感のないままの骨葬の一般化，また従来石塔を建てることのなかった地域での新たな石塔墓地の設営など，葬送習俗をめぐる大変化が起こってきている。そこで今年度は，民俗学がその主要な調査研究対象としてきた両墓制に関する現場情報を写真データを中心として，昭和40年代から50年代にかけて，近畿地方から始めて東西日本各地で収集された伝承情報を整理し，

写真データに解題をつけて編集した（189ページ）。

5．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大本　敬久　愛媛県歴史文化博物館・専門学芸員
菊池　健策　文化庁文化財部伝統文化課・主任文化財調査官
倉石あつ子　跡見学園女子大学文学部・教授　　新谷　尚紀　國學院大學大学院・教授
鈴木　岩弓　東北大学大学院・教授
武井　基晃　筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
西村　　明　鹿児島大学法文学部・准教授
米田　　実　甲賀市教育委員会歴史文化財課・市史編さん室係長
小池　淳一　本館・研究部・教授　　常光　　徹　本館・研究部・教授
○山田　慎也　本館・研究部・准教授　　◎関沢まゆみ　本館・研究部・教授

「民俗儀礼の資料論的研究」2011～2013年度
（研究代表者　山田　慎也）

1．目的

通過儀礼や年中行事など，地域で伝承されてきた諸儀礼や習俗等の民俗は，近代化の過程で大きく変容している。なかでも，現在実践されている儀礼は，さまざまな要因によって地域のコンテキストからはずれ，均質化する傾向が多くみられる。例えば，七五三は，地域によりさまざまな年齢別，男女別などの組み合わせによって従来行われてきたが，現在，女子の三，七歳，男子の三，五歳とされ，従来慣習のない地域でも行われるようになっている。これは商業化による宣伝と作法書の普及で全国に浸透したことによる。また墓制は，明治17年の墓地取締規則（のちの墓地埋葬法）により，多様な墓の習俗の有り様も次第に平準化しつつある。

こうした民俗儀礼を取り巻く環境については，法令の施行や行政の働きかけ，風俗改良運動や生活改善運動などの影響などを含む政治的要因，出産や終末期，死亡確認など生物医療の進展による医療的要因，またデパートや葬祭業など，儀礼の産業化による消費文化的要因，地域の過疎化，少子高齢化などによる社会的要因による変容などが考えられ，日本という国民国家の枠組みの中での均質化であり，一種の「国民儀礼」ということができよう。

しかしこうした点について，産育や年中行事などで個別的には指摘されているが，それを総合化する研究はあまりなされてこなかった。むしろ民俗学では，地域が独自に実践している儀礼をおもに取り上げてきた。だが地域の儀礼が成立するのも，情報が容易に流動する現代において，全国的な平準化とのせめぎ合いの中で生じているものであり，全国的動向の理解は地域性を持つ儀礼を理解する上でも重要である。

なかでも地域博物館は，地域性を帯びた儀礼については積極的に調査を行い資料収集する一方，平準化していくものについてはあまり体系的に取り上げることはなく，とくにモノ資料も体系的にまた積極的に収集されてはない。

そこで本研究では，第一に通過儀礼，年中行事を中心に現代の民俗儀礼の様相と変容の要因について，政

治的，医療的，経済的，社会的な観点など多様な視点から総合的に分析検討し，地域から乖離し国民儀礼化した民俗の傾向を検証する。第二にそれにともなう関連する資料，なかでもモノ資料の収集の方向性を確立する。以上の研究を行うことで現代の民俗儀礼の動態を明らかにすることを目的とする。

２．今年度の研究計画

まず全国的な儀礼の様相と均質化の諸要因について整理分析をする。おもに政治的要因や消費経済の浸透による儀礼分野の変容を検討する。また専門に応じて共同研究員が調査を行い全国的動向とそれに対する地域の儀礼との関係を明らかにする。

儀礼の作法書やマニュアル本などを収集分析し，全国的に取り上げられている儀礼等を，整理分析する。また歴博にある儀礼関連の資料データを整理する。

３．今年度の研究経過

第１回研究会　平成23年６月25日（土）・26日（日）　場所：歴博

山田慎也　「共同研究の趣旨説明」

「民俗儀礼の変容と資料論の構築」

前田俊一郎氏「近代の法制と地域社会―墓制の変容・再編を考える―」

各メンバーの「研究紹介」

今後の計画についての議論

第２回研究会　平成23年10月29日（土）　場所：早稲田大学

第78回歴博フォーラム「近代化のなかの誕生と死」において，共同研究メンバーが報告し，他のメンバーも討議に参加した。

板橋　春夫氏「いのちの近代：トリアゲバアサンから助産師へ」

鈴木由利子氏「子どもの誕生にみる『選択される命』」

山田　慎也　「葬儀の変化と死のイメージ」

前田俊一郎氏「近代国家と墓制：死者の「共葬」をめぐる実践」

浮ヶ谷幸代氏　コメント

土居　　浩氏　コメント

第３回研究会　平成23年12月17日（土）・18日（日）　場所：歴博

小井川理氏「出産・成長にかかわる「白絵」の資料について」

問芝志保氏「墓産業の展開から見る墓の変化―「画一化」と「多様化」―」

筑波大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程　ゲストスピーカー

大本敬久氏「巳正月（仏の正月）の現代的変容」

第４回研究会　平成24年２月17日（金）～20日（月）　場所：徳島県勝浦町・徳島市

国清　一治氏「ビック雛まつりと地域活性化」

（ビック雛祭り実行委員会初代委員長・現勝浦町議会議員副議長）

松田香代子氏「稲取のつるしかざり」

ふれあいの里さかもとにて研究会を行った。さらにフィールドワークとして，徳島県勝浦町ビッグ雛祭り，

徳島市の徳島城博物館などで，雛祭りのイベント科に関するフィールドワークを行った。そのほか，関連の博物館等の調査も行った。

4．今年度の研究成果

今年度は，研究会の発足であり，メンバーで問題意識を共有化するためまず，各自の研究の紹介を行い，それぞれの問題関心を提示し議論を行った。

そのうえで，生と死に関して，近代化の変容を多様な側面から検討した。誕生に関しては，近代の生物医療の浸透により，出産介助者の位置づけが大きく変わっていくなかで，女性の助産師に限定されていくことが明らかになった。さらに産屋の位置づけも出産の場から出産後の安息の場になるなど，医療と民俗の共存が見られ，民俗と医療の相互の影響がうかがえた。また近代医療の発達により堕胎における生命認識の変化が起きており，医療関係者の要請によって水子供養が発達した側面なども指摘された。

また死については，近代法制の成立によって，各地の墓制を統制するようになる中で，埋葬地と石塔建立地を別にする墓制が成立する地域があるなど，共葬墓地を誕生させると共に，想定外の方向をも作り出していき，やはり民俗と近代化の相克が起きていることが判明している。

また歴博フォーラムは，四室リニューアルの閉鎖に伴う展示の代替として開催したものであるが，展示と関わるだけでなく，本共同研究の課題でもあり，メンバーが参加して，一般に公開して議論を行った。これにより来聴者の関心も高く，研究成果が公開された意義は大きかった。

また，徳島県勝浦町のビック雛祭りという節供行事のイベント化についてフィールドワークをおこなった。ここでは，雛に関する民俗が資源として活用され，地域の活性化をするだけでなく，地域のアイデンティティーの確立にも寄与していることが判明した。こうして共同調査をおこない，議論を現地ですることで，共同研究メンバーの問題意識を高めることができた。

5．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

前田俊一郎　文化庁伝統文化課・文化財調査官
板橋　春夫　國學院大學・講師
浮ヶ谷幸代　相模女子大学人間心理学科・教授
門田　岳久　日本学術振興会・特別研究員
重信　幸彦　本館・客員教授
加藤　紫識　千代田区四番町資料館・学芸員
俵木　　悟　成城大学文芸学部・准教授
小山　隆秀　青森県立郷土館・学芸主査
青木　隆浩　本館・研究部・准教授
常光　　徹　本館・研究部・教授
○小池　淳一　本館・研究部・教授
土居　　浩　ものつくり大学建設技能工芸学科・准教授
鈴木由利子　宮城学院女子大学・講師
岩本　通弥　東京大学大学院総合文化研究科・教授
小国　喜弘　東京大学大学院教育学研究科・准教授
松田香代子　愛知大学・講師
大本　敬久　愛媛県立歴史文化博物館・学芸員
立石　尚之　古河歴史博物館・学芸員
小井川　理　神奈川県立歴史博物館・学芸員
原山　浩介　本館・研究部・准教授
松尾　恒一　本館・研究部・教授
◎山田　慎也　本館・研究部・准教授

〔リサーチ・アシスタント〕

坪内　俊行　慶應義塾大学・博士課程２年

「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」2009～2011年度
（研究代表者　小島　道裕）

１．目的

洛中洛外図屏風歴博甲本（以下「歴博甲本」）は，現存最古の洛中洛外図屏風として著名な，館の代表的資料のひとつである。しかし，これまでの洛中洛外図屏風研究は上杉本に偏っていたため，歴博甲本独自の研究は必ずしも盛んでなかった。

しかし，2007年に開催した企画展示「西のみやこ 東のみやこ―描かれた中・近世都市―」を契機とした館内の研究から，発注者，作者，制作目的，制作時期などの基本的な成立事情について仮説を提示するに至り，描かれた人物の特定や事物の解釈も進んできた。

洛中洛外図屏風は歴史資料としても大きな価値を持つため，その研究の進展は，美術史のみならず，政治史，社会史など多くの分野に影響をおよぼし，新たな課題を生み出すことになると思われる。そこで，この機会に館外からも各分野の研究者の参加を求め，共同研究として研究を進めることで，成果を学界共有のものとすることを目指している。

また，歴博甲本は，一部に大きな欠失部分があり，全体的にも画面の破損・汚損がかなりあるため，本来の画像を復元した複製を制作することが以前から館内で検討され，館外でも欠失部分復元の試みがなされていた。これについても，図像研究の水準が上がり，また今日のデジタル技術を用いることで，蓋然性の高い復元を行う条件が整ってきた。

復元という共通の目標を掲げて図像研究を行うことは，各分野からの研究を，焦点を合わせて進展させる効果が期待でき，また絵画をどのように分析しどのような手続きで復元していくかという作業自体もすぐれて研究的な営為である。

そして，成果として制作された復元画像は，展示や教育普及活動の素材として活用することが可能であり，そのための活用方法の研究もまた，これまで当館で行われてきた博物館学的研究を受け継ぐものとして重要である。

このように，本研究は洛中洛外図研究の水準を向上させ共有化すると共に，復元複製についても研究実績を積み，またその成果を用いて博物館活動の充実化にも資することを目的とする。

２．今年度の研究計画

引き続き各分野からの報告を行うことで，歴博甲本の研究状況と今後の課題を共有し，前進させる。画像の復元に関しては，現状複製の画像データの加工による図像の修復を進め，さらに色彩の再現も行なう。原本の調査や，類例に基づいて，妥当な復元案を考案し，試行的な出力を行いつつ，検討を進める。活用方法については，人物データベースの構築を引き続き進め，現状複製等の活用についても，年度末に予定している企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画」の開催に合わせて検討を進める。

３．今年度の研究経過

今年度は研究会を３回開催し，また随時関係者が参加する形で作業を行った。

研究会では，文献史学からの検討を中心に，描かれた幕府の問題，公家・武家の行動様式の問題，内裏で

の儀式の問題など検討を通じて，画像の意味を考察し，また実際の現地で，描かれたものとの対比を行った。歴博甲本以外の洛中洛外図屏風についても，分類や工房の問題などについて検討を行なった。

復元複製の完成に向けては，歴博甲本および関連資料の原本調査も行い，特に復元作業における今年度の中心的な課題であった色彩の復元については，研究会での検討の他，関係者が随時協議を行った。

第７回研究会

日時：2011年４月20日（水）

場所：国立歴史民俗博物館　第２研修室　他

【復元作業の報告と検討】

・欠損部分　修復・補筆作業の現況確認

・彩色復元の検討

【研究発表】

末柄　　豊（東京大学史料編纂所）

「大永四・五年における三条御所の上京移転について」

井原今朝男（国立歴史民俗博物館）

「室町期における公家の参上作法と邸宅の位置」

第８回研究会

日時：2011年９月17日（土）～９月18日（日）

場所：同志社大学ハリス理化学館　他

９月17日（土）

【復元作業の報告と検討】

・欠損部分　修復・補筆作業の現況確認

・彩色復元の検討

【研究発表】

「歴博甲本『洛中洛外図屏風』にみえる禁裏正月行事」

近藤　好和（国立歴史民俗博物館客員）

「歴博Ｆ本洛中洛外図類型について」

大塚　活美（京都府立総合資料館）

「新出の洛中洛外図屏風（北海道伊達市開拓記念館蔵）について」

小島　道裕（国立歴史民俗博物館）

「今出川　復興の記録―西園寺・足利・近衛・後藤そして島津―」

鋤柄　俊夫（同志社大学文化情報学部）

【現地調査】

上京の関連故地付近を巡見

「花の御所」跡，近衛邸跡，光照院，妙顕寺（「柳の御所」跡），宝鏡寺（南の御所）

９月18日（日）

【現地調査】

下京～上京の関連故地を巡見。京都府立文化博物館展示を見学。

平等寺（因幡堂），大政所跡，悪王寺社跡，六角堂，曇華院跡，御所八幡，二条邸跡

第９回研究会

日時：2012年３月26日（月）

場所：国立歴史民俗博物館　第２研修室　他

【報告・協議】

復元・展示等の事業報告，報告書の内容についての協議

【展示場における検討】

企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画」展の現場における資料と解説および活用方法の検討，内覧会参加

４．今年の研究成果

研究会での発表や，現地での検討，原本の調査等によって，それぞれの分野での検討を進めた。企画展示の開催については，予定通り実施することができ，研究成果に結びつけることができた。

画像の復元に関しては，既存部分や類似資料の検討に基づいて，疵の修復や新たな画像を完成させ，色彩の再現も同様に終えて，出力紙を屏風に仕立て，企画展示での公開を行なった。

人物データベースの作成も引き続き進め，描かれた内容についての理解を深めると共に，画像データとリンクしての活用を実現して，企画展示とホームページで公開した。

また，企画展示では，復元と現状の比較をタッチパネルで行なうコンテンツも制作した。

報告書については，研究報告特集号として，①復元複製の制作，②各分野からの研究，の二つの内容によって，2013年の刊行を目指している。

５．３年間を通じての成果

１　「歴博甲本」の復元研究

当初目的とした，「歴博甲本」の制作当初を想定した復元複製については，これをいったん完成させて，実際に屏風の形に表具し，企画展示で公開することができた。

作業としては，スキャナーによる原本からのデジタルデータの取得と，その修正による現状複製の作成，そしてそれをベースとした画像の復元と色彩の復元を行ったが，いずれの段階においても，検討を重ねる過程で多くの知見や作成のノウハウを得ることができた。

特に復元に際しては，原本の詳細な観察によって，残された内在的な情報を読み取ることと，他の洛中洛外図屏風や関連する絵画資料から，比較が可能な対象を探して検討を重ねることで，かなり蓋然性の高い復元を行なうことができた。もとより完全とは言えない，ひとつの案に過ぎないのだが，制作当初を想定するためのひとつの基準となる案として，意義のあるものと言えよう。科学的な分析については，マクロ撮影，赤外線撮影などを行った他は十分に行えず，顔料の推定などに結果としては大きな影響を及ぼすものではないが，計画の履行としては課題が残った。

２　描かれた画像および社会的背景の研究

画像の復元については，特に欠損部分について，どこまで「正解」であるかはともかく，上述のように今後の検証に供するための具体的な案を示すことができたが，欠損部分以外についても，多くの参考画像を検討し，また現地の景観や，発掘データによる知見，および文献史料や他の絵画資料から確認できるさまざま

な事物の実態について，文献，考古，民俗，有職故実などそれぞれの分野からの報告を得ることで，理解を大きく前進させることができた。これらは，それぞれの分野において，さらに新たな課題となるものであり，また洛中洛外図屏風自体の研究においても，相互比較や時系列的な系譜関係を念頭に置いた検討を行なったことから，描かれた事物の問題だけでなく，制作と需要の問題にも踏み込んで考察を行なうことができた。

下記の活用と関連した画像研究としては，「歴博甲本」に描かれた人物について，性別，身分･職業，服装，場所などの情報を記述してデータベース化した。各項目について言語化を行なったことは，あまり例のない大きな成果であり，今後の同種の作業にひとつの標準的な例を示したものと言え，また，描かれた人物の数自体も，1426人とこれまでの説より大幅に増加した。

3　活用についての研究と実践

画像データの活用については，タッチパネルによる超拡大自在閲覧装置のデータを更新し，さらに画面を２分割して，「歴博甲本」の復元複製と現状の比較，および「歴博甲本」と「歴博乙本」の同じ場面を比較できるシステムを開発した。これまでの単純な拡大とその解説から，さらに高い機能を持つ仕組みを作ることができたと言える。

上述の「歴博甲本人物データベース」に関しては，データの検索についても工夫して，キーワードによる検索画面を作成し，企画展示およびインターネットによる利用を開始している。

企画展示においては，内容の読み解きパネル，地形図との比較，他の洛中洛外図屏風も交えた複数の絵画から，個別画像の比較によるスライドショーを作成するなど，いくつかの試みを行ない，今後の実践や，「歴博甲本」に限らない絵画資料の内容分析に基づく活用，さらにそれらの横断化ないし総合化，といった課題に道を開くことができた。

6．研究組織

岩崎　均史　たばこと塩の博物館	岩永てるみ　愛知県立芸術大学美術学部
神庭　信幸　東京国立博物館保存修復課	佐多　芳彦　立正大学文学部
末柄　　豊　東京大学史料編纂所	鋤柄　俊夫　同志社大学文化情報学部
古川　元也　神奈川県立歴史博物館	安達　文夫　本館・研究部・教授
井原今朝男　本館・研究部・教授	大久保純一　本館・研究部・教授
◎小島　道裕　本館・研究部・教授	小瀬戸恵美　本館・研究部・准教授
澤田　和人　本館・研究部・准教授	高橋　一樹　本館・研究部・准教授
玉井　哲雄　本館・研究部・教授	松尾　恒一　本館・研究部・教授
宮田　公佳　本館・研究部・准教授	

※「科研型」の共同研究であり，科研費でも同じ課題で進めている。経費的には，研究会開催に関する部分を共同研究で，複製制作の作業に関わる部分を基本的に科研費で扱っている。

「デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究」2010～2012年度
（研究代表者　鈴木　卓治）

１．目的

インターネット時代の到来とともに，近年歴史研究情報のデジタルデータ化が各所で精力的にすすめられている。国立歴史民俗博物館（歴博）はその設立時より他所に先駆けて日本歴史学のデータセンターとしての使命を担っており，データベースれきはくを始め，さまざまな種類の歴史研究情報をデジタル化し，研究・教育・展示への活用につとめているところである。ゆえに，単にデジタル化しただけでは有効な利用が難しい歴史研究情報の，よりよい活用の典型を示すことが，現代における歴博の重要な任務であるといってよい。

本研究は，日々蓄積されていくデジタル化された歴史研究情報をより高度に利用するための基礎となる具体的な研究課題を提示し，課題への解を見いだす過程に人文学的フィードバックをかけることによって，異分野の研究者が集う国立歴史民俗博物館の特色を生かした，意味論と技術論をかみあわせた研究を実施しようとするものである。

本研究では，具体的な研究課題として，「高度情報検索」，「大規模デジタル画像処理」，「デジタル展示」，「利用者分析」の３つの研究班を設定する。

高度情報検索班は，歴博で公開されているデータベースについて，専門知識に乏しい一般利用者あるいは初学者が所望の情報にたどりつくために必要な技術の開発を目的とする。館蔵資料データベースを具体例として，データに含まれる隠れた相互関係を抽出することにより，関連する概念を連想的にたどりながら利用者に提供することのできる利用者インターフェイスについて考える。

大規模デジタル画像管理班では，歴博のデータベースの中に存在する，数万枚～数十万枚の大量の画像データが付与されたデータベース，しかもデータ１件あたりに数百枚の画像が付与されている場合を含むような事例について，利用者が所望の画像を獲得することが極めて困難な状況が生ずることから，これを解決するための方法について検討を行う。

デジタル展示班では，高精度に計測された歴史資料のデジタルデータを永続的に保存し活用しようとするデジタルアーカイブの活動が近年盛んになってきていることをふまえ，数値として保存されるデジタルデータをどのように提示すれば利用者がより歴史資料への正しい理解を深めることができるかを検討し，必要な基礎技術の開発を行う。実際に試作を行って利用者の評価を受ける形で研究をすすめる．また，近年急速に技術開発が進んだ，タブレットコンピュータや，ゲームコンピュータのコントローラや簡易モーションキャプチャ装置について，博物館展示への応用の可能性を調査する。

なお，当初計画で予定していた「利用者分析班」は，大規模デジタル画像管理班に組込み，管理手法の妥当性の検証の研究として実施することとした。

平成23年度における研究班の構成は以下の通りである。ただし，これは固定的なものではなく，研究の進捗やディスカッション等を経て，プロジェクト内で活発に相互交流を行う。

高度情報検索班：小町，山田，津田，仁藤，安達；大規模デジタル画像管理：村田，津田，青山，仁藤，安達，鈴木；デジタル展示：田中，北村，大久保，鈴木。

２．今年度の研究目的・計画

高度情報検索班については，関連語抽出を応用した検索への適用方法を検討する。

大規模デジタル画像管理班については，平成22年度の検討結果に基づいて，新しい構成案に基づく高松宮家データベースを試作する。試作品をまずはスタッフで評価する。

デジタル展示班については，デジタル展示の第１試作を作成し，本年度末に試験公開を実施する。エントランスホールにて一般来館者に演示し，利用者の反応を観察する。

３．今年度の研究経過

全体：

・全体研究会を２回開催した（12月1日，３月２日）。

・公開研究会を画像電子学会第10回画像ミュージアム研究会との共催により開催した（３月２日）。

高度情報検索班：

・分科会を７回実施した（７月26日，８月31日，10月3日，11月11日，12月26日，２月６日，３月29日）。

・画像電子学会年次大会にて研究発表を行った（６月25日）：

⇨「博物館情報探索における資料群分割の到達容易性による評価」○山田篤（京都高度技術研究所），安達文夫（国立歴史民俗博物館），小町祐史（大阪工業大学）。

・公開研究会にて研究発表を行った（３月２日）：（４．を参照）

大規模デジタル画像管理班：

・本館企画展示「風景の記録」（2011年11月８日～2012年１月15日）にて石井實フォトライブラリー閲覧システムを出展した。

・公開研究会にて研究発表を行った（３月２日）：（４．を参照）

デジタル展示班：

・60インチ大型タッチパネル装置を開発した．コンテンツの内容に合わせて大型タッチパネルの設置を，縦画面にも横画面にも，さらに上向き（テーブル状）にも変えて利用することができる。

・２月23日・24日に東京国立博物館応挙館内部ならびに庭園の360度撮影を実施した。

・公開研究会にて研究発表を行った（３月２日）：（４．を参照）

・３月24日に本館館蔵資料（近世陶磁器コレクションのうち緑釉瀬戸２点）の３次元形状計測を実施した。

・３月24日～４月８日までデジタル展示試験公開を実施した（開館14日間）。

４．今年度の研究成果

全体研究会を12月１日と３月２日の２回開催した。とくに第２回全体研究会は，各研究班の研究成果の中間報告を行う場と位置付け，午後の部を公開研究会として実施し，画像電子学会画像ミュージアム研究会（主査：小町裕史）との共同開催の形で実施することができた。公開研究会では次の９件の研究発表が行われ，本共同研究にとっても，共同開催を行った画像ミュージアム研究会にとっても実りある研究集会となった。

・「歴史DBにおける検索インターフェース設計のためのガイドライン作成」　小野田賢人（芝浦工業大学），安達文夫（国立歴史民俗博物館），徳永幸生（芝浦工業大学），杉山精（東京工芸大学）

・【高度情報検索班】「博物館関連語検索のための木構造を反映した資料群の構成法」　山田篤（京都高度技

術研究所），安達文夫（国立歴史民俗博物館），小町祐史（大阪工業大学）
・【大規模デジタル画像管理班】「資料の濃い構造化と活用のためのアノテーションモデル―より知るために，より深く，濃く」　津田光弘（イパレット）
・【大規模デジタル画像管理班】「時間と場所の情報を有する大量の写真画像の提示方法の検討」　田中紀之（芝浦工業大学大学院），徳永幸生（芝浦工業大学），杉山精（東京工芸大学），安達文夫（国立歴史民俗博物館）
・「歴史資料画像の任意の対応点に基づく比較表示と対応点設定手法の検討」　川北明広（芝浦工業大学大学院），安達文夫（国立歴史民俗博物館），徳永幸生（芝浦工業大学，杉山精（東京工芸大学）
・【デジタル展示班】「国文学資料の電子的展示技法に関する研究―デジタル展示の開発効率向上のために―」北村啓子（国文学研究資料館）
・【デジタル展示班】「デジタルアーカイブ用文化財展示システムの試作」 宮下朋也，田中法博（長野大学），望月宏祐（信州大学大学院），村田良二（東京国立博物館），鈴木卓治（国立歴史民俗博物館）
・「正倉院文書における画像処理を用いた切り分け位置の検出手法の検討」　脇正宏（芝浦工業大学），安達文夫（国立歴史民俗博物館），徳永幸生（芝浦工業大学），杉山精（東京工芸大学）
・「スマートフォンの未較正カメラを用いた分光画像計測」 戸谷重幸，田中法博（長野大学），望月宏祐（信州大学大学院）

高度情報検索班にあっては，館蔵資料データベースのうち考古資料および歴史資料に関する記述をデータとして，関連語の抽出ならびにその適合性についての研究を行なった。分科会を７回実施し，６月に画像電子学会年次大会にて，３月に公開研究会において研究発表を行った。

大規模デジタル画像管理班にあっては，青山教授が展示プロジェクトリーダーを務める企画展示「風景の記録」における電子コンテンツとして，石井實フォトライブラリー閲覧システムを開発した。本システムは展示場に設置され，利用に供された。このシステムは，来館者がどのようにシステムを操作したかの記録をとっており（あくまでどのボタンを押したか，画面のどの位置に触れたか等の記録であり，操作した人間そのものの情報は記録していない），これをもとに，大規模画像データが利用者にどのように閲覧されたかを調査し，大規模画像提供方式の検討のための基礎データとして活用する。（この部分が当初計画における「利用者分析班」の研究目標に相当する。）

デジタル展示班にあっては，利用者が館内で利用する携帯型端末についての基礎的な検討を行い，iPad（iOS），nintendo DSi，ThinkPad Tablet（Android OS）等の使い勝手や，アプリケーション開発の可能性などについて調査を実施した。また，東京国立博物館の庭園および応挙館内部の全方位撮影を実施し，年度末（春休みの時期）にデジタル展示試験公開を実施することができた。来館者に楽しんで展示システムを使ってもらい，システムの改良につながる貴重な意見や問題点の指摘などを受けることができたことは大変有意義であった。今回の試験公開で明らかになった問題点を改善し，また，今年度末に３次元計測を実施した本館館蔵資料のデータも組み込んだ形で，平成24年度の夏を目標に，再度試験公開を実施する計画である。さらに，大型のタッチパネルを縦画面にも横画面にも，さらに上向き（テーブル状）にも利用することのできる固定治具を開発し，平成24年度に調達する予定であった大型タッチパネル本体を，平成23年度に購入できることとなり，展示実験用大型タッチパネル装置を完成させることができた。本装置の有用性に関する評価実験を平成24年度に実施する予定である。

2011年３月11日に発生した東日本大震災の影響で，３月17日に計画していた昨年度第２回研究会の中止を余儀なくされ，平成23年度の共同研究の進行にも少なからず影響が出たことは否めないが，各研究班はそれぞれ努力を重ね，計画以上の研究成果を挙げることができたと考える。

共同研究員には，対外発表を積極的に行なってほしいことと，国立歴史民俗博物館研究報告への論文投稿を目指しての内容のある研究の実施を，引き続きお願いしているところであり，目標達成に向けて努力したい。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

小町　祐史	大阪工業大学情報科学部	田中　法博	長野大学企業情報学部
徳永　幸生	芝浦工業大学工学部	村田　良二	東京国立博物館
山田　　篤	㈶京都高度技術研究所	北村　啓子	国文学研究資料館
津田　光弘	イパレット	青山　宏夫	本館・研究部・教授
○安達　文夫	本館・研究部・教授	大久保純一	本館・研究部・教授
◎鈴木　卓治	本館・研究部・准教授	仁藤　敦史	本館・研究部・教授

「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」2010～2012年
（研究代表者　内田　順子）

１．目的

歴博が民俗研究の一環として1988年より行ってきた民俗研究映像に関して，完成作品と素材映像の保存・活用を推進するとともに，新規で制作する映像の方法論について，館内外の研究者とともに検討するため，2004年度以降，共同研究の枠組みで取り組んできた。

第１期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（2004～2006年，代表：内田順子）では，制作から活用にいたるプロセスを検討し，権利処理等，活用に支障のないかたちで映像を資料として残すためのワークフローを構築し，第２期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」（2007～2009年，代表：青木隆浩）ではそれに基づいて映像制作を行ってきた。その成果は，2006年度にはじまった歴博映像フォーラムの開催による民俗研究映像の一般公開や，2007年度から実施がスタートした，DVDでの館外への貸し出しなど，民俗研究映像の公開促進につながっている。また第２期では，過去の作品の素材のコピーを作成するなど，映像の保存対策も講じてきた。

しかしながら，多量に存在する撮影素材の保存と活用については，適切なメディア，フォーマット，データベースなど，技術的な問題を解決するという課題が残されている。そこで第３期では，大学における民族学や科学分野での映像の制作と資源化のとりくみおよび理論構築を参考にしつつ，新規で制作する３作品と，過去に制作された３作品を対象に，撮影素材の保存と活用のためのデータベース化まで含んだワークフローを構築することを目的とした共同研究を実施する。また，新規で制作する作品では，それぞれの作品のテーマに適したかたちで撮影地の人びとや研究者などと共同で制作してゆく。成果を共有しつつ発信することによって，日常生活や儀礼，信仰，生業の伝承という問題への関心を高めるとともに，立場の異なる人びとを結びつけ，あらたなネットワーク構築に貢献できる映像メディアのありかたの開発へとつなげてゆくためで

ある。

２．今年度の研究目的

今年度のテーマ：芸能・儀礼の伝承における映像活用

祖霊信仰と結びついた荒神を神へと転じ，鎮める作法に特色のある比婆荒神神楽では，33年に一度，式年神楽が行われる。この４日に及ぶ大規模な神楽ほか，当該地域の年中行事を映像で記録し，今後の民俗学研究にとっての資料とするとともに，神楽を行っている地域の人々の伝承活動にも有意義なかたちで記録・保存・活用できる映像を制作する。

その他，2010年度作品に関する研究会，映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会，2010年度作品の英語版の制作，過去の作品のデジタル化等を行う。

３．今年度の研究経過

第４回研究会

日時：日時：７月10日（日）13:00～17:00

場所：歴博　第２会議室

内容：新しい共同研究者紹介

報告と上映「アイヌの伝統と現在　平取編」（内田順子）

報告と上映「アイヌの伝統と現在　白老編」（内田順子）

質疑･討論（全員）

2011年度の民俗研究映像「比婆荒神神楽」制作計画について（松尾恒一）

第５回研究会

日時：10月30日（日）13:00～18:00

場所：歴博　第２会議室

内容：乾尚彦（学習院女子大学）

「久高島年中行事映像データベースの制作――記録映像を残すことの意味と方法」

榎陽介（福島県立博物館）

「福島県の映像アーカイブ事業の経過と成果」

第６回研究会

日時：２月20日（月）13:00～17:00

場所：歴博　第２会議室

内容：2012年度の民俗研究映像「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」制作について（松田睦彦）

４．今年度の研究成果

〔映像制作〕

松尾恒一「比婆荒神神楽―地域と信仰」

広島県庄原市東城町域には，水田の共同祭祀を行う「名」と呼ばれる集落の単位があることで知られる。名においては，冬季に荒神を鎮める年中行事が行われるが，さらに「比婆荒神神楽」と呼ばれる，神楽集団

によって，５・７・13・17・33年に行われる大神楽（式年）が，神職を交えた神楽集団によって行われる。

本神楽には，荒神祭祀のほか土公神にたいする祭祀，託宣等，民俗信仰にもとづく特徴的な祭儀があるが，その基底に認められるのは，一年を周期として行われる稲作と関わる信仰である。

芸北地方に特徴的な，演劇的，娯楽的な演目があわせ行われる点も特徴として見落とせないが，地域の稲作や，これと関わる信仰や行事にも注目しつつ，民俗宗教としての「比婆荒神神楽」の祭儀を映像により明らかにする。

〔民俗研究映像の英語版制作〕

「アイヌの伝統と現在　平取2010」（2010年度，内田順子制作）

「アイヌの伝統と現在　白老2010」（2010年度，内田順子制作）

第４回研究会での検討を経て修正を加えた2010年度作品の英語版は，日本語ナレーション及びテロップの英訳までを今年度行った。

〔研究会〕

第４回研究会では，2010年度に内田順子が制作した「アイヌの伝統と現在」を上映し，それらの内容について議論を行った。本作品は，映像製作業者の協力なしに，内田自らが撮影・編集を行ったものであることから，研究会での議論をふまえて，学術映像としての完成度をさらに高めるための修正を加えることができた。第５回研究会では，映像アーカイブをテーマに，共同研究員である乾尚彦氏による沖縄県久高島での映像アーカイブの実践例と，ゲストスピーカーである榎陽介氏による福島県での実践例をご報告いただいた。第６回研究会は，2012年度に制作を予定している「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」について，制作担当の松田睦彦氏から制作計画の報告があり，全体の構成，内容，撮影や編集の技術的な側面について，参加者全員で討論した。

〔歴博映像フォーラム〕

歴博映像フォーラム６「アイヌ文化の伝承―記憶と人，人と人とをつなぐ映像」

日　時：2012年２月４日（土）　10時～17時

場　所：新宿明治安田生命ホール

内容：

上映①「アイヌ文化の伝承　平取2010」

コメント　貝澤耕一（室蘭工業大学）

上映②「アイヌ文化の伝承　白老2010」

コメント　野本正博（アイヌ民族博物館）

参考上映　「舟を綴る」（床田和隆撮影･編集･監督）

講演①　分藤大翼（信州大学全学教育機構）

「精霊としての映像　―アフリカ「森の民」とのつながり―」

講演②　俵木　悟（成城大学）

「映像記録事業を伝承の支えとするために―無形民俗文化財記録映像の事例から考える―」

［撮影素材のデジタル化と動画データベース］

過去の民俗研究映像（「風の盆フィーリング」1997年度制作，「大柳生民俗誌」1998年度制作，「沖縄の焼物―伝統の現在」1999年度制作，「金物の町･三条民俗誌」2001年度制作，「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」

2002年度制作）について，撮影素材テープのデジタル化を行い，保存措置を講じた。

また，素材映像を検索するためのデータベースプログラムを業者に発注し，来年度，試作が可能な状態にすることができた。

さらに，共同研究員である青木隆浩氏の調査により，宮若市石炭記念館に炭鉱の記録映画フィルムが残っていることがあきらかになった。フィルムの所有者と協議した結果，内容が民俗研究の観点から貴重なものであること，および，保存処置を施しようがない状態にまで劣化が進行したフィルムもあり，撮影内容について，現時点で他の媒体に収録できるものについては作業を進めてもよいことが確認された。以上により，最高水準のHDテレシネでのデジタル化を行った。

5．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

乾　　尚彦　学習院女子大学
新谷　尚紀　國學院大學
村尾　静二　総合研究大学院大学葉山高等研究センター
青木　隆浩　本館・研究部・准教授
柴崎　茂光　本館・研究部・准教授
常光　　徹　本館・研究部・教授
山田　慎也　本館・研究部・准教授
鈴木　卓治　本館・研究部・准教授
◎内田　順子　本館・研究部・准教授
梅野　光興　高知県立歴史民俗資料館
分藤　大翼　信州大学全学教育機構
小池　淳一　本館・研究部・教授
関沢まゆみ　本館・研究部・教授
松尾　恒一　本館・研究部・教授
上野　祥史　本館・研究部・准教授
○松田　睦彦　本館・研究部・助教

「古代における文字文化形成過程の総合的研究」2010～2012年度
（研究代表者　小倉　慈司）

1．目的

国立歴史民俗博物館では20年以上にわたって正倉院文書の複製事業に取り組むとともに全国各地の木簡・漆紙文書・墨書土器・銅印など出土文字資料の調査研究およびその体系化を図ってきた。また近年では，早稲田大学朝鮮文化研究所と共同して韓国内の木簡･石碑の調査を実施し，多くの研究成果を挙げてきている。本研究は，それらの研究蓄積を踏まえ，その総合化を図るとともに，これまで未着手であった文字資料の実物・画像データによる調査研究も実施し，広く東アジア世界を見通して，古代における文字文化の全体像を明らかにすることを目的とする。

具体的な課題としては，書写材料としての竹・木・紙・石・金属の使い分けの問題，古代中国・朝鮮・日本における文字資料の記載様式・内容の比較検討，文法・発音など字音表記の国語学的分析による古代朝鮮の複雑な実態とその影響を受けた古代日本の実態の解明，文字文化の伝播で大きな役割を果たした仏教・儒教・道教・呪術などの宗教的要素の解明などが挙げられる。

このような古代史学・考古学・国語国文学・民俗学などを踏まえた幅広い視点から日・中・韓の文字資料を比較検討し，東アジア全体の視点から見た新しい古代文字文化の形成過程，文字文化受容過程の実態を解明する。

2．今年度の研究目的・計画

本年度は海外調査として，前年度に引き続き韓国にて出土文字資料調査を進めるとともに，中国の長沙走馬楼木簡の本格的調査を開始する。

国内調査としては，東北の多賀城と九州の大宰府を主対象として調査を進める。

前年度に引き続き，全国各地出土文字写真資料の画像データ化を進める。

3．今年度の研究経過

第１回調査・第１回研究会　2011年８月29日（月）～31日（水）　福岡県久留米市・小郡市等

久留米市埋蔵文化財センター，九州歴史資料館，大野城市教育委員会，太宰府市文化ふれあい館において，筑後国府跡・ヘボノ木遺跡等出土墨書刻書土器，大宰府史跡・井上薬師堂遺跡等出土木簡，牛頸ハセムシ古窯群出土刻書土器，大野城市内出土木簡・墨書刻書土器，国分松本遺跡・大宰府条坊跡・宮ノ本遺跡等出土木簡・墨書刻書土器の調査を行い，調査終了後，検討会を開催した。九州歴史資料館にて熊本市二本木遺跡出土の出土印・刻書土器，および太宰府市文化ふれあい館で筑紫野市出土墨書刻書土器の調査も行った。

第２回調査・講演会　2011年10月12日（水）～15日（土）　韓国ソウル市

韓国国立中央博物館にて開催の特別展示「文字，それ以後―韓国古代文字展」に出陳された韓国内の主だった文字資料の調査・検討を行った。また14日，同館にて開催のシンポジウムにて講演・報告を行う。講演・報告および題目は以下の通り。

平川　南　「古代韓国と日本の文字文化交流」

朴　方龍（中央博考古歴史部長）「韓国古代築城金石文の特性」

李　成市　「新羅浦項中城里碑にみる６世紀新羅碑の特質」

三上喜孝　「「龍王」銘木簡と古代東アジア世界
―韓日出土木簡研究の新展開―」

朴　仲煥（韓国金海博物館学芸研究室長）「出土文字資料に表示される人名表記方法
―百済資料を中心として―」

李　鎔賢（中央博学芸研究士）　「佐波理加盤付属文書の検討」

なお同展示の準備に際して，種々協力を行った。

第３回調査　2011年12月23日（金）～27日（火）　中国湖南省

同省長沙簡牘博物館・湖南省博物館において長沙走馬楼簡牘の予備調査を行った。

第３回研究会　2012年３月10日（土）　本館

今年度の実施事業報告および来年度計画の検討，また第２回・第３回調査の報告等を行った。

橋本　繁　「韓国中央博物館特別展調査成果―新羅碑文の役名・職名を中心に」

武井　紀子　「2011年12月長沙走馬楼呉簡の調査報告」

李　成市　「祢軍墓誌研究のために」

平川　南　「扶余・東南里遺跡出土木簡」

この他，写真資料の画像データ化を継続して行った。

４．今年度の研究成果

本年度は国内調査については多賀城関係も対象とする予定であったが，東日本大震災の影響により断念し，若干の計画変更を余儀なくされたが，その分を九州と韓国の資料調査に力を注ぎ，全体としては充実した成果を挙げることができた。なかでも韓国資料調査については当初３年をかけて実施する予定であったが，韓国国立中央博物館で開催された古代文字展を利用して調査を行うことによって，いくつかの碑文の再釈読が可能となり，今年度までにほぼ当初の目的を達成することができた。さらにあわせてシンポジウムを実施することにより，韓国の学界に対し，研究成果を広く公開することができた。一方，中国資料調査については先方との折衝や日程調整に時間を費やし，今年度は準備調査を行うにとどまったが，簡牘の保管状況が把握でき，また木簡と木牘の使い分けの問題についても今後の調査検討を要することなどが明らかとなった。

国内調査については，朝鮮半島・大陸への玄関口である大宰府・西海道における文字資料について，共同研究メンバーの他，出土資料所蔵機関関係者，各遺跡の発掘担当者，九州在住の古代史研究者も加わっていただき，詳細な調査，活発な討論を行うことができた。

写真資料の画像データ化については，共同研究と連動する科研が５年間であるため，共同研究終了後も加えた４年計画での作業を予定しているが，今年度までに全体の分量の1/3程度まで進めることができた。

なお，共同研究員全体で出土･伝世資料の徹底した実物調査を行うことと研究費の有効活用を目的として，館外調査にあわせて館外研究会を実施することにより，効率的に多くの成果をあげることが可能となった。

また，研究会には研究分担者のほか，補助業務に携わっている大学院生も加わり，活発な意見交換がなされた。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

安部聡一郎　金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系
市　　大樹　大阪大学大学院文学研究科
大橋　信弥　学識経験者
新川登亀男　早稲田大学文学学術院
關尾　史郎　新潟大学人文社会教育科学系
寺崎　保広　奈良大学文学部
三上　喜孝　山形大学文学部
山口　英男　東京大学史料編纂所
李　　成市　早稲田大学文学学術院
小池　淳一　本館・研究部・教授
高橋　一樹　本館・研究部・准教授
○仁藤　敦史　本館・研究部・教授
犬飼　　隆　愛知県立大学文学部
神野志隆光　明治大学大学院
関　　和彦　共立女子第二中学高等学校
田中　史生　関東学院大学経済学部
中林　隆之　新潟大学人文社会教育科学系
森下　章司　大手前大学人文科学部
吉岡　眞之　東京大学史料編纂所
◎小倉　慈司　本館・研究部・准教授
高田　貫太　本館・研究部・准教授
永嶋　正春　本館・研究部・准教授
平川　　南　本館・館長

［リサーチアシスタント］

高木　　理　早稲田大学・大学院生

「近現代展示における歴史叙述の検証と再構築」2010～2012年度

（研究代表者　原山　浩介）

1．目的

本共同研究は，近現代史をめぐる歴史展示に関わる諸課題を検討し，展示の背景になっている歴史叙述に関わる問題点の抽出，さらに歴史叙述及び歴史展示の将来像を構想しようとするものである。近現代史，なかでも時間的・内容的に現代との関わりが深い歴史の表象をめぐっては，いくつかの課題がある。これは，近現代をめぐる歴史叙述が，その時代を生きた者が生存しているなかで，歴史が生々しく語られていることを前提として成立してきたことと関係している。こうした近現代史の性格は，しかし，それら語り部となるべき人びとの他界と，それに伴う伝承の途絶により，変容を迫られることになる。

この局面は，展示において先鋭的に表面化する。展示は，書籍や教科書といった媒体と比べて，専門性を背景にした研究ベースの歴史叙述と，一般の来館者などの受け手を，よりダイレクトに対峙させる媒介となる。具体的に本館の展示に即していえば，既存の第５展示室，ならびに平成22年３月に開室した第６展示室と関わって，主に「戦争」と「日朝関係史・在日朝鮮人史」をめぐって，既に問題が露呈しつつある。本共同研究では，以下のふたつの課題を軸に議論を進め，現代史叙述の見直しの第一歩とする。

「戦争」をめぐっては，本館第６展示室における展示が，これまでの歴博における戦争研究の到達点であるのみならず，学界における研究や他館における展示の現段階を少なからず反映したものとなっている。これは，敗戦後に醸成された，戦争体験とその伝承に基づく，現代日本の政治ならびに思想状況に特有な戦争観を基底に据えている。しかしながら，戦争体験者が少なくなり，また日常の場における伝承が途絶えていくなかで，この戦争観を支える世代的なベースを喪失していくことが予想されるだけでなく，学校教育や博物館の展示場などにおいては既に言説と来館者や聞き手の乖離が始まっている。またその一方で，世界では第二次世界大戦までとは異なる性格を持つ戦争が起こっており，しかも日本社会はそれら戦争の背後にある構造から決して自由ではなく，そうした今日的な視角から戦争というものそのものを見直す必要が生じている。

こうした事情に鑑みたとき，戦争をめぐって博物館展示は変革を迫られていると同時に，平和ということを戦争との関わりからどのように伝えていくのかという点においても，これまでとは異なる手法や文脈化が求められているといえる。その兆候は，例えば，博物館では，既に「悲惨さ」に関わる展示手法をめぐる世代間の受け止め方の違いとして現れ始めており，また過去の日本の戦争について学ぶことが今日の世界の戦争に関わる理解と結びつきにくいという現象として表面化しつつある。

したがって本研究では「戦争」をめぐり，第二次世界大戦以降の世界における戦争のあり方とその変容を視野に入れ，かつ，日本社会が戦後においてそれら戦争を支える構造にどのように組み込まれていたのかを明らかにしつつ，戦争体験に依拠した既存の歴史叙述が醸成する戦争のイメージがそこからどれだけ乖離しているのかを見いだし，将来的に歴史叙述の中で，あるいは博物館における平和教育として，「戦争」をどのように表現していくことが可能なのかを模索することを主目的とする。なお，この課題は研究期間内に一定の結論を出し得ない重大さを持っているため，本共同研究においては，今後の歴史叙述ならびに展示の見直しを議論していく上で共有するべき論点を見出していくこととする。

なお，本共同研究では，歴博の展示に対する来館者等の反応が，現状把握のための重要なデータとなる。

さらに，第６展示室の展示内容に連動させる形で議論をスタートさせ，展示内容の見直しが迫られる際にはその対応も含めて検討する形で共同研究を進めていくこととする。

次に「日朝関係史」「在日朝鮮人史」に関しては，これまでの日本史の叙述において，必ずしも十分に説明されてこなかったことが，歴史展示のあり方にも強く影響を及ぼしている。すなわち，朝鮮人が日本に来るまでの諸要因が整理されないまま示され，その結果，例えば関東大震災における朝鮮人虐殺といった突出した出来事に過剰に象徴させることで，「差別」の局面を示すという手法を採らざるを得なくなっている。こうした展示は，「差別」の日常的な諸相を来館者に看過させる結果になるばかりか，近代以降の日朝関係や在日朝鮮人に関わる歴史を矮小化することにもつながっている。

この事態は，戦後における在日朝鮮人史についても同様である。1945年以降の歴史叙述においては，地政学的な状況を反映する形で，突如として「朝鮮」が日本の外部に置かれることとなり，日本にとどまった朝鮮人については，これを規定する諸事情が戦前以上に説明不足となる。

こうした諸問題が引き起こされる要因として，日本史におけるこれまでの関心の持ち方が，日本人の歴史への関心と，それ以外の他者への関心という形で分断され，双方に目配りした叙述が十分に検討されてこなかったこと，その結果，在日朝鮮人史は，日本史と朝鮮史の双方から疎外された状態になってきたことが挙げられる。加えて，とりわけ在日朝鮮人史およびそれと関わる近代の日朝関係史が，在日朝鮮人の権利獲得運動のなかで形成された一連の言説と混淆する形で歴史研究者を含む知識人により把握される例が少なくなく，このことが実証性の甘さと歴史像の単純化をもたらしている。

以上の状況に鑑み，「日朝関係史」「在日朝鮮人史」に関しては，この分野の歴史叙述をめぐって実証的な検証を行うとともに，日本において歴史としての文脈化がどのように可能かを検討する。また同時に，近年になって変化の兆しが見える，韓国における研究動向ならびに近現代史展示の動向を把握し，それらとの連動の可能性を探る。さらにこれらを踏まえて，最終的に日本において歴史展示を行う際にどのような手法が有効かを検討する。

２．今年度の研究目的・計画

共同研究員を拡充の上，前年度の内容を継続しつつ，今年度は特に，博物館における表象の特殊性と機能，ならびに戦争の理解に関わる理論的・思想的な枠組みについて議論に力を入れることとする。また韓国における博物館展示の現段階の調査，ならびに現地研究者との研究交流を行い，日朝関係史に関する日韓の研究動向の摺り合わせを行う。他方，日本社会が戦後の戦争にどのように構造的に組み込まれているのかの検討にも力を入れることとし，この点についての実証的な把握を目指す。

３．今年度の研究経過

個別の資料調査や展示をめぐる検討会のほか，下記の研究会を実施した。

第１回研究会（９月24日　山梨県北杜市）

上海事変に関わる個人所有の資料の調査を行い，その意義について検討するとともに，浅川伯教・巧兄弟資料館において展示視察を行った上で，同資料館の展示内容に照らして，近代の日朝関係史に関する歴史叙述のあり方に関する議論を行った。

第２回研究会（拡大研究会）（２月26日　国立歴史民俗博物館）

2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う原子力災害をめぐって，現代史と核問題の双方を視野に入れた研究会を実施した。ここでは，本共同研究のメンバーにとどまらず，広島市の平和記念資料館，長崎市の原爆資料館など，館外からの参加者を得て，「核問題」を歴史学の問題としてどのように受け止めるべきかをめぐって議論を行った。

第３回研究会（３月10日・11日　大阪市）

大阪市における猪飼野巡検を，昨年に引き続き実施した。さらに，リバティおおさかにおける展示視察を行った。これらを通じて，在日朝鮮人，ならびに日朝関係をめぐる歴史叙述の現状や，猪飼野における今日的な歴史把握の実態を把握するとともに，歴史叙述のあり方をめぐる今後の課題を検討した。

４．今年度の研究成果

昨年度末の東北地方太平洋沖地震を受けて，本共同研究の枠組みを再構築する必要が生じた。具体的には，戦時と震災という，異なる性格を持つ事態の双方を視野に入れることで，具体的にどのような議論が成立しうるのか，また関東大震災をはじめとする大正期から戦時期・占領期にかけての震災を，歴史叙述としてどのように成立させ，広く近現代史をめぐる今日的な関心と連動させるのかといった点の検討が必要であると考えられた。

こうしたことから，本年度は，昨年度の課題を継承しつつも，次年度以降の共同研究の組み替えを念頭に置いた動きとなった。とりわけ第２回研究会（拡大研究会）では，原子力災害と核問題をどのように連動させて考えるべきか，また逆に相互に異なる問題として考えるポイントはどこにあるのかといった点につき，議論を行うとともに，次年度以降の共同研究のベースを作ることとした。

本年度は，歴博の展示との関連は若干薄い経過となったが，次年度以降の新たな枠組みによる共同研究の下で，企画展示，ならびに関東大震災から戦時期・占領期にかけての歴史叙述の検討のなかで，再度，歴博の展示に根ざした形の議論を行うことを想定している。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

原田　敬一　佛教大学文学部・教授・日本現代史
山本　和重　東海大学文学部・教授・日本近代史
吉田　　裕　一橋大学社会学部・教授・日本近現代史
中野　　聡　一橋大学社会学部・教授・米比関係史
大串　潤児　信州大学人文学部・准教授・日本近現代史
荒川　章二　静岡大学情報学部・教授・日本近現代史
崎山　政毅　立命館大学文学部・准教授・ラテンアメリカ近現代史
冨山　一郎　大阪大学文学部・教授・植民地研究
矢口　祐人　東京大学大学院総合文化研究科・教授・アメリカ研究
趙　　景達　千葉大学文学部・教授・朝鮮史
宋　　連玉　青山大学経営学部・教授・朝鮮近現代史
慎　　蒼宇　都留文科大学・非常勤講師・近代朝鮮史
小川原宏幸　明治大学文学部・非常勤講師・近現代朝鮮史

宮本　正明　㈶世界人権問題研究センター・専任研究員・近現代日朝関係史
水野　直樹　京都大学人文科学研究所・教授・朝鮮近代史
高村　竜平　秋田大学国際文化学部・准教授・在日朝鮮人史
鳥山　　淳　沖縄国際大学総合文化学部・准教授
板垣　竜太　同志社大学社会学部・准教授・朝鮮近現代史
高岡　裕之　関西学院大学文学部・教授，戦時下の社会史
○久留島　浩　本館・研究部・教授・日本近世史
高野　宏康　本館・研究部・機関研究員・日本近代史
安田　常雄　本館・研究部・特別客員教授・日本現代史
◎原山　浩介　本館・研究部・准教授・日本現代史
高野　弘泰　本館・研究部・機関研究員・日本近代史

［リサーチアシスタント］

木村　智哉　千葉大学大学院社会文化科学研究科

「【展示型】『地理写真』の資料化と活用」2009～2011年度
（研究代表者　青山　宏夫）

1．目的

本館所蔵の「石井實フォトライブラリー」は，小学校・高校・大学の地理教員であった故石井實氏（1926-2007）が，終戦直後から2007年までの60年あまりのあいだに，日本各地（一部に外国を含む）で撮影した，40万点を越える「地理写真」を中心とする一大資料群である。本研究は，この「地理写真」を研究利用に供しうるように資料化するとともに，有効性と限界を見きわめつつ，その活用を図ることを目的とする。これは，近代以降において多量に残されている写真を，近現代研究に活用する可能性を探る試みでもある。また，最終年度の平成23（2011）年秋には，その成果にもとづいて企画展示を開催する。

近代以降，写真は多量に撮影されているが，撮影日や撮影場所などの基礎データが整備されたものは一部にすぎない。また，資料としての写真の利用法や読解法も含めた資料論も，必ずしも充分に確立しているわけではない。

このようななかにあって，石井實フォトライブラリーの写真は，撮影日ごとに整理され，克明な撮影日誌も残されている。本研究では，以上の点をふまえて，第一に，同フォトライブラリーの写真について，時間データ・空間データ・被写体・撮影テーマなどの付与すべき基礎データの検討と，写真資料データベースの検索法の検討を試みる（写真の資料化）。第二に，写真に写された景観について，①当該分野の専門的研究者によるモノグラフ的な視点，②関連する写真以外の資料からの検討，③写真相互の時間的・空間的連続性への配慮などの諸点から読解する（写真の活用）。とりわけ，自然景観･都市景観･農山村景観などや，生業･祭礼などの生活文化に注目して読解し，その成果を展示として公開する。これらを通じて，資料化・主題的研究・展示などを連関させて，写真資料を中心とした博物館型研究統合を実践する。

なお，本研究における作業効率の向上，および３年後に開催予定の企画展示とその後の写真資料の公開のために，同フォトライブラリーの写真フィルム約40万点について，適宜スキャニングしてデジタル化を進め

る。

2．今年度の研究計画

平成23（2011）年11月８日～平成24（2012）年１月15日を会期とする企画展示「風景の記録―写真資料を考える―」の準備をすすめる。そのために，写真資料論の立場を基本として，表現媒体としての写真の特徴，被写体としての風景の特徴，風景の歴史等に留意して，展示構想の詳細をつめる。展示する資料については，展示構想の検討と並行して，石井實フォトライブラリーの写真を中心として，関連する空中写真や地図・絵図，絵画，文献資料等のなかから，吟味のうえ確定する。また，必要に応じて，現地調査・撮影等も追加的に実施し，展示の具体化を図る。さらに，展示場において公開を計画している「地理写真データベース」（暫定版）および展示図録の制作を進める。

3．今年度の研究経過

展示型共同研究の最終年度として，企画展示の開設準備と展示に関する諸課題の検討をすすめた。

（1）石井實フォトライブラリーに収められた「地理写真」の読解と活用方法について検討した。

（2）長崎大学および長崎総合科学大学等において江戸及び長崎関係の写真資料を，横浜開港資料館において江戸関係の写真資料を調査・検討した。

（3）石井實フォトライブラリーの35ミリフィルムのスキャニングおよびバックデータの整理をすすめるとともに，芝浦工業大学工学部徳永研究室の協力をえてデータベースを試験的に制作した。

（4）動画像の活用について検討し，終戦直後の長崎上空から撮影した映像を企画展示において公開するためのコンテンツを作成した。

（5）地理写真を検討するなかで，撮影地の明示された絵はがきや描かれた場所が明確な錦絵等のもつ歴史資料としての価値に注目して，絵はがき等を集めて検討をすすめた。

（6）以上の検討をふまえつつ，展示構想の具体化と展示資料の選定をおこない，11月８日～１月15日に企画展示「風景の記録―写真資料を考える―」を開催した。

（7）展示図録を刊行したほか，２回の歴博講演会（11月12日および12月10日）および６回のギャラリートークを実施した。

（8）企画展示オープン後の12月11日に，展示場において共同研究員による展示合評会を実施するとともに，研究会を開催して写真資料を研究に活用する場合の諸課題や今後の展望について検討した。

4．全期間の研究成果

企画展示「風景の記録―写真資料を考える―」では，歴史と文化を考えるために欠かせない風景の記録として，写真が優れた歴史資料であることを探るために，写真の断片性に留意して，風景の空間性，歴史性，多様性の３点を中心にすえて構成した。展示場では，それら三者を相互に関連させながらも，それぞれ主に「第一章　広がる風景―江戸・東京の街並み―」「第六章　変わる風景―長崎の風景史―」「第七章　くらしの風景Ⅱ―東京の山村　奥多摩―」として主室に配置した。

空間性に関してはパノラマ写真を取りあげ，その資料的価値として，①風景を広がりとして記録していること，②細部をも具体的に記録していること，③単体として被写体になることのまれな風景ついても記録し

ていることを指摘した。一方，写真絵はがきは，名勝・旧跡や特別な施設などの，ある限られた風景を対象とするものがほとんどであるが，それが今に残されていない風景の場合には，画像とともに名称などの文字情報をも備えているために，写真という画像のなかで風景を画像として特定するための有効な資料となりうる。今回，写真に記録された風景の読解の観点から，この点をふまえてパノラマ写真と写真絵はがきとを相互補完的に活用する方法を試みた。

また，歴史性に関しては，定点撮影写真の検討により，風景の変化と社会の変容をとらえることができた。たとえば，東京の愛宕神社下の鳥居周辺において，近世から近代へ推移するなかで，役行者堂やバラックの撤去，石段・石灯籠や参道の整備などの変遷を「もの」にそくしてたどることができる。また，近代以降の大名屋敷の空洞化やその後の商業地化という風景の変化もみてとることができる。写真には，宗教や都市政策さらに社会の変容などが具体的な風景の変化として写し込まれていることを提示できた。

風景の多様性に関しては，多角的に撮られた多くの写真や，それらを組み合わせることが有効な方法となる。ある地域の生産と消費，文化と社会などの諸相，あるいは季節的変動などを切りとった写真や，それらの関連づけによる組み合わせから，東京奥多摩などを事例としてその地域性を提示した。一方，一枚の写真のなかにも多様な要素が写し込まれていることが少なくない。たとえば，京浜工業地帯において工場を背景とした海苔干し場，谷間の日向斜面と日影斜面における景観の差違，新道とその開通によって廃れた旧道との対比など，多角的な読解によっても風景の多様性をとらえることができる。

このほか，展示では，「第二章　くらしの風景Ⅰ―点描　東京の街―」「第三章　旅の記録と写真」「第四章　府県写真帖に残された風景」「第五章　風景を記録する―石井實と『地理写真』―」を設けた。なお，特設コーナー「風景の記録と記憶―東日本大震災によせて―」を設けて，震災前後の写真によって，くらしのなかで風景がもつ意味やそれを記録することの意義を問い直した。

写真を歴史資料として取り扱う際の課題の一つは，撮影の場所と時期の特定である。前者については，同時期の地図・絵図などによって検証することが不可欠であるため，幕末の江戸を撮ったパノラマ写真について当時の切絵図や錦絵との比較検討によって，写真の撮影場所の特定を行った。また，後者については，撮影者の行動を示す文献資料などの状況証拠のみにとどまらず，より直接的な読解として写真に写った陽射しから太陽高度と方位角を計算して撮影時期の特定を行った。その結果，F．ベアトが江戸愛宕山から撮った有名なパノラマ写真が，1863年８月下旬の午前９時半頃に撮影されたものであることが明らかになった。

石井實フォトライブラリーのデータベース化としては，暫定版ながら1949～1970年の写真を公開することができた。34,000コマ余りの写真を撮影年と撮影場所から検索することができ，来館者には高い関心をもって閲覧された。とくに，自らの経験や記憶に照らして写真に見入っている人が目立ち，写真がもつ人をひきつける力を改めて実感することができたが，だからこそ歴史資料として写真を利用するためには，より客観的な読解が重要となる。

また，奥多摩の写真に関しては，撮影年のほかに，祭礼，学校，生活，農，山，自然などのテーマによる検索も可能な簡易版データベースを公開した。石井實フォトライブラリー全体についても，撮影年や撮影地にとどまらず，テーマや写っている諸要素などから検索できるデータベースの構築が課題として残った。

写真を歴史の研究資料として活用することは，まだ緒についたばかりである。一方で，これまでに残された膨大な量の写真は，近現代史の重要な資料になることはまちがいない。写真の史料批判や読解法の開発とともに，各地に残る写真の発掘と保存，整理と資料化をすすめていくことが，今後に残された大きな課題で

ある。

なお，共同研究の中間報告をかねて，企画展示の開催に先立って，歴史系総合誌『歴博』158号（2010年1月刊）において特集「写真・風景・歴史」を組み，共同研究員による４本の論考と２本のコラムを掲載した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

島津　俊之　和歌山大学
中林　一樹　明治大学大学院
松尾　容孝　専修大学
畠山　　豊　町田市立博物館
福田　珠己　大阪府立大学
安達　文夫　本館・研究部・教授
久留島　浩　本館・研究部・教授
松尾　恒一　本館・研究部・教授
◎青山　宏夫　本館・研究部・教授
磯谷　達宏　国士舘大学
関戸　明子　群馬大学
椿　真智子　東京学芸大学
小方　　登　京都大学大学院
三木　理史　奈良大学（2010年度より）
大久保純一　本館・研究部・教授
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
○原山　浩介　本館・研究部・准教授

［リサーチアシスタント］

辰巳　唯人　東京芸術大学・大学院生

「【展示型】中世の技術と職人に関する総合的研究」2010～2012年度
（研究代表者　村木　二郎）

１．目的

職人技とも呼ばれる日本の伝統技術は，中世に大きく花開いた。海外へ輸出される貿易品目にも工芸品が名を連ね，銅鏡のように中国や朝鮮半島で日本製品のコピーが作られるまでに至る。そういった技術を支えた職人たちの具体的な姿が，次第に明らかになりつつある。

新潟県新発田市北沢遺跡では，陶器窯と製鉄炉，炭焼窯，杣場遺構が一緒に見つかっている。茨城県東海村の村松白根遺跡は大規模な製塩遺跡であるが，遺物から骨細工や鋳物師の存在も知られ，複合的な生産状況が窺える。また，博多や京都，鎌倉などの都市部のほか，港や宿でも生産関連の遺跡や遺物が多数発見され，その蓄積は膨大なものである。さらに，大分市豊後府内遺跡や長崎の遺跡群からは，「キリシタン関連遺物」を中心に海外の技術が多数見受けられる。外来技術が果たしたインパクトとその受容の経過は，技術の転換をリアルに示してくれる。しかし，こういった事例は個別に検討されてきたものの，なかなか全体像を把握するまでには至っていない。そこで，いくつかのテーマにそって整理をし，研究を進めたい。

まず，「時代を作った技術」として，巨大石塔造立，鎌倉大仏鋳造，安土城築城など時代のモニュメントが示す技術の集約を考える。鉄砲のように最先端技術がすぐに反映される道具や，技術の粋を集めた美術工芸品，外来技術もその対象となる。これらは時代のエネルギーの結晶であり，それぞれから技術の到達点を明らかにしたい。

次に，「日常生活を変えた技術」として，焼物，漆器，木製品，石製品やそれらを加工する道具についての基礎的な研究をおこなう。古代以降の技術転換によって道具が普遍化し，中世の生活変化をもたらした。

また日常生活道具ゆえに，それらの生産も消費者の動向を直接反映してさらに変化してゆく。陶器が一般消費者に浸透すると，いかに安くて大量に生産するか工夫を重ね，窯の構造が大きく革新した。同様のことは石臼にも言えそうで，河原の転石を利用して簡便に仕上げるものが登場する。その分，製品が粗悪化するため，道具の差別化も進んだと考えられる。時代性とも合わせ追究していきたい。

また，「技術を担った人々」として，町，村，海山の生産状況を具体的に検証し，技術者集団と権力の関係にまで踏み込んで考える。技術者の背後にある権力のあり方もまた，中世の特徴である。寺院から武家権力への権力交替，自立した職人の存在など，新たな遺跡の発見を踏まえて従来の文献史学との協業を具体的に大いに更新することも可能であろう。

以上のようにして，文献・考古・民俗・美術・分析科学などの多視点からの検討を重ね，新しい中世の技術史像を描きたい。そして，それらの成果を展示で公開したい。

２．今年度の研究目的・計画

今年度は２年度目にあたる。関連して申請していた科学研究費補助金の助成を受けることができたので，科研との共同メンバー「中世技術研究チーム」として活動する。昨年度収集した基本的な遺跡情報・文献資料情報をもとに，さらに必要事項を掘り下げて，展示に利用する資料を絞っていく。そして重要な遺跡はできるだけメンバー全員で見学し，情報を共有しながら資料を調査する。また，今年度は展示を見据えた具体的な研究報告を，メンバー各人最低１回はおこなうこととする。

ほかにも，展示で活用できる資料の複製品を製作していく。博多遺跡群出土の生産関連資料を計画している。

３．今年度の研究経過

第１回研究会（５月14・15日　国立歴史民俗博物館）

全員報告：展示に関連した研究計画

個別研究報告：藤原重雄「絵画資料と技術」

館蔵資料の熟覧・検討：小野正敏・村木二郎

第２回研究会および現地調査（６月３～５日　平泉・一関）

平泉町教育委員会・岩手県教育委員会所蔵資料調査

柳之御所遺跡・白鳥舘遺跡・骨寺村荘園遺跡の現地調査

第３回研究会および現地調査（８月７～９日　新潟）

新発田市教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟市文化財センター所蔵資料調査

奥山荘の現地調査および，出土遺物調査

第４回研究会および現地調査（10月８～10日　能登）

石川県輪島漆芸美術館所蔵資料調査

能登の中世遺跡現地調査

第５回研究会（12月22・23日　国立歴史民俗博物館）

個別研究報告

栗木　　崇「鎌倉大仏の礎石について」

佐々木健策「泡沫的社会状況による技術の移入と展開」
松田　睦彦「近現代の花崗岩採石用具とその技術」
小野　正敏「戦国期の膨張する消費を支えた越前焼生産」
川口　洋平「東南アジア陶磁と黒漆，そして吹きガラス―南蛮貿易をめぐって―」
高橋　一樹「中世の稲作技術について」
村木　二郎「中世前半における銅細工―京都七条町・八条院町の検討―」
藤原　重雄「金光寺所蔵『仏説目連救母経』紙背の夢想を注進する起請文―泊浦・道智上人周辺の夢語り―」
佐伯　弘次「海外技術の移入―瓦・薩摩塔・梅園石―」
関　　周一「中世の技術に関する史料―漆と渡来職人―」
福島　金治「中世前期の寒冷気候と在地での産業拡大」

第６回研究会（２月11・12日　国立歴史民俗博物館）

個別研究報告
中島　圭一「商品流通から技術の転換を考える―文献史料は十五世紀生産革命論の夢を見るか―」
大澤　研一「寺院と技術・職人―展示に向けて―」
高木　徳郎「中世前期の林業と村落」
齋藤　　努「金属の製錬・加工技術について」
鈴木　康之「中国地方における中世の鉄生産と流通」
池谷　初恵「東国における中世初頭瓦の様相―文様と製作技術の系譜から―」
藤澤　良祐「戦国期の膨張する消費を支えた施釉陶器生産」
坂井　秀弥「中世越後平野における低湿地遺跡―新潟市馬場屋敷遺跡検討会の報告―」
大庭　康時「博多遺跡群出土の生産関係遺物と遺構」
坪根　伸也「生産関連遺物と外来技術の導入―豊後府内出土遺物からの検討―」
仁藤　敦史「古代国家における技術者の雇用形態」
住吉　朋彦「歴博の五山版に見る版木のかたち―越前版の遺例６片を参考に―」
井上美奈子「中世を終わらせた化粧文化―「小町紅」が出来るまで―」
金沢　　陽「高麗と元の螺鈿技術―国を越える技術の複合―」
日高　　薫「南蛮漆器の調査研究―現状と課題―」

４．今年度の研究成果

平泉・新潟および能登の漆器生産に関して現地の遺跡等を見学しながら資料調査をおこなった。これらは企画展示においていくつかのコーナーを構成する重要な要素であり，資料見学に際しては展示を見据えて資料選定までできたものもある。研究会では，メンバー全員が報告をおこなうことで，現在抱えている問題が明確化され，来年度の視点を絞ることができた。

また，博多遺跡群出土のガラス生産関連の資料等を製作した。これらは本研究が目指す企画展示だけでなく，総合展示にも活用できる資料群である。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大澤　研一	大阪歴史博物館	小野　正敏	人間文化研究機構本部
川口　洋平	学識経験者	栗木　　崇	熱海市教育委員会
佐伯　弘次	九州大学大学院	佐々木健策	小田原市
鈴木　康之	広島県立歴史博物館	関　　周一	つくば国際大学
坪根　伸也	大分市教育委員会	中島　圭一	慶應義塾大学
福島　金治	愛知学院大学	四柳　嘉章	石川県輪島漆芸美術館
齋藤　　努	本館・研究部・教授	高橋　一樹	本館・研究部・准教授
仁藤　敦史	本館・研究部・教授	日高　　薫	本館・研究部・教授
○松田　睦彦	本館・研究部・助教	◎村木　二郎	本館・研究部・准教授

「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」2011～2013年度

（研究代表者　静永　健）

１．目的

本公募研究は，高松宮家伝来禁裏本等のコレクションの中から，特に漢籍に重点を置き，その読書歴史（何を，どのように読んだか）と，またその本文についての精密な調査を行い，それらの書籍が，何時，どのようにして我が国に伝来したのか，そして宮家所蔵となる過程にどのような事実があったかを究明するものである。

中でも『古文孝経』や『周易抄』，『論語集解』，『二十一史』，『白氏文集』については，宮内庁書陵部蔵本等との比較調査を通じて，日本における漢籍の受容とその展開のありかたを具体的に把握する。例えば高松宮本の中に室町前期尊円親王筆と伝わる「琵琶行」および「長恨歌」があるが，これら白楽天の漢詩は，現在一般に通行している本文と著しい異同がある。その本文系統の考察は本研究代表者静永および分担者の神鷹，山口，陳などがこれまでにも他の伝来資料をもとに随時分析をすすめてきている。今回，歴博に所蔵される高松宮家伝来禁裏本に存するこれら白楽天の詩巻を中心に，日本の全国各地に伝来している白詩旧鈔本を整理し分析することで，我が国の平安中後期からおよそ室町期までに至る「知」の体系とその伝承過程を究明したい。

研究期間内には，これらの文献資料の公開（写真版等による出版）と分析を行い，内外の研究者の利用に便ならしめたい。また，年数回に分けて行う調査活動のうち１回は，テーマに応じて，中国・韓国等，海外の文献学研究者をも招き，これらの資料を「東アジア」の視点から眺めた意義について，共同調査と研究懇談会を開催し，その知見を更に深めてゆきたい。なお，この研究は，もちろん和書（和歌文献など）の研究促進にも役立つ。『和漢朗詠集』や中世の『和漢聯句』などの漢籍と交響する和歌文学についても，中国文学×日本文学の垣根を超えて，新たな知見が提示できるものと思う。

２．今年度の研究目的・計画

研究を開始する本年度は，まず本研究に参画する研究分担者が集まり，複数回に分けて，歴史民俗博物館

の当該資料の本文についての精密な調査を行う。特に高松宮家本「長恨歌」「琵琶引」および田中穣氏コレクション『白氏文集』残巻の本文研究等を集中的に行う。また11月の研究会においては，規模を拡大し，内外の漢籍研究者研究者を招聘し，実際に共同での熟覧調査を行うほか，国際シンポジウムを開催し，海外研究者から見た日本の旧鈔本の研究価値について，我々日本の研究者との意見交換を行う。更に我々の研究成果を内外の研究者に発信し，さまざまな助言を仰ぐべく，８月に中国南京市で開催される中国文選学会や，10月に九州大学で開催される日本中国学会等において研究発表を行う。

以上の活動を通じて，日本に伝承されてきた漢籍の意味を根底から再考することを目指す。

３．今年度の研究経過

第一回研究会　６月１日（水）　於歴博

報告①静永健「尊円法親王筆『長恨歌』の本文について」

報告②小倉慈司「禁裏本の概要」

第二回研究会　９月19日（月）　於歴博

報告①井原今朝男「蘭渓道隆墨跡調査報告」

第三回研究会　10月８日（土）　於九州大学

報告①陳翀「旧鈔本『長恨歌序』の真偽」

第四回研究会　11月５日（土）　於歴博

（国際シンポジウム「創設期の金沢文庫と南宋版漢籍」）司会：静永健・井原今朝男

報告①孫明君（中国・清華大学）「六朝士族文学研究概況」

報告②謝思韋（中国・清華大学）「唐代出土墓誌与文学研究」

報告③多田伊織（国際日本文化研究センター）「流転する書物―小島尚絅と楊守敬の収書」

報告④西岡芳文「神奈川県立金沢文庫の沿革と研究の現段階」

報告⑤陳才智（中国・社会科学院）「《白居易資料新編》芻議」

報告⑥劉　石（中国・清華大学）「中国大陸古代書法著述的整理出版」

報告⑦陳　翀「『管見抄白氏文集』の成立と金沢文庫の創設背景」

報告⑧福島金治（愛知学院大学）「『管見抄』と『鳩嶺集』のあいだ」

ゲストスピーカー：池田昌広（佛教大学）・戚世雋（九州大学）・町泉寿郎（二松学舎大学）・永塚憲治（北里大学）・諸田龍美（愛媛大学）・洲脇武志（実践女子大学・非常勤講師）

第五回研究会　平成24年１月14日（土）　於歴博

報告①静永　健「『史記』と日本」

報告②洲脇武志（実践女子大学・非常勤講師）「『史記』注釈書に引かれる『漢書』の注釈」

第六回研究会　平成24年２月23日（木）

来年度の研究計画について

第一回資料調査　６月２日（木）於歴博。調査者：静永健，神鷹徳治，陳翀，高田宗平

第二回資料調査　７月１日（金）・２日（土）・３日（日）於歴博・国会図書館・大東文化大学　調査者：静永健

第三回資料調査　８月22日（月）・23日（火）・24日（水）於歴博　調査者：中尾健一郎

第四回資料調査　９月18日（日）於国会図書館　　調査者：陳翀
第五回資料調査　９月20日（火）於歴博　　調査者：静永健・中尾健一郎
第六回資料調査　10月５日（水）～６日（木）　於大分県立先哲史料館　調査者：高田宗平
第七回資料調査　11月６日（日）於神奈川県立金沢文庫
　　調査者：静永健・陳翀・大渕貴之・高田宗平・福島金治・井原今朝男・西岡芳文
第八回資料調査　平成24年１月13日（金）於歴博　　調査者：静永健・神鷹徳治・陳翀・大渕貴之
第九回資料調査　平成24年１月24日（火）於歴博　　調査者：山口謡司
第十回資料調査　平成24年２月22日（水）・23日（木）於歴博
　　調査者：静永健・陳翀・土屋聡・神鷹徳治。
海外学会での研究発表および国際シンポジウム開催のための打合せ（招聘講師との事前交渉）
８月23日（火）～30日（火）中国文選学会参加　於中国・南京市
　静永　健・陳　翀「《文選》与《文集》―対東亞古代漢籍流変史的一個考察」
　陳　　翀「曹憲籍貫行歴新証及其《文選》佚注彙考」
12月27日（火）～30日（金）中国文論国際学術シンポジウム参加　於中国・上海市
　静永　健「論十世紀日本唐詩選集《千載佳句》之文献価値」
　陳　　翀「辨僞存真：《文筆眼心抄》古抄巻献疑」

４．今年度の研究成果

本年度はまず研究対象となる歴博所蔵の貴重漢籍の熟覧調査，および近隣の漢籍との比較調査を系統的に行った。そして高松宮家伝来禁裏本コレクションの中から尊円親王筆『長恨歌』および同筆『琵琶引』を，田中穣旧蔵コレクションの中から『白氏文集』４巻と『白氏後集』１巻，中山忠敬旧蔵書の『千載佳句』等について，本文調査の研究のためのデジタル写真撮影を行った。これらの漢籍には訓点のほか，さまざまな校勘書き入れがあり，朱筆などによる書き分け，胡粉による塗抹等もあり，実見による調査だけでなく，デジタル写真によるカラー画像を用いて更に綿密な読解作業が必要であるからである。

また海外，特に中国の研究者との意見交換を積極的に行い，日本国内だけの見方を脱した，グローバルな視野に立って，これら「日本旧蔵漢籍」の意義について考察を重ねた。11月の歴博での研究会のほか，研究代表の静永および陳が中国に赴き，彼地で開催される国際シンポジウムに参加し，最新の研究成果を発表したのはその一環である。

なお来年度以降の研究の進展のため，本年度に得られた知見のうち，特に注目すべき三点を挙げておく。

①「奥書」解読の重要性：日本中世の筆写本漢籍，いわゆる「旧鈔本」には，その巻末に筆写者および校訂者の日付と書名，すなわち「奥書」が記されている場合が多い。これらについては，その巻子本の最も基本的な書誌情報であり，目録整理等においてはこれまでも必ず参照されてきたところであるが，これを日本中世史の側から考証のメスを入れてゆくと，更に興味深い事実が判明する。例えば「金沢文庫」を中心に，多くの貴重書が集積された鎌倉時代について言えば，それらの漢籍がいったいどのような人脈経路を通じて筆写されるに至ったかが判明する。鎌倉将軍家（宗尊親王）と石清水八幡宮との関係（『白氏文集管見抄』），また安達泰盛と高野山との関係（『九条本文選』）など，これらの「知」の人脈は，これら旧鈔本漢籍研究によって更に幅広く解明されつつある。

②失われた本文を求めて：日本に伝来する旧鈔本漢籍は，その書写年代の古さから考えても，中国の「敦煌出土文書」に匹敵するものが数多く存在する。しかも，その量や保存の状態について見ても，敦煌研究と全く遜色が無い。しかし，彼地および欧米で推進されている「敦煌学」の現状に比べ，日本に所蔵されている旧鈔本漢籍の研究活動は，極めて零細で，立ち後れている。この現状を打開するためにも本共同研究の参加者でもある静永健・神鷹徳治・山口謡司・土屋聡・高田宗平・そして陳翀らは，本年度に共著書『旧鈔本の世界：漢籍受容のタイムカプセル』を出版した。この他に歴博所蔵本においても，例えば上杉本『史記』の書き入れには，従来の『史記』研究を大きく進展される貴重な記述が頻出する（ちなみにこの書き入れは，日本の従来の古本史記研究の基本書である滝川亀太郎『史記会注考証』および水沢利忠『同校補』には収録されていない）。また田中穣本『白氏文集』『白氏後集』にも詳細な本文研究が急がれる。われわれの三年間の研究でこれらの問題がすべて解決することは不可能だが，能う限りこれらを明らかにし，後世の研究にバトンを引き継ぎたい。

③「書籍」の研究から「書棚」の研究へ：これまでの書誌学研究は，至極当然なことではあるが，個々の「書籍」が研究対象の中心となっていた。しかし，この「高松宮家伝来禁裏本」というコレクションの貴重なるところは，日本の伝統的な「知」の世界が〈点〉ではなく〈面〉として保存されていることである。そこには当然ながら和書があり，漢籍がある。また少なからず仏典も所蔵されている。実はこの和漢兼修，そして儒仏併存の状態こそが，日本の中世に展開されていた一般的な伝統的「知」あり方なのである。これらのことは，各研究者の個別の研究だけでは解明することは難しく，必ずや我々のように日本文学･中国文学，そして歴史学等諸分野の研究者が共同で行うことが必要である。この点に関しては，本年度はまだ十分な成果を出すには至っていないが，次年度11月に開催が決定している国際シンポジウム「東アジアをむすぶ漢籍文化」において，具体的な成果を出したいと考えている。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎静永　　健　九州大学
　神鷹　徳治　明治大学
　土屋　　聡　岡山大学
　西岡　芳文　神奈川県立金沢文庫
　山口　謡司　大東文化大学
○井原今朝男　本館・研究部・教授
　高田　宗平　本館・研究部・外来研究員
　大渕　貴之　九州大学・専門研究員
　陳　　翀　九州大学・専門研究員
　中尾健一郎　梅光学院大学
　水口　幹記　立教大学
　小倉　慈司　本館・研究部・准教授
　高橋　一樹　本館・研究部・准教授

「柳田國男収集考古資料の研究」2011～2013年度
（研究代表者　設楽　博己）

１．目的

国立歴史民俗博物館には，柳田國男が明治後期に収集した考古資料が収蔵されている。収集された遺物には，「ソロイヨフカ」という注記があることからサハリンで採集されたと推測される磨製石斧や，北海道の縄文時代や続縄文時代の土器，「長野県下伊那下川路」で採集された打製石斧などがあり，合計66点の資料

からなっている。この資料は，柳田のご子息為正氏が成城の中原書店に寄贈したものを，歴博が収蔵したものであり，素姓の正しいコレクションである。

本研究は，これらの資料の整理作業と分析を通じて，柳田考古資料の全体像を明らかにするとともに，それを基礎に柳田の考古学に対する考え方の遍歴をたどり，明治～昭和初期という，日本のあらゆる学問が科学的な様相を帯びてくる時期に，考古学と民俗学がお互いをどのように意識しながらそれぞれどのように個々の学問の体系を構築していったのか，人類学や民族学，文献史学など周辺の学問とのかかわりあいのなかで明らかにしていくことを目的とする。

柳田がサハリンにわたった明治後期は，日露戦争によってサハリン南部が日本領となった時期である。柳田の渡海の目的や考古遺物を収集した目的は何であったのか。おそらく日本人とは何かという問題の解明が，目的のひとつであったと推測されるが，それは日本の領土拡張政策と深くかかわる動きであった。当時の諸学界をあげての研究テーマであった日本民族起源論争のなかで柳田のサハリン渡航目的を理解することを手掛かりに，周辺学問のこの問題に対する動きの意義を探ることを目的とする。

個別の主要な目的は，以下のとおりである。

① 柳田旧蔵考古資料の整理と分析
② 民俗学と考古学の方法論確立過程における相互交渉の理解
③ 柳田の考古学に対する考え方の変化とその理由の解明
④ 近代史学史における考古学・民俗学の位置づけ
⑤ 柳田國男旧蔵考古資料の学問的意義の検討

２．今年度の研究目的

考古班は，柳田考古資料の実測・写真撮影など，基礎的な整理作業をおこない，その年代や系統などの基本的性格をおさえることを目的とする。資料のなかには，明治40年代の新聞などにくるまれたものや，同じころの柳田の著作―樺太紀行―のなかに登場する遺物もある。サハリンで採集した貴重な資料も多く，現地で遺跡や遺物に触れて，理解を深める。民俗班はそれらを手がかりに，柳田が考古資料をどのような目的で収集したのか，樺太紀行が柳田のなかでどのような意義をもっているのか，他の文献なども手がかりとして明らかにする。明治40年代は遠野物語が書かれ，柳田のなかで民俗学という学問が形成されていった時期である。そのようなときに考古資料に触れながら，柳田がどのように民俗学を独立した学問として構築していったのか，考古学の方法論の形成と比較しながら検討する。

３．今年度の研究経過

計２回の研究会と１回の資料調査をおこなった。また，柳田國男収集考古資料の実測調査と写真撮影をおこなった。

【研究会】

第１回研究会　2011年６月29日

設楽博己　趣旨説明

蓑原康彦（ゲストスピーカー）「柳田國男収集考古資料の来歴」

設楽博己　「弥生土器第１号の謎」

（参加者全員）共同研究員の紹介と今後の予定

第２回研究会　2012年３月27～28日（山形県大江町中央公民館）

設楽博己「サハリン調査報告」

高瀬克範「柳田國男収集石器の使用痕分析」

小池淳一「柳田國男の考古学観」

（参加者全員）資料見学：大江町立歴史民俗資料館・小倉交流館・山形県立博物館

【資料調査】

サハリン調査　2011年１月20～25日

・サハリン国立大学考古学研究室

・サハリン州郷土博物館

４．今年度の研究成果

第１回研究会は，代表者が研究の目的と計画を披露して確認しあった。ゲストスピーカーとして，柳田國男収集考古資料を歴博に寄贈していただいた蓑原康彦氏をお迎えし，本資料の来歴などにつきお話しいただき種々議論した。その後，収集資料を参加者全員で見学し，考古学班が説明をおこなった。研究発表は設楽が弥生土器第１号の発見について発表し，弥生文化が認識されるようになったいきさつと，そのことが日本人とは何かという民族論争に影響を与えた意義につき議論を深めた。

第２回研究会は，高瀬が柳田考古資料のうちサハリン出土と考えられる石器を中心としてその使用痕分析をおこなった結果を報告した。サハリンの石器の使用痕分析は，おそらくはじめてのことである。石器には形態に応じて使用方法が異なっていたことが明らかになった。小池は柳田國男の考古学に対する発言をたどることによって，柳田がいだいた考古学に関する観方の遍歴につき報告をおこない，種々議論した。1930年ころを契機に発言のトーンに変化がみられることがあきらかになり，喜田貞吉と山内清男の間のいわゆるミネルヴァ論争が影響しているのではないかという予測がたてられた。また，いわゆるひだびと論争の意義も考古学側からだけではなく，民俗学などの立場からも見直してみる必要が指摘された。いずれにしても，この時期の民俗学と考古学は，その二つの学問だけでなく，民俗学や文献史学など周辺学問とのかかわりのなかでその動向を理解する必要がある。

資料調査はサハリンの施設２か所であったが，これは来年度の本格的な調査に向けて考古班だけでおこなった予備的なものである。いずれもサハリンの代表的な考古遺物を展示している施設であり，サハリン国立大学のワシレフスキー教授のご尽力によって資料を手に取って見学することができ，柳田収集の考古資料の理解を深めた。前田潮氏（東海大学非常勤講師，元筑波大学教授）に同行いただき，資料に対するご教授や先方との調整などもお願いすることができた。

柳田國男収集考古資料については補助業務によって石器の実測や土器の拓本，断面実測図作成を進めることができた。写真撮影は勝田徹氏にお願いして終了した。リサーチ・アシスタントの大澤正吾氏には上記の考古遺物整理作業をお願いするとともに，柳田の文献から考古学関係の記事をリストアップして入力する作業をやっていただいた。

5．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

熊木　俊朗　東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
高瀬　克範　北海道大学大学院文学研究科・准教授
福田　正宏　東北芸術工科大学芸術学部・専任講師
和田　　健　千葉大学国際教育センター・准教授
小池　淳一　本館・研究部・准教授
松田　睦彦　本館・研究部・助教
山田　康弘　本館・研究部・准教授
◎設楽　博己　東京大学大学院人文社会系研究科・教授
○工藤雄一郎　本館・研究部・助教

［リサーチ・アシスタント］

大澤　正吾　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

［ゲストスピーカー］

蓑原　康彦　中原書店

［研究協力者］

前田　　潮　東海大学非常勤講師・元筑波大学教授

［開発型共同研究］

「縄文時代における人と植物の関係史」2010～2012年度
（研究代表者　工藤　雄一郎）

1．目的

1980年代以降，低湿地遺跡の発掘調査事例が増加したことから，通常の遺跡では残りにくい植物遺体の検出例やその研究が蓄積されてきている。その結果，この20年で縄文時代の植物利用に関する研究が著しく進展し，植物利用の実態が解明されてきた。特に，縄文時代早期の段階でウルシやアサ・ヒョウタンといった外来植物が存在していたことや，縄文時代前期以降の東日本では，定住的な集落遺跡周辺にクリなどの人為的な生態系が維持され，野生植物を利用するだけでなく，植物の生育環境にも積極的に働きかけた植物利用が行われていたことなどが明らかになってきた。この中には，食料資源として利用したものだけではなく，建築・土木用材，塗料，繊維など，様々な形で利用されていた植物が含まれている。

縄文時代の人々が高度な植物利用技術を有していたことは一般的に理解されつつあるが，それぞれの種の利用が「いつ」，「どのように」始まったのか，また，縄文時代以降の環境変動史とどのように関係していたのか，またどの程度，縄文時代の人々が生態系を改変し，人為的な環境が作られていたのか，これらの諸点が正確には把握されていない。それにも関わらず，これまでの考古学研究では，特定の植物のみに言及して，「栽培」，「栽培植物」，あるいは「縄文農耕」といった点が追及されてきた。

本研究の目的は，縄文時代の人と植物利用の関係史を生態学的に明らかにすることである。そのため，縄

文時代の植物利用の実態について，現在明らかになっている遺跡出土資料を再検討し，人が積極的に働きかけたと思われる種の時空間的分布傾向を整理する。検討の主な対象とする植物は，縄文時代の人々と関わりが特に深い，クリ，ウルシ，トチノキ，アサ，ヒョウタン，ササゲ属やダイズ属などのマメ類，ヒエなどである。単に出土資料からその利用方法を検討するだけでなく，現在の植物利用との比較や，それぞれの種の生態的特徴や分布などを検討し，年代測定，木材化石分析，花粉分析，種実遺体の分析，デンプン分析，DNA分析などの最近の研究成果を融合して，縄文時代の植物利用の在り方を体系的に示すことを目的とする。

２．今年度の研究目的

22年度は共同研究員の既存の研究成果を持ち寄り，情報を共有することが中心となったため，23年度は主に下宅部遺跡の資料を扱い，土器圧痕分析，残存デンプン分析，花粉分析，顔料分析，年代測定などを進め，新たなデータの蓄積を進める。これにより，下宅部遺跡の縄文時代後晩期の植物利用をより明確化する。また，栃木県鹿沼市のアサ栽培農家の見学や茨城県常陸大宮市や大子町でのウルシ植栽地での花粉飛散調査によって，遺跡で採取した試料からこれらの栽培植物の花粉が検出された場合に，集落周辺の景観をどのように復元するべきかを考える重要な基礎データを収集する。

３．今年度の研究調査

○　研究会

第４回研究会　2011年５月15・16日　於：東村山市八国山たいけんの里

１．下宅部遺跡出土遺物見学会

２．下宅部遺跡の概要と出土遺物について（千葉）

３．下宅部遺跡から出土した土器付着植物遺体の残存デンプン粒分析（渋谷）

４．下宅部遺跡の河道土壌サンプルの花粉分析（吉川昌）

５．下宅部遺跡のクルミ塚から出土したウルシ果実について（吉川純）

６．下宅部遺跡の編組製品および素材束の素材同定（佐々木・小林・米田・鈴木）

７．下宅部遺跡の復元画の進捗状況（工藤）

第５回研究会：2011年10月22（土）・23日（日）　於：東村山市八国山たいけんの里

１．三内丸山遺跡の縄文ポシェットの素材について（鈴木・小林）

２．鳥浜貝塚の縄文時代草創期のウルシ材の再同定と年代（小林・鈴木・能城・工藤）

３．下宅部遺跡の土器に残る赤色顔料の分別について（永嶋）

４．下宅部遺跡の圧痕調査 結果報告（小畑・真邉）

５．下宅部遺跡の復元画の進捗状況（工藤）

６．来年度のIOP/IOPCのセッションについて（工藤・能城・那須）

７．最終年度の予定と研究報告，歴博フォーラム開催について（工藤）

○　資料調査

鹿沼市のアサ栽培農家，常陸大宮市のウルシ畑の見学を定期的に行った。これに関連して縄文時代の堆積物から花粉が検出された場合にどの程度の距離にアサやウルシがあったのかの基礎的なデータを得るため，

開花時期に合わせて鹿沼市のアサ畑周辺に花粉トラップを設置し，花粉飛散距離の調査をおこなった。茨城県常陸大宮市のウルシ栽培地においてもウルシ花粉飛散距離を調べるため，24年度の調査のための予備調査（トラップ設置可能場所の確認，雄株・雌株の本数の調査）を行った。百原によって発掘調査報告書に掲載されている大型植物遺体の分析例のデータベース化作業についても着実に作業を進めた。

４．今年度の研究成果

23年度は東京都下宅部遺跡の資料を中心に分析を進めた。小畑と真邉（研究協力者）が３回に渡って土器圧痕調査をおこなった結果，縄文時代後期の土器からマメ科種子の圧痕を検出することができた。

渋谷は昨年度に継続して下宅部遺跡から出土した土器付着植物遺体の残存デンプン粒のサンプリングを行い，また石皿・磨石類についても残存デンプン粒のサンプリングを行った。これらについては24年度に成果を報告できる予定である。下宅部遺跡の漆塗り土器の顔料分析では，赤色顔料にベンガラと水銀朱が用いられていることが分かっていたが，永嶋の分析によって水銀朱の比率が高いことがわかった。また，下宅部遺跡の土壌試料の花粉分析を吉川が実施し，また土壌サンプル中の植物遺体の^{14}C年代測定を工藤がおこなった。これにより，縄文時代中期から晩期までの時期を通して，詳細な年代に基づく花粉分析結果が得られた。これは，関東平野の縄文時代中期から後晩期の遺跡で初めてとなる事例であろう。

この他，鳥浜貝塚から出土した縄文時代草創期にまで遡るウルシ材の再同定を小林・鈴木・能城が行い，また^{14}C年代測定を工藤が実施した。漆利用の起源を考えるうえで極めて重要な鳥浜貝塚のウルシ材の年代を決定できたことは，今回の共同研究のなかでも最も大きな成果の一つである。また，宮崎県王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化鱗茎類の^{14}C年代測定を工藤が実施し，鱗茎類の同定を佐々木が行った。これは，縄文時代で最も古い鱗茎類利用の証拠であり，重要な分析結果が得られた。この他，現生マメ科種子の炭化実験（佐々木）や，ウルシ果実の同定（吉川）なども進めている。

５．共同研究員（◎は研究代表者）

小畑　弘己　熊本大学文学部・准教授
佐々木由香　㈱パレオ・ラボ考古分析支援部統括部長
渋谷　綾子　広島大学総合博物館・学芸職員　　篠崎　茂雄　栃木県立博物館・主任研究員
鈴木　三男　東北大学植物園・教授　　千葉　敏朗　東村山ふるさと歴史館・学芸員
辻　誠一郎　東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授
那須　浩郎　総合研究大学院大学学融合推進センター・特別研究員
能城　修一　森林総合研究所木材特性研究領域チーム長
百原　　新　千葉大学大学院園芸学研究科・准教授
吉川　昌伸　古代の森研究舎・代表　　吉川　純子　古代の森研究舎・研究員
坂本　　稔　本館・研究部・准教授　　永嶋　正春　本館・研究部・准教授
西本　豊弘　本館・研究部・教授　　◎工藤雄一郎　本館・研究部・助教

「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」2010～2012年度

（研究代表者　松田　睦彦）

1．目的

戦後の日本の経済成長は都市部への大量の人口移動を引き起こした。戦後の人の移動の特徴は，出発地点，すなわち故郷との双方向的移動ではなく，故郷へ帰ることを前提としない一方的移動であるとされる。つまり，一つの場からもう一つの場へと移動する場合，二つの場は断絶したものとされ，そこに生きる人間もどちらかの場に属した存在として，研究者の側からも，移動した人々自身の側からも語られるのである。その背景には，一定の場に軸足を置き，そこで生活を送る静的な存在としての人間認識が存在する。こういった認識は民俗学のみならず，これまで「出稼ぎ」や「移住」といった人の移動を研究対象としてきた社会学・経済史学・地理学等においても共通してみられるものである。しかしながら，このような視点は，実際には流動的で持続的な人々の移動を，固定的で一時的なものへと矮小化してしまう危険性を孕んでいる。移動を非日常的な状態として日常としての定住と対置することは，自らの置かれた状況に応じてさまざまな戦略・戦術を駆使する人々の生きる実態そのものをとりこぼすことにもつながりかねないのである。今日，U・J・Ｉターンのような団塊の世代の定年後の去就が注目を集めている。これは定年後の彼らの移動が都市への移動で完結したのではなく，現在でも持続していることを示している。つまり，人を静的な存在と捉え，人が一つの場のみとの関係性の中で生きることを前提とした研究では十分に分析することができない現実の存在が明らかになりつつあるのである。

本研究は，地方出身の都市生活者が常に移動の可能性を孕んだ動的な存在であるという前提に立つことで，人々の流動的な日常とその背景にある心意を捉え直すと同時に，都市や故郷という場の持つ意味を問い直すことを目的とする。すなわち，場によって人々を捉えるのではなく，人によって場の意味付けを問い直すのである。本研究では，移動や場に関する従来の研究の方法論を再検討し，新たな理論的枠組みを設定した上で，人びとの移動の実態に焦点を当てた実証的研究を行なう。その過程では，マイノリティとして特殊な状況を生きてきたアイヌや，独自の移動文化を育んできた沖縄の人々をも視野に入れる。また，隣接諸科学との協業による学際的研究を行なうことで多角的視野の獲得を目指すと同時に，人の移動とその動態に関する視点の重要性を共有したい。

以上のような作業は，人の生活を静的なものとし，人の移動を連続的・継続的に捉えない傾向にあったこれまでの都市論やふるさと論を相対化するものであると同時に，民俗学における場に頼った対象把握に再考を促すものである。

2．今年度の研究目的

前年度の研究会で共有することのできた，民俗学・歴史学・地理学・社会学・経済史学・文化人類学等，様々な分野における場に対する認識や，移動論・都市論・ふるさと論・都鄙連続論等に関する研究史の現状と課題をふまえた上で，共同研究メンバー各自が自らの研究計画に沿って調査・研究を進めると同時に研究会において発表し，討議を行なう。

3．今年度の研究経過

・第１回研究会（７月16日　KFC Hall & Rooms）

小池淳一氏（本館研究部）から，1970年代後半から都市民俗学が模索される背景について，当時の問題意識や研究史をふまえながらの考察が行なわれ，さらに90年代までの都市民俗学の展開についても報告が行なわれた。小池氏は都市民俗学が，民俗学を「現代社会や民俗変化を対象化する，非農村の民俗学へ発展的に解体する過程」であったと位置づけ，都市民俗学という問題設定がすでに歴史的なものとなったことを指摘した。しかし同時に，本共同研究のテーマである「人の移動」が新たな民俗学的課題として提示され得るのは，都市民俗学という過程で発見された多くの問題や概念があったからであることも指摘された（「都市民俗学はどこへいったのか」）。また，阿部年晴氏（埼玉大学）からは「後背地論から『民俗』を問いなおす」と題する報告が行なわれた。阿部氏の提示する「後背地」という概念は，「文化的動物としての人間とその生活が形成され再生産される場」と定義される。阿部氏は，人類社会の歴史は，基層部分から巨大化する諸組織と諸機能の出現へという方向性を持つという仮説的前提に立つが，後背地論は後背地における人間活動と，それに根ざしつつもその外部で展開する人間活動との間に存在する異質性と緊張関係へと目を向けさせるものである。

・第２回研究会（11月18～20日　長崎県壱岐市）

市山等氏（玄海考古研究所）より壱岐島の概況および壱岐の歴史・民俗に関する基礎的な報告が行なわれた（「神々と生きる島の人々・壱岐」）。また，福間裕爾氏（福岡市博物館）からは，壱岐島の玄界灘に浮かぶ島という地理的・歴史的環境をふまえた上で，壱岐の人びとにとっての移動がいかに日常的であったか，壱岐市芦辺町の土地制度，生業，流通などの具体的な事例から報告が行なわれた（「壱岐島の娘は何故にタビに出るのか―昭和59－61年芦辺町の民俗調査から」）。さらに，一支国博物館・城山公園・壱岐風土記の丘・壱岐松永記念館・石田町ふるさと資料館・芦辺町諸吉本村触・郷ノ浦町渡良浦において見学・調査を行なった。

・第３回研究会（２月24～26日　愛媛県今治市）

研究代表者である松田より「移動の舞台としての瀬戸内島嶼」と題する報告が行なわれた。本報告では，これまでの研究会における成果をふまえ，本共同研究の前提を物理的な移動に限定することなく，移動するということや，直接的・間接的に人びとが関わりを持つさまざまな場に対する心意についても捉えることの重要性が指摘された。また，歴史的に移動が日常であった瀬戸内島嶼部の生活の特徴が，愛媛県今治市宮窪町および伯方町の事例から示され，流動的な日常を前提とした研究の必要性が改めて指摘された。さらに，今治市村上水軍博物館・大島石採掘場・伯方町北浦集落・大山積神社において見学・調査が行なわれ，歴史的にも現代的にも，瀬戸内島嶼部において移動が重要な役割を果たしていることが示された。

4．今年度の研究成果

今年度はまず，人の移動や移動先としての都市という場を民俗学がどのように扱おうとしてきたのかという学史的検討や，人と場，人と民俗（習俗）との関係をとらえるための高度に抽象化された概念の提示とが行なわれた。これらはどちらも，民俗学が何を対象とし，その対象をどのように分析しようとする学問であるのかという，学問の根底を問いなおす視点の提示である。人の移動は，民俗学がこれまで有効な形で対象とすることができなかった課題である。人と（具体的・抽象的な）場との関係へのまなざしの転換を迫るこ

れらの発表の意義は大きい。

また，第二回目以降は，具体的な移動の事例が，その人びとを送り出す地理的・歴史的・文化的環境の中で把握された。人びとが如何なる環境の中で，どのような移動をしたのかということを，会議室での研究発表という形で聞くだけではなく，実際にその環境の中に身を置き，移動の痕跡を確認しながら共有する作業の意義は，来年度以降，メンバー各自の研究を深化させていくためにも非常に大きかったと考えられる。

5．共同研究員（◎は研究代表者）

岩本　通弥　東京大学大学院総合文化研究科
福間　裕爾　福岡市博物館
田中　藤司　成城大学民俗学研究所
室井　康成　東京大学東洋文化研究所
呉　　昌炫　韓国国立民俗博物館
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
小池　淳一　本館・研究部・教授
山田　慎也　本館・研究部・准教授
◎松田　睦彦　本館・研究部・助教
新谷　尚紀　國學院大學文学部
金子　　淳　静岡大学生涯学習教育センター
関口　由彦　成城大学文芸学部
門田　岳久　日本学術振興会
松尾　恒一　本館・研究部・教授
村木　二郎　本館・研究部・准教授
関沢まゆみ　本館・研究部・教授
原山　浩介　本館・研究部・准教授

［人間文化研究機構連携研究］

（1）「人間文化資源」の総合的研究
A「正倉院文書の高度情報化研究」2010～2014年度
（研究代表者　仁藤　敦史）

1．目的

歴博が創設以来，遂行してきた正倉院文書レプリカを基礎に，デジタル化したうえで表裏の接続状況を容易に観察できるシステムを整備する。そのうえで木簡・漆紙文書などとの比較により古代における帳簿・文書論の深化を目指し，さらには中世や近世文書との機能論的比較を行う。

約一万点に及ぶ正倉院文書は日本古代史研究の基本資料であり，文献史学だけなく多様な学問全般にわたる貴重な歴史情報資源の宝庫といえる。これまで豊富な内容を有する正倉院文書の情報は，保存の問題から十分には公開されてこなかった。これを原本保管機関である宮内庁正倉院事務所の協力を得て，デジタル情報として利用できる基盤を整備することは大きな意義を有する。

古代日本の歴史資源開発は，新たな古代史像を描くことを可能とし，まさに国立歴史民俗博物館が目指す「博物館型研究統合」（博物館という形態をもつ大学共同利用機関としての特徴を最大限に活かし，資料の収集・共同研究・展示を有機的に連鎖した研究）にふさわしい研究事業であるといえる。

正倉院文書に対する研究者の閲覧は極めて限られており，モノクロマイクロフィルムの焼き付けを使用することによって研究を進めるのが一般的である。そのため，朱やシミ色の区別などを区別することができず，

写経所文書の多くを占める帳簿の復元的な分析を行う場合に大きな障害となってきた。デジタル化によりその障害を克服し，正倉院文書の分析を飛躍的に容易化しようとする試みである。

資料目録を継続的に出版し，奈良時代フルテキストデータベースを作成している東京大学史料編纂所および原本保管機関である宮内庁正倉院事務所との連携が可能である。さらに正倉院文書研究の中心の一つである大阪市立大学の栄原永遠男研究室が中心となった科研データベースとのコラボレーションも可能である。

２．今年度の研究計画

五年間の研究計画はおおよそ以下のように予定しているが，重点的年次進行を示すもので内容は重複していく。

第一年目　レプリカ撮影およびデジタル的接続　三年目まで継続

第二年目　自在閲覧方式の改良（表示位置反転・微細連動表示・画面切り替えなど）

第三年目　写経所帳簿群の分析，下総・美濃国戸籍等の現地調査，中間総括シンポ

第四年目　中世・近世文書との比較検討，韓国文字史料との比較

第五年目　復元複製の作成，従来の釈文訂正，総括国際シンポ

第二年目の計画としては，自在閲覧方式の改良（表示位置反転・微細連動表示・画面切り替えなど）を中心に，公文情報をこれに入れ込み，高度情報化のツールとしての機能を検証する。ひきつづき，文献目録の充実と，個別断簡ごとの文書情報整理に着手する。下総国大嶋郷戸籍の現地調査を行い，地図情報などとの連携を模索する。韓国中央博物館での古代文字展示に出品される正倉院文書と韓国資料を比較検討する研究会を開催する。

３．研究経過

現地調査

日時：５月６日

見学地：下総国府，下総国葛飾郡大島郷比定地　ほか

主な見学場所

アイリンクタウン市川／伝真間の継橋／伝真間の井／弘法寺古墳／和洋女子大学文化資料館／

旧六所神社／明戸古墳／矢切りの渡し／柴又八幡神社古墳／胡録天神社／立石様

推定古代東海道駅路

第一回研究会　６月27日　歴博第二会議室

飯田剛彦　報告

「国立歴史民俗博物館蔵・山辺諸公手実をめぐって」

山辺諸公手実熟覧

安達文夫　報告

「正倉院文書と画像閲覧システム―22年度の到達点と今後の課題―」

仁藤敦史　報告

「第一期連携研究の実績評価について／中間総括シンポ構成案」

稲葉蓉子・溝口優樹氏　報告

「正倉院文書目録・関係文献目録の作成作業の進捗状況」

第二回研究会　９月21日　歴博第二会議室

高田智和　報告

「字体変遷モデルと国語研本『金剛頂経』の漢字字体」

山口英男　報告

「正倉院文書調査110年―史料編纂所の正倉院文書研究―」

「正倉院文書の高度情報化研究」の現況と来年度計画についての説明

正倉院文書画像閲覧システムの現況について（仁藤敦史）

企画展示「古代東アジアの文字文化（仮）」の展示計画についての説明（小倉慈司）

正倉院文書ＤＢの入力状況に関する説明（溝口優樹）

高田報告討論・山口報告討論

第三回研究会　11月４日　韓国中央博物館セミナー室

朴方龍「挨拶」韓国中央博歴史・考古室長

通訳　金東宇（韓国中央博物館）

報告１　仁藤敦史「正倉院文書研究と歴博複製事業」

報告２　栄原永遠男「正倉院文書研究の現状と課題」

報告３　山下有美「正倉院文書の性格とその特質」

コメント１　小倉慈司「日本古代史料における正倉院文書の位置」

コメント２　高橋一樹「中世文書研究からみた正倉院文書の調査・研究」

通訳　李鎔賢（韓国中央博物館）

４．研究成果

本年度は，現地調査において下総国戸籍のフィールドワークを実施した。さらに研究会において，正倉院文書の画像閲覧システム（正倉院文書の現状ならびに以前の状態に仮想的に並べ替えた表裏の画像を対応させて比較表示し，表示部分の文書のテキスト情報を提示する）の改善方法および，昨年度購入の正倉院宝庫外流出文書「山辺諸公手実」の接続情報および真偽判定の方法などを高度情報化の一環として議論した。また，東京大学史料編纂所の正倉院文書調査との連携の可能性についても議論した。本年度最大の成果は，韓国国立中央博物館でシンポジウムを開催し正倉院文書研究の概要をレプリカ展示とともに紹介したことである（講演会要旨集『正倉院文書の世界』韓国中央博発行・ハングル語）。これにより韓国人研究者の正倉院文書対する関心の高さと相互連携の可能性を確認した。一方，表裏自在閲覧システムの開発および正集・続修を中心とした公文複製写真のデジタル化を今年度予算で進め，正倉院文書にかかわる断簡ごとの文書目録の作成を進めた。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

栄原永遠男　大阪市立大学大学院・特任教授

飯田　剛彦　宮内庁・正倉院事務所・主任研究官

佐々田　悠　宮内庁・正倉院事務所・研究官

後藤　　真　花園大学・文学部・専任講師
山下　有美　学識経験者
高田　智和　国立国語研究所・准教授
富田　正弘　富山大学名誉教授
今津　勝紀　岡山大学大学院・社会文化科学研究科・准教授
倉本　一宏　国際日本文化研究センター・教授
山口　英男　東京大学・史料編纂所・教授
◎仁藤　敦史　本館・研究部・教授
高橋　一樹　本館・研究部・准教授
○小倉　慈司　本館・研究部・准教授
安達　文夫　本館・研究部・教授
鈴木　卓治　本館・研究部・准教授
［リサーチアシスタント］
稲葉　蓉子　早稲田大学大学院博士課程

B「近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究」2010～2014年度
（研究代表者　青木　隆浩）

1．目的

近年，伝統産業の衰退や大量生産・大量廃棄の進行，材料・素材の変化などにより，明治時代から高度経済成長期にかけての生活資料が急速に失われつつある。それに伴い，モノを生産してきた技術や道具の使い方なども，徐々に忘れさられてきている。博物館は本来，そのような生活資料を収集し，それに関する技術や知識を記録保存する使命を担っているが，例えば渋沢敬三のアチック・ミュージアムが工業製品を民具と見なさず，収集の対象から除外したことを典型として，民俗学や歴史学の博物館が近代化・工業化以降の生活資料を積極的に収集したとは言い難い状況にある。

また，近現代の生活資料はガラスや金属，樹脂など長期的な保存に向かないものが多く，全国の博物館でその扱いに苦慮している。だからといって，それらを記録・保存していかなければ，近現代の生活活動に関する博物館展示の手法が制限されてしまう。とくに歴博では第６室の現代展示がオープンし，さらに第４室の民俗展示の新構築を進めていることもあり，モノの状態や民俗学，近現代史学の研究蓄積に合わせた，生活資料の収集方針や整理・保存の方法をあらためて検討する必要に迫られている。

2．研究の意義

近現代の生活資料の収集・整理，保存は，まだ全国的にノウハウが蓄積されていない。それは主に素材の面から修復，保存が困難なためであるが，近現代の研究・展示を進展させていくためには，その可能性と限界をどこかで示す必要がある。そこで本研究は，近現代資料の状態調査を通じて，それらの収集から保存に至るまでの提案をいくつか示していきたい。

その際，本研究ではモノ資料を，産業史との関わりに重点をおくことに特徴をもつ。近代化・工場化，大

量生産の進展といった産業の歴史は，新商品の開発や素材・材料，部品の転換など，いわばモノの歴史でもある。大量生産・大量流通された近現代のモノ資料には，時代を遡るほど産地や製造年の不明なものが多いが，産業史と関連させることで，それを使用した地域や時代的背景を合わせて調査することができる。また，商品開発や素材・材料・部品の歴史が整理されれば，地域の生活史をモノの面からより具体的に復元し，かつそれらの情報をモノ資料の収集方針や保存計画にも有効活用できると思われる。

３．研究計画

まず，種類や材質が多様な館蔵の「金沢地方近代生活資料」（Ｈ－686）や「石川県白山麓山村生活用具」（Ｆ－12），「飛騨路の民具」（大塚集古資料館旧蔵コレクション，Ｆ－169），「婚礼衣裳・婚礼用具及び生活用具」（Ｆ－148）などを対象として，生活資料の分類・整理の方法を検討しつつ，素材分析を行う。

次に，分類・整理した生活資料を商品開発の歴史や素材の変化などと照らし合わせ，産業史・技術史の中に位置づけるため，商品カタログや取扱説明書，社史などを収集し，それらを用いて「商品･部品データベース」を作成する。商品カタログや取扱説明書などで明らかにできなかった主要な生活資料については，該当する業界団体や個別の企業への訪問によって情報をいただく。

以上の研究成果は，歴博の他，元興寺文化財研究所などでの研究会で報告し，情報を共有化する。

４．今年度の研究経過

第３回研究会　平成23年５月21日（土）・22日（日）　場所：石川県立歴史博物館

報告：小林忠雄（北陸大学）「金沢の都市民俗学―マテリアルカルチャーの視点から―」
松村敏「武士の近代―1890年代を中心とした金沢士族―」
青木隆浩「金沢地方近代生活資料の来歴調査（続報）―資料カードの作成―」

議題：近現代紙資料状態調査票の作成

見学：石川県立歴史博物館春季特別展「くらし＆娯楽の大博覧会―昭和ヒストリー―1926～1989」
石川県立歴史博物館収蔵庫

第４回研究会　平成23年10月７日（金）　場所：国立歴史民俗博物館

報告：原山浩介「ゴミと資料の間」
青木隆浩「連携版モノ資料状態調査の試行結果（第２報）」
青木隆浩「連携版近現代紙資料状態調査の試行結果」

第５回研究会　平成24年３月20日（火・祝）　場所：元興寺文化財研究所

報告：角南聡一郎「近現代民具を収集するということ―奈良県川上村白屋地区での実践を中心に―」
青木隆浩「連携研究版近現代紙資料状態調査の第２回試行結果」
青木隆浩「歴博第５・第６展示室演示具調査の結果報告」

調査：平成23年４月28日（金）　元興寺文化財研究所における保存修復方法の見学
平成23年４月29日（土）　金沢地方近代生活資料の来歴調査（於：金沢市）
平成23年５月23日（月）～25日（水）　状態調査に関する打ち合わせ（於：歴博）
平成23年10月６日（木）　状態調査に関する打ち合わせ（於：歴博）

連携研究版モノ資料状態調査の試行（第２回）　平成23年４月～７月　金沢地方近代生活資料（Ｈ－686）

のうち250点

連携研究版近現代紙資料状態調査の試行（第１回）　平成23年６月～９月　金沢地方近代生活資料（H－686）のうち250点

連携研究版近現代紙資料状態調査の試行（第２回）　平成23年10月～12月　金沢地方近代生活資料（H－686）のうち261点

金属分析　金沢地方近代生活資料（H－686）を対象に毎週木曜日に実施。使用装置はハンドヘルド蛍光X線分析装置と据置型蛍光X線分析装置の併用。

商品・部品データベースの作成とそのデータとなるカタログの収集

５．今年度の研究成果

本研究会では，誰にでも簡単にできて，かつ個人差の少ない状態調査票とそのマニュアルづくりを目指している。そこで，昨年度は連携研究版のモノ資料状態調査票とマニュアルを作成し，およそ250点の資料に対して調査を試行したが，素材の分類にいくつかの問題点が見られた。そのため，今年度はまずモノ資料状態調査票とマニュアルを部分修正し，再度調査を試行した。結果としては，だいぶ改善されている。

また，紙の素材と綴じ方が多様化し，脆くなっているのも近現代資料の特徴であるため，それに適した状態調査票とマニュアルを作成する必要もでてきた。そこで，第３回研究会では，近現代紙資料状態調査の試行結果を報告し，その問題点を検討した。その後，調査票を部分修正し，再試行した結果を第５回研究会で検討した。

昨年度から実施している来歴調査については，資料収集の方法や経緯がコレクションの性質を大きく規定することをあらためて認識させられることになった。このため，それらと資料の整理・保存の関係について検討することになった。とくに収集者と資料の間に中間業者が入ってしまうと，資料の来歴がよくわからなくなってしまうことが多いため，資料自体からできるだけ詳細なデータを探す必要が出てくる。本研究会では，資料に残された文字情報の他，商工業者の名簿や古い電話帳などを用いて，資料の来歴を追跡することを模索することになった。

一方，中間業者が入らない資料収集の場合，つまり所有者から直接資料の寄贈を受ける場合でも，様々な生活用具や生産道具，紙類などの中から何を選択し，資料として整理するのか，またその資料に関連して個人ないし地域とどのような付き合いをしていけばよいのかなど，資料収集・整理の課題は多い。今年度はその課題について報告をおこない，議論を始めた。

６．研究組織（◎は研究代表者）

松村　　敏　神奈川大学経済学部
金山　正子　元興寺文化財研究所
笹原　亮二　国立民族学博物館
◎青木　隆浩　本館・研究部・准教授
永嶋　正春　本館・研究部・准教授
山田　慎也　本館・研究部・准教授
本康　宏史　石川県立歴史博物館
角南聡一郎　元興寺文化財研究所
日高　真吾　国立民族学博物館
斉藤　　努　本館・研究部・教授
小池　淳一　本館・研究部・教授
原山　浩介　本館・研究部・准教授

C「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」2010～2014年

（研究代表者　内田　順子）

1．目的

映画のオリジナルフィルムには，撮影，編集，現像など，その作品の制作に関わる情報が豊かに備わっている。そのため，映画を歴史研究の資料として活かしていくためには，写っている内容についてだけではなく，フィルムという形ある物それ自体についての資料批判的な研究を同時に行うことが必要不可欠である。本研究では，歴博がコピーを所蔵している昭和初期の記録映画（ニール･ゴードン･マンローによるアイヌの記録映画および宮本馨太郎による民俗学的な記録映画。以下「マンローフィルム」「宮本フィルム」とする）を対象に，オリジナルフィルムを所蔵する機関と連携してオリジナルフィルムの資料批判的研究と内容調査を実施し，得られたプロファイル情報を映像と連動させることを通して，映画を歴史・民俗などの文化研究の資料として保存・活用するために必要な手続きを構築する。

2．今年度の研究目的

HDCAMテープに記録されたマンローフィルム･宮本フィルムについて，映像のデータベース化に向けて，パソコンで扱いやすい動画データに変換し，状態観察やショットリストに基づいてデータベースの項目を準備し，動画検索のプログラムを試作もしくはプログラムの外注を行う。研究成果の公開としては，北海道平取町二風谷で開催予定のニール・ゴードン・マンローに関する展示において，上映やパネル展示のかたちでの公開を予定している。宮本フィルムについては著作権の整理のための調査を行う。必要に応じて著作権に詳しい弁護士への相談も行う。

3．今年度の研究経過

2010年度に行った宮本フィルム（9.5mm）のパーフォレーション込みのHDテレシネ映像と，すでにHDテレシネ作業済みであってマンローフィルムの映像を，パソコンで扱いやすいフォーマット（HD Motion-JEPG AVI）に変換した。変換後，これらの画像を検討した結果，パーフォレーションを含めない場合よりも編集作業等の情報等を多く取得できることが明らかになった。そのため今年度は，パーフォレーション込みのテレシネ作業を行っていない宮本フィルムについてもその作業を優先して進めることとした。というのは，9.5mmオリジナルフィルムは，これまでの調査で明らかなとおり劣化が進行しているため，できるだけ早く作業を進めることが必要だからである。そのため，動画データベースのプログラム作成は来年度以降に行うこととした。またマンローフィルムについては，研究成果の一部を二風谷で開催された企画展示「マンロー先生と二風谷」（10月）で公開した他，今後の成果公開についての研究打ち合わせを，北海道・イギリスにて行った。さらに，連携研究：園田班・福岡班とともにシンポジウム「映像資料の保存と継承」（2012年２月27日）を開催し，フィルムや写真の保存技術や，保存・活用の際の権利処理について，３班に共通する課題をともに検討し，認識を共有することができた。

４．今年度の研究成果

①マンローフィルムおよび2010年度にHDテレシネを行った宮本フィルムのフォーマット変換を行い，内容分析や公開に使いやすいかたちにすることができた。

②マンローフィルムでは，前項によって得た動画から画像を取得し，二風谷で開催されたマンロー関係の企画展示「マンロー先生と二風谷」（2011年10月４日～30日，主催：マンロー先生を偲ぶ会，共催：平取町教育委員会）に協力し，マンローの動画から取得した画像や，動画の内容分析から明らかになった情報を提供し，成果の一部を公開した。

③宮本フィルムについては，パーフォレーションを入れたHDテレシネ作業を優先することとし，まだ作業を終えていない34本中，20本について作業を終えることができた。

④シンポジウム「映像資料の保存と継承」を開催し，映画・写真の保存，著作権の専門家の参加も得て，特に問題が複雑である権利関係について基本的なところを確認することができた。

シンポジウム「映像資料の保存と継承」2012年２月27日，於国立歴史民俗博物館

講演１：板倉史明（東京国立近代美術館フィルムセンター）

「フィルム保存と活用の実践例――東京国立近代美術館フィルムセンターの場合」

講演２：山口孝子（東京都写真美術館）

「東京都写真美術館における写真と映像資料の保存と活用について」

講演３：福井健策（骨董通り法律事務所）

「映像・画像のアーカイヴィングと著作権」

⑤マンロー及び宮本フィルムの今後の成果公開を検討するため，北海道，沖縄，神奈川，イギリスにおいて，調査または成果公開のための研究打ち合わせを行った。

５．共同研究員（◎は研究代表者）

板倉　史明　東京国立近代美術館フィルムセンター	加藤　　克　北海道大学・植物園・博物館
原田　健一　新潟大学	宮本　瑞夫　宮本記念財団
小瀬戸恵美　本館・研究部・准教授	鈴木　卓治　本館・研究部・准教授
丸山　泰明　本館・研究部・機関研究員	◎内田　順子　本館・研究部・准教授

（２）日本関連在外資料調査研究　2010～2015年度

１．研究目的

欧米における日本文化研究の比重が低下するなか，欧米・アジア諸国に現存する日本関連人間文化研究資料に関しては，専門研究者の不在・不足や個人所蔵であるなどの理由から，資料所在情報が把握できていないところも多く，また詳細調査が実施されていないためその全体像や資料的価値が確定していないものも多数存在する。これらについて，文化人類学，民俗学，歴史学，国文学，国語学，美術史学，アジア学など人間文化研究の諸分野の専門的研究者の派遣・招請を行うことによって，国際共同研究に基づく調査・研究を実施し，放置・劣化・散逸から資料群をまもって資料の保存・活用に道を開くとともに，資料の詳細な情報をはじめとする調査成果・研究成果に関わる情報を広く提供することで，国内外の日本文化研究の発展・

深化に貢献することを目的とする。

２．研究対象

日本関連在外資料は，世界各所に点在しているが，資料が作成された時代背景や海外に持ち出された事情等も様々であるため，本事業では比較的所在のはっきりしている，次の資料群を調査研究対象とする。

１）シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された在外資料（Ａ）

２）近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料（Ｂ）

３．研究方法

人間文化研究機構（以下「機構」という）に帰属する大学共同利用機関及び大学附置研究所などで個別に行われてきた在外資料に関する情報蒐集・調査・研究について，機構として計画的・組織的に研究体制を構築し，21世紀にふさわしい新たな国際共同研究を実施する。

さらに国際的な研究連携を密にした長期展望のもとで，さまざまな学術分野の国内外日本研究者による「在外資料」の総合的な共同研究を展開し，広義の日本文化研究と高度な教育に益する文化資源学的研究領域の創生を試み，海外における日本資料を早急に文化資源化及び体系化しながら国内外の研究者等が有効活用できるような情報を積極的に公開・発信する。

また，海外の貴重な在外資料等の整理・保管等がなされていない問題を解消するため，派遣・招聘を含めた国際研究ネットワークの構築を図り在外資料の維持に対処する。

４．研究成果の公開

日本関連在外資料調査研究の研究活動の結果として，以下のような全体的成果のとりまとめを行い研究成果の公開を実施する。

１．目録及びデータベースを作成しホームページ等での公開

２．国際シンポジウムによる調査研究成果の公開

３．書籍，論文集等の刊行による公開

４．巡回展示（海外での展示を含む）による公開

５．研究組織・研究計画

日本関連在外資料調査研究は，機構が設置する日本関連在外資料調査研究委員会が，企画・調整等を行い事業の総合的推進を図る。

調査研究は，Ａ・Ｂ２つの研究対象について総括機関（国立歴史民俗博物館及び国際日本文化研究センター）を中心として，実施機関及び連携実施機関が協力して次の調査研究を実施する。

なお，２つの研究対象について各々専門部会（各研究課題の代表者で組織する）Ａ及びＢを設け個別具体的な調査研究の実施計画等を審議する。また，２つの専門部会の調整組織として，各研究課題の総括責任者を中心として総括部会を設置し，日本関連在外資料調査研究の全体調整を図る。

本館では，Ａの研究総括および５つのチームを，Ｂではチームの一つを担当する。

A「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」2010～2015年度

（研究代表者　久留島　浩）

1．研究概要

本調査研究は，19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち，まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを，可能な限り総合的に調査研究する。その際，少なくとも資料に関する詳細なデータを，できる限り多く共有することで，同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち，下記に示すようにいくつかのモデルケースを設定し，国内外の研究者コミュニティが，詳細な「記録」というかたちであれ，「実物」のままであれ，未来にわたって「共有」するために，長期にわたって継続でき，かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案，実行する。同時に，すでに目録が整備されているもののうち，相互利用に関する合意ができる場合は，協定など利用規程を定めたうえで「共用」化を進める。さらに，資料群の現状（状態）を把握することで，今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指したい。

具体的な調査研究は，以下のとおり。

（a）シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究（詳細調査）

1）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究
＝19世紀前半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

2）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー･ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究（詳細調査）
＝19世紀後半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

（b）海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究

（概要調査が中心だが，一部拠点を決めて詳細調査を行う）

1）ライデンを中心とする，具体的な資料（書籍・地図・絵画など）にそくした詳細調査・目録化とそれをふまえた研究

2）北米・ヨーロッパにおける日本関連資料の概要調査とその目録化（いくつかの拠点を設定して詳細調査を実施し，その目録も作成する）

以上の研究を実施するために，次のような研究チームをたてることにした。

（a）①【ブロンホフ・フィッセルチーム】　代表：松井洋子（東京大学史料編纂所教授）

シーボルト父子コレクションの復元のための前提作業として，ブロンホフ･フィッセルのコレクションについての詳細目録（日本語版，できれば英語版も）を作成する（ライデン国立民族学博物館などと機構との間で協定を結ぶ必要がある）。【平成22～24年度】

②【ミュンヘンチーム】　代表：日高　薫（国立歴史民俗博物館教授）

ミュンヘン国立民族学博物館と共同で画像つき詳細目録を作成することを課題とする。この目録を作成するとともに，シーボルトの最後の「日本展示」を復元することで，あらためてシーボルト・コレクションの性格およびそれが表現しようとした「日本」とはどのようなものだったのかについて，できれば「復元展示」（シーボルトが構想した日本展示）を実施したうえで，議論する機会を

持ちたい（同館と機構との間で協定を結ぶ必要がある）。【調査目録作成は平成22～26年度，展示は平成25年度を予定】

③【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】　代表：宮坂正英（長崎純心大学教授）

ドイツ・シュルヒテルンのブランデンシュタイン家に収蔵されているシーボルトファミリーアーカイヴズについて，とくにアレクサンダーおよびハインリッヒ関係資料のうち未撮影のものについてデジタル撮影し，詳細目録を作成する。そのうえで，シーボルト（父）関係の未撮影資料があれば撮影する（協定が必要である）。なお，ボーフム大学にもシーボルト関係資料が収蔵されており，ブランデンシュタイン家文書と関連づけることができれば，両者の資料的価値も高まり，研究資源の共有化が進むことになる。この点では，この資料をデジタル撮影した宮崎克則氏および同大学との協力も不可欠である。（所蔵者・所蔵機関との十分な協議が不可欠である）【ブランデンシュタイン家の調査は平成22～24年度，ボーフム大学は平成24，25年度】

(b) ④【ロシア・北欧チーム】　代表：近藤雅樹（国立民族学博物館教授）

⑤【ライデンA（書籍）チーム】　代表：鈴木　淳（国文学研究資料館教授）

【ライデンB（地図・絵画など）チーム】代表：青山宏夫（国立歴史民俗博物館教授）

ライデン大学・ライデン国立民族学博物館などオランダにおける日本コレクションのうちのまとまった資料群について，画像つきの詳細な目録を作成する（日本関連書籍，地図，死絵などが具体的な候補としてあがっている（上記①のような協定を結ぶ必要がある）【平成22～25年度】。

⑥【イェールチーム】　代表：近藤成一（東京大学史料編纂所教授）

⑦【海外所在調査（概要調査）チーム】　代表：大久保純一（国立歴史民俗博物館教授）

現地の研究者･学芸員の助力を得ることができ，所蔵機関の了解が得られること（協定を結ぶこと）が前提ではあるが，北米・イギリス・フランス・スイス・ドイツにおける日本コレクションの基礎的所在情報を収集したうえで，何か所かの概要調査を実施し，概要目録を作成する。これについては，２年目に獲得目標を厳選する。

※北米では，モース・コレクションの現状調査を平成22年度に行い，今後の計画をたてるほか，アメリカではオークランド博物館【～平成27年度】，カナダでは文明博・ロイヤルオンタリオ博【～平成24年度】，イギリスではウェールズ国立博物館【～平成25年度】で博物館調査を始める。

⑧【異文化交流・情報共有化推進チーム】　代表：安達文夫（国立歴史民俗博物館教授）

調査地をとくに限定しないが，異文化間の交流という観点から在外日本関連資料の持つ意味を検討すること，および今回の研究の目玉でもある「情報共有方法」について検討することも不可欠なので，別途，チームを設ける。予算は，情報共有化のためのものを計上するが，メンバーが調査地を選択してそれぞれのチームの調査に参加するときの旅費は，それぞれのチームが負担することを原則とする。

※ロシア・北欧チーム，ライデンA（書籍）チーム，イェールチームについての記述は省略する

２．６年間の研究目的

（a）シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究

１）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究

①現在の所在が分散しているブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションに関する「総合的な目録」を作成すること。

②シーボルト･コレクションの自然史関係資料群と人文文化関係史料群との相互活用を進めること（調査・研究・公開のうえで，自然史系研究者と人文系研究者とが相互交流，共同すること）。

２）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー･ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究

①シーボルト（父）が二度目の来日（1859～1862）で収集したと考えられるコレクションの総合目録を作成すること

②シーボルトの二人の息子（アレクサンダーとハインリッヒ）自身が収集した日本関連資料，彼らが残した書簡・記録類，および彼らが収集に関わった日本関連コレクションについての所在とその概要を把握すること

（b）海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究

この６年間は，おそらく「概要調査」にとどまるものと思われるが，第一に，いくつかの資料所蔵機関（博物館・大学）で，まとまった「もの資料」を中心に，いくつかのデジタル画像つき詳細目録を作成することで，「もの」資料にそくした具体的な研究を進めるとともに，今後の調査研究上の課題を明確にしたい。具体的には，ライデンに伝来するブロンホフ・フィッセル・シーボルト収集の書籍や地図などを中心にしながら，少なくとも，海外の収蔵機関でどのような調査を行い，どのように記録し，目録化するかについてのモデルをつくることにしたい。同時に，資料収蔵機関・収蔵者および海外の日本研究者にとっても「共用」できるようにしたい。

３．今年度の研究目的（課題）

〔総括班チーム〕

・国際シンポジウムの開催

〔国立歴史民俗博物館チーム〕

・ブロンホフ資料目録の翻刻・翻訳作業を実施（３分の１粗原稿作成）

・ブランデンシュタイン家文書のデジタル化作業（長崎市撮影分は終了）

・アレクサンダーによるバイエルン王国への寄贈目録の翻刻，翻訳

〔国文学研究資料館チーム〕

・ライデン大学図書館会議室で，ライデン大学所蔵のシーボルト関係資料に関するワークショップを開催

・シーボルト等が蒐集した日本書籍について書誌的データを集積

・シーボルト等が蒐集した日本書籍に関する調査研究の成果として『国文研ニューズ』第22号に「オランダ国ライデン伝来ブロンホフ，フィッセル，シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」（執筆者：鈴木淳）を発表

〔国立民族学博物館チーム〕

・国際シンポジウムの開催

４．今年度の研究経過

【総括チームおよび事務局（歴博に設置）】

国際シンポジウム　10/18～20（於：OAGハウス・ドイツ文化会館）

「日独シーボルト・シンポジウム」参加

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」開催

※国際シンポ開催に伴う運営委員会の開催　4/21，6/10，6/27，8/5，9/22

科研共同研究成果報告会　12/3（於：長崎歴史文化博物館）

「幻の『シーボルト日本博物館』を追って」開催

※長崎純心大学比較文化研究所，長崎市シーボルト記念館との共催

ニューズレター２号，３号の発行

【ブロンホフ・フィッセルチーム】

調査・6/20～25　ミュンヘン国立民族学博物館（写真撮影）

・7/30～10/3　長崎歴史文化博物館～大阪歴史博物館ほか（江戸参府の足跡を辿る調査）

・9/5～18　ブランデンシュタイン城・ボーフム大学・ベルリン国立図書館・ベルリン国立民族学博物館（史料調査・写真撮影）

・11/18～25　ミュンヘン国立民族学博物館（資料調査）

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」参加

科研共同研究成果報告会　12/3（於：長崎歴史文化博物館）

「幻の『シーボルト日本博物館』を追って」開催

※長崎純心大学比較文化研究所，長崎市シーボルト記念館との共催

総合目録作成作業（ブロンホフ・フィッセル関係資料）

【ミュンヘンチーム】

調査・6/12～20　ミュンヘン国立民族学博物館（写真撮影）

・9/5～18　ブランデンシュタイン城・ボーフム大学・ベルリン国立図書館・ベルリン国立民族学博物館（史料調査・写真撮影）

・10/2～5　カナダ文明博物館（資料調査）

・11/18～25　ミュンヘン国立民族学博物館（衣料関係の資料調査）

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」参加

科研共同研究成果報告会　12/3（於：長崎歴史文化博物館）

「幻の『シーボルト日本博物館』を追って」開催

※長崎純心大学比較文化研究所，長崎市シーボルト記念館との共催

翻訳作業：『アレクサンダー・フォン・シーボルトによる国立ミュンヘン民族学博物館所在の彼の父親のコレクションに関する目録』

【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】

調査・6/12～20　ミュンヘン国立民族学博物館（写真撮影）

・9/5～18　ブランデンシュタイン城・ボーフム大学・ベルリン国立図書館・ベルリン国立民族学博物館（史料調査・写真撮影）

・11/18～25　ミュンヘン国立民族学博物館（資料調査）

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」参加

科研共同研究成果報告会　12/3（於：長崎歴史文化博物館）

「幻の『シーボルト日本博物館』を追って」開催

※長崎純心大学比較文化研究所，長崎市シーボルト記念館との共催

【ロシア・北欧チーム】

【ライデンA（書籍）チーム】

【ライデンB（絵図・絵画など）チーム】

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」参加

科研共同研究成果報告会　12/3（於：長崎歴史文化博物館）

「幻の『シーボルト日本博物館』を追って」開催

※長崎純心大学比較文化研究所，長崎市シーボルト記念館との共催

【イェールチーム】

【海外所在調査（概要調査）チーム】

調査・6/12～20　ミュンヘン国立民族学博物館（写真撮影）

・10/5～16　ピーボディ・エセックス博物館（調査交渉・写真撮影）

・10/4～8　ロイヤルオンタリオ博物館ほか（資料調査）

・12/7～11　ウェールズ国立博物館（浮世絵400点余の確認）

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」

【異文化交流・情報共有化推進チーム】

《2011年度進捗状況》

調査・6/12～20　ミュンヘン国立民族学博物館（写真撮影）

国際シンポジウム　10/27～30（於：滋賀県立琵琶湖博物館・大津市民会館）

「第５回シーボルトコレクション国際会議」参加

※ロシア・北欧チーム，ライデンA（書籍）チーム，イェールチームについての記述は省略する

５．全期間の研究成果

６．共同研究員（歴博が責任を負っているチームの構成員に限る）

総括班：久留島　浩　本館・研究部・教授　　日高　　薫　本館・研究部・教授

青山　宏夫　本館・研究部・教授　　大久保純一　本館・研究部・教授

安達　文夫　本館・研究部・教授
宮坂　正英　長崎純心大学人文学部
近藤　成一　東京大学史料編纂所★
澤田　和人　本館・研究部・准教授
斉藤　　努　本館・研究部・教授
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
角南聡一郎　元興寺文化財研究所
海江田義弘　長崎県庁
原田　博二　長崎純心大学
宮崎　克則　西南学院大学国際文化学部
松井　洋子　東京大学史料編纂所
鈴木　　淳　国文学研究資料館★
近藤　雅樹　国立民族学博物館★
青木　隆浩　本館・研究部・准教授
山田　慎也　本館・研究部・准教授
勝田　　徹　本館・事業課・専門員
大場　秀章　東京大学総合研究博物館
鳴海　邦匡　甲南大学文学部
小林　淳一　江戸東京博物館
賀井　篤平　東京大学総合研究博物館
マルクス・リュッターマン　国際日本文化研究センター
フレデリックス・クレインス　国際日本文化研究センター
ヨーゼフ・クライナー　法政大学大学院人文科学研究科
マティ・フォラー　ライデン国立民族学博物館
ヤン・シュミット　ボーフム大学
邦子・フォラー　アムステルダム大学ホイジンガ文化歴史研究所
原田　　泰　千葉工業大学工学部
笹原　亮二　国立民族学博物館
保谷　　徹　東京大学史料編纂所
山田　仁史　東北大学大学院文学研究科
三木　美裕　博物館展示コーディネーター
小山　周子　江戸東京博物館
後藤　恵菜　本館・研究部・研究支援推進員
櫻庭　美咲　本館・研究部・機関研究員

※歴博メンバー以外（★チーム）の研究員は省略した

B「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」
2010～2015年度
（研究代表者　鈴木　貞美）

●「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」
2010～2015年度
（研究代表者　原山　浩介）

1．目的

本研究では，北米・ハワイ，ならびにスペイン語圏のラテンアメリカに存在する日系移民関係資料をめぐり，資料状況ならびに資料を保有する諸機関・コミュニティ・個人の現状を調査する。その際，単なる資料調査に終わらず，資料を支えている日系人コミュニティの現状等にも焦点を当て，地域調査との連動を図るものとする。

本調査は，資料調査と地域調査を連動させて実施することに特徴がある。これは，次の二つの理由による。

第一に，一般に近現代史資料の保存は，それらが映し出す歴史に対する人びとの関心に支えられる形で成立しており，関心の希薄化は資料の廃棄や散逸につながる。日系移民関係資料についても同様で，とりわけ移民第一世代の高齢化は，資料保存の危機を招来する。本研究では，資料状況とともに，資料の保存を支えるバックグラウンドの調査を並行して実施する。

第二に，移民関係資料に関わるバックデータは，もちろん博物館等で整理されているケースもあるが，多くの場合，資料を維持する個人や地域社会，日系人団体などで共有されている口頭伝承に依拠せざるを得ない。したがって，資料調査と地域調査を連動させることで，資料の持つ意味を十全に把握する必要があると考えられる。

以上の点から，本調査を，資料―地域の双方を視野に収める形で進めていき，資料とそれを取り巻く周辺状況をトータルに把握することを目指すこととする。

２．今年度の研究目的・計画

北米では，シアトルでの資料調査を継続すると共に，サンフランシスコにおける予備調査を実施する。また，アメリカ合衆国・カナダにおける調査先のさらなる調査先の選定に着手する。中米では，メキシコでの調査を本格始動する。このほか，国語研の朝日班の活動との連動の下，ハワイにおける資料状況の調査を実施する。

３．今年度の研究経過

今年度，本グループは，未だ評価の定まっていない資料を発掘し，研究資源化することを主目的としつつ，調査を行った。

【中米】

メキシコにおける個人コレクションの調査

（１）個人コレクションの現状把握，ならびに資料をめぐる社会状況の調査（７月・２月）

【北米】

シアトルにおける写真資料の調査

（１）ワシントン大学，ウィングルーク・ミュージアム・MOHAIにおける未整理写真資料の発掘と調査に関わる交渉（５月）

（２）覚書内容に関わる相互検討と，作業委託の段取り

（３）デジタル化作業（作業委託）

【ハワイ】

（１）日系移民関係機関との関係形成，資料状況の確認，シンポジウムの実施。（シンポジウムは朝日班と合同）（８月）

（２）ビショップミュージアムとの覚書内容に関する検討，写真資料デジタル化を実施する対象の選定（２月）

４．今年度の研究成果

中米・北米・ハワイのそれぞれにおいて，具体的な作業の進捗があった。

メキシコでは，個人コレクターの資料をめぐって現状を把握するとともに，そもそも日本人関係の資料が，関係者や諸機関においてどのように扱われ，またアクセシビリティが確保されているか否かについてもおおよそのことが把握できた。本調査が，単なる資料調査のみならず，地域社会において資料がどのように取り扱われているのかということを含めて明らかにすることを目指しており，その意味ではかなりの進捗があっ

たといえる。

北米では，シアトルにおいて，ワシントン大学図書館とウィングルーク・ミュージアムとの間で，写真資料のデジタル化に関する基本合意に到達した上で，具体的な作業に着手することができた。

ハワイでは，朝日班とともに，ハワイ大学においてシンポジウムを実施し，研究交流を行いつつ，ビショップミュージアムを中心に具体的な資料調査と交渉を進めた。

北米・ハワイにおいては，国際的な資料の共有と，そのための関係構築が中心となった。これらはいずれも十分に進捗しており，来年度以降，さらに作業を深化させたいと考えている。

５．研究組織

中田　英樹　京都大学大学院文学研究科・グローバルＣＯＥプロジェクト研究員
三木　美裕　カナダ文明博物館
崎山　政毅　立命館大学
村川　庸子　敬愛大学
原山　浩介　本館・研究部・准教授
山田　慎也　本館・研究部・准教授
玉井　哲雄　本館・研究部・教授
秋山かおり　松本市博物館・嘱託職員

（３）活動提案
「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―」
2010～2012年度
（研究代表者　小島　道裕）

１．目的

中世～近世の都市社会を知る上で，具体的な都市を題材に描かれ記述された絵画や地誌はきわめて重要な素材である。しかし，その利用はまだ十分な形では行われておらず，機構に所蔵されている資源を中心に，そこに何が描かれているのかを明らかにし，共有化する作業を行いたい。そして，それを活用し，特に連携展示の形で公開することを目的とする。

対象とする都市は，資料が豊富な京都と江戸を中心とし，洛中洛外図屏風をはじめとする絵画類と，「名所図会」などの地誌類，および相互の連関を扱う。

２．今年度の研究計画

①国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館における研究会の開催

双方が所蔵する資料の熟覧を兼ねて，それぞれの機関に集合して研究会を開催する。併せて，連携展示についての内容を検討する。

②資料のデジタルデータ化およびデータベース化とその検討

双方の所蔵資料を中心に，デジタル化した素材を作成しつつ，その活用方法を検討する。

③他機関と連携しての資料の検討

具体的には，当面，重要な関連資料があり研究実績を挙げている「たばこと塩の博物館」の研究者に参加を求めており，東京国立博物館等にも協力していただく。

３．今年度の研究経過

研究会は，国文研，歴博での資料研究と研究発表を中心とする研究会の他，たばこと塩の博物館，東京国立博物館の資料閲覧もふくめて，計８回開催し，充実した資料研究を行うことができた。また，予定している連携展示の計画についても併せて協議を行った。

４．今年度の研究成果

資料研究としては，山東京伝「四季交加（しきのゆきかい）」，鍬形蕙斎「職人尽絵巻」，「洛中洛外図屏風歴博Ｅ本」など，展示を予定している多くの資料について，内容の読み解きを中心に理解を深めることができた。

作業としては，「洛中洛外図屏風歴博Ｃ本」「京都名所図屏風」などのデジタルデータ化や，名所図会類の校訂などを進めることができた。今後，展示および図録，ホームページなどで，公開・活用を図る予定である。

５．研究組織

大高　洋司　国文学研究資料館・教授
井田　太郎　国文学研究資料館・助教
小島　道裕　本館・研究部・教授
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
中村　康夫　国文学研究資料館・教授
岩崎　均史　たばこと塩の博物館・主席学芸員
大久保純一　本館・研究部・教授